

---

# 平凡な日々を愛したひとへ

かりんとう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

平凡な日々を愛したひとへ

### 【コード】

N6899K

### 【作者名】

かりんとう

### 【あらすじ】

もうすぐ27歳。夢だけをみるには現実を知り、親からの結婚へのプレッシャーと戦う日々。それでもこの平凡な日常が、ずっと続くと思っていた……。

ある日突然見知らぬ世界へきた、女性の生きる話。

## 1・平凡な日々

あの日、いつもと変わらない毎日がずっと、ずっと続くのだと思  
っていた。

人生いつ何があるかわからないなんて

生きてるってすごいことだなんて言いつつも、

本当の意味でわかってなんかいなかった。

もう、取り返しの付かないもの

もう、失われた日々。

真夜中の病院はとても静かだ。  
しかし、それでも物音が途絶えることはない。人の息づく音や、  
機械音、看護師の足音。  
音は何かしら聞こえてくる。

「ふわああああああ……」  
……  
……それが、あくびの声でも。  
……  
……  
「痛つ。もう、何!?!」

振り返るとため息つく同僚の姿。

「あんたねえ、もう患者も寝てるんだから、静かにしなさいよ。  
あと、一応女なんだから、あくびは隠しな」

「ごめんごめん。なんか暇で……。にしても平和だよね、うち。」

「まあ、整形外科だしね……」  
看護師になって6年。

そこそこの大きさの総合病院に就職し、仕事にも慣れた。  
看護学生時代は患者の心に寄り添った看護を!!!なんて考えてい

たけれど、

現実そういつてばかりもいられない。

やらなければいけないことだらけで、あっという間に時間が過ぎていく。

慣れというのは怖いもので、ちょっとばかり血を見てもきやあきやあなんて騒ぎもしなくなった。

6年もいれば、職場の人間関係も、よっぽどの上司じゃなければ慣れが生じる。

この日の夜勤も、仲のいい同期だ。

同じ26歳。年々減っていく独身友達。

2年前に姉も結婚し、ついこの間には甥っ子も誕生した。

つまり……無言のというよりは、だんだんあからさまになっていく親からのプレッシャーと戦いつつ、自由な時間を満喫している。

恋愛さえも遠のいていて、

このごろは一人でも生きていけそうな気さえしてしまう。

「枯れてるよねえ」

「あんたがね」

痛い一言。そうだった。愛子にはいたんだった。もう4年になる彼が。

改めて見ると、スタイルもいいし、顔も綺麗。さばさばした性格は女の自分から見てもいいと思う。

ともすれば、出不精になりがちな私と温泉にもいってくれる。

「だって、ごろごろしつつ読書が最高なんだもん。もう初孫もいるし、親もいい加減あきらめてほしいよねえ」

本当に。親の気持ちは良くわかるけれど。

「確かあんたのお母さん、離婚してもいいから結婚しろって言うてたっけ……」

「ここまできたら苦笑しかない。

「そ。でも結婚はいいや。子供は欲しいけど、絶対じゃないし。

恋愛はもうこりこり。いまだき30独身だっておかしくないの  
ね」

「あんたのことが心配なのよ。いろいろあったし・・・」  
言いかけてやめる。

愛子の難点。

そんなに、きつそうな顔してた？

「もういいじゃん。仕事。仕事」

沈黙が怖くて話をそらした。

まだ痛くて、2年もたつのに向き合えない。

忘れたと、忘れられたと思ったのに。

ふとした拍子に、まだ痛む。

だから、恋愛なんて

踏み出せそうにない。

今が幸せ。

平凡な、変化のないこの日々が。

2・平凡な日々 ―夜明け前―

夢を見た

まだ無邪気に笑ってたころの

目で見えるすべてが輝いていたころの

目を開けると、まだあたりは薄暗く、夜が明けていないことを教えてくれる。

この時間特有の、ここちの良い静寂。

夢見が良かった所為か、自然と口がほころんでくる。

そういえば、買った本読みかけのまま寝ちゃったな……

年若い主人公が、異世界に行き、幸せになる話。

ありがちで、でも現実の暗さなんて少しも関係のない

何も考えずに楽しめる

少しそんな体験をしてみたい気もするけれど、もう若くはないし  
夢をみるには現実をしってしまった。

もう一度眠ろう。

せめて夢の中で、無邪気に幸せに浸ろう。

起きたら、本の続きを読んで、

昼は母さんの買い物に付き合っただけよ

夜は家族でご飯に行こう

愛するこの平凡な日々

せつかくの休日だから

だから………もう少し寝かせて。



### 3・異なる世界

平和な国の、平凡な日々の中で

事件や事故は、

ブラウン管の向こうの出来事だった。

暗いニュースに眉をひそめるけれど

怖いね。なんていうけれど

所詮他人事だったんだ……

何だろう……？

嗅ぎなれない、けれど身近だったような臭いがする

なんだか眩しい。

その臭いは、認識したと同時にどんどん強くなる

もう耐えられない！！

「……………うそでしょ？」

目を開け飛び込んできた景色は、信じられないものだった。

身近だったはずだ。それは病院勤めだったからこそ。

それでも耐え切れないほどの……………血の臭い。

そこは、

見渡す限りの戦場だった。

……………それも、おびただしい数の死者が横たわる。

眩しいはずだ。

焼け野原なのだから……………

生の気配のない、音のない世界。

誰も生きていない、希望のない世界。

夢なんかじゃないと突きつける、死の臭い。

「いやぁ……………」

せめて視界を防ごうと

この世界を否定しよう

ピチャ……………」

濡れた感触に思わず手を引いた

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア……………」  
……………」

一面の赤、赤、赤。

引いた手は血に塗れ、その先に見開いた目があった。

目で生きていないとわかる。その首にはあるはずの身体がない。

・

グエエエツ、ゲホツゲホツ

耐え切れずに胃の中をすべて嘔吐しても、  
知らぬ間に涙がほほを濡らしていることさえ、  
気づかなかった。

私はどこに来てしまったのだろうか・・・

それとも

目を瞑れば、覚める夢なんだろうか・・・

夢なら早く覚めればいい。

この、救いようのない世界から。

? - 2 生存者

どれくらいの時がたったのだろうか

もしかしたら一瞬だったのかもしれないし

長い時間だったのかもしれない

この地獄のような世界で

たった独り、孤独だった時間は。

もう、何を探す気力もなく、

流す涙も枯れた。

ここはいつたい何処なのだろう。

いつまで、いれば良いのだろう。

生の気配のない、絶望に満ちた時間は、心に影をさしていった。

「誰か……！誰かいませんか！！」

何度目かわからない問いかけも、返事がないのを突きつけられるようだ。

《もう、だめなのかな……》

「……うつ……」

聞こえた!?

誰か生きている!?

慌てて周囲を見渡すけれど、  
生きている気配はない。

遂に狂った心が、幻聴を作り出すようになったか……

「……だれ……か……」

もう一度辺りを見回す。

一面に死屍累々《ししるい》と広がる野原を

一縷いちろうの希望を込めて。



カタッ

いた……!!

離れた場所に、馬車だったものが折かさなっている。  
その下から、かすかに動く腕が見えた。

急いで行こうとするけれど、  
足に力が入らない。  
けれど急がないと、  
また、独りになるかもしれない。

《動け!!こんなときに動かなくて、いつ動くんだ!!》  
唯一自由になる両腕で這って、  
怯む心を叱咤<sup>しつた</sup>して、  
惨たらしい遺体だらけの中を進んでいく。

瓦礫の下に、腕が見えた。

幸い、乗っているのは細かな瓦礫で、女の腕でも退けられそうだ。

「……つつ」

裂けた板が、何度も腕を傷つける。  
爪もはがれたかもしれない。

それでも必死だった。

独りになりたくなかった。

目の前の命のほうが大切だった。

上半身が見え、足が見え、遂に全身が見えた。

震える指で、身体に触れる。

・・・温かい。

当たり前のことに、枯れたと思った涙がまた流れて

絶望に染まりそうな心に、光が差す。

「もうすぐだから、頑張つて！！独りじゃないから！！  
ここにいるから！！・・・頑張つて！！！！」

助かって欲しい。

生きていて欲しい。

「・・・だ・・・れ・・・」

「大丈夫ですか！？わかりますか？！」

「・・・わ・・・かる。・・・だれ・・・？」

「良かった！！どこか痛みますか？！」

「右・・・足に・・・矢が・・・  
手・・・も・・・動か・・・ない。胸・・・息が・・・苦し  
い」

全身を見るために、うつぶせに倒れていた身体をあお向ける

薄く開いたまぶたから、意志のある青い瞳。

男性が行ったとおり、右足には折れた矢が刺さっていた。  
しかし、出血は少なく、致命傷ではなさそうだ。むしろ、むやみに抜かないほうがいい。

矢が栓をしているのなら、このままにしておこう。

右腕は・・・

赤黒く腫れ、不自然に曲がっていた。このまま顕著に腫れが進むようなら、神経障害を起こさないためにも、瀉血しゃけつする必要があるだろう。今見たところは、指先も動いているし、整復すれば大丈夫か・・・。

胸は、瓦礫の下敷きになったときに、肋骨が折れたんだろう。もしかしたら、肺に折れた肋骨が刺さっている可能性もあるけど、血も吐いてないし、話もできている。可能性としては低い。

治療は、添え木くらいだけど・・・。それも所詮気休めだ。

他は、細かい傷はあるけど、とりあえず大丈夫そう。  
後で、きちんと見よう。

痛むのだろう・・・触れるたびに食いしばったうめきが聞こえる。

添え木を探して、右腕を固定したところで、自分を見る青い瞳に  
気づいた。

「大丈夫ですか？」

「ありが・・・とう・・・」

そういつと、男性のまぶたが閉じ、腕が力なく落ちた。

!!!!!!

急いで脈を取り、息があるのを確かめる。

眠ったか、気絶したかしたのだろう。

前者であれば、ずいぶん神経の太い・・・

眠った顔を見て、表情が緩んだ。

抱く腕に、痛くない程度の力を込める。

屍の広がる中

状況は変わらない。

それでも独りの孤独よりも

二人で支えあえる。

腕の中の身体を、

もう一度抱えなおして、

眼をつむった。

? - 2 生存者（後書き）

瀉血：余分な血液を体外に排出すること

\*この場合は腫れているところに血液が溜まっているので、そこを切り、血液を排出する。

? - 3 水辺へ

ひとりで生きていける。なんて

どうして思ってたんだろう。

ひとは独りじゃない。なんて

幸せな人の台詞だと思ってた。

この救いようのない世界で

腕の中の存在だけが確かなものだった。

ともすれば、狂気へ陥りそうな世界で、

手に触れる温もりだけが支えだった。

ハゲタカの声が聞こえる。

肉を食む音。

血の臭い。

陽も高くなり、徐々に腐敗臭が漂ってくる。



死は他人事じゃなく、隣にあった。

数時間はたっただろうか・・・

変わらない惨たらしい景色に涙は止まり、

心は波立ちもしない。

腕の中の顔を見下ろすと、

眉間の溝はいまだあつたけれど

それでもずいぶん楽そうだ。

時折かすかに動く身体に、生を感じる。

陽が昇りきる前に、木陰に移ったほづがいいだろう。

見廻すと、

近くに枝葉の茂る樹が見えた。

腕の中の身体を背負うが

年若い男性で、筋肉もついている。

体格差もあり、足を引きずってしまふ。

《亀の歩みだ・・・》

近くに見える樹がとてつもなく遠く感じた。

やっとのこととで着いた樹の根元に彼を横たえ、息をはく。

休んでいる暇はない。

明るいうちに、探すものがある。

満身創痍の彼は今後熱を出すだろう。

何より乾きが続けば、この先長くない。

必ず水は必要だ。

……一人にして大丈夫だろうか

けれど、どうせ行くなら早いほうが良い。

早く行って、早く帰ってこれる。

男の腰にはさんであったナイフと、皮の袋を借りる。

「ナイフ借りますね。すぐ戻ってきます。待っててくださいね」

返答のない顔へ言葉を告げ、

後ろ髪引かれる気持ちを切り、

森へ向かって歩いていった。

鬱蒼とした木々の中に、やはりぼつり、ぼつりとある遺体。

逃げる途中だったのだろうか、

背に矢を受けた者、背を袈裟懸けに切られた者、

騎乗した主人と運命を共にしたのか、倒れた馬の姿もあった。

森は、地上がどんなに血に塗れようが変わらない。

木々はそよいでいて、静寂につつまれている。

ふと、川のせせらぎが聞こえ、足を速めた。

少し先にいくと、森の開けた場所があり、小さな小川が流れていた。

夢中で水をすくい、口に含む。

「……美味しい」

これなら彼にも飲ませられる。

澄んでいるから、傷口だって洗えるだろう。

皮袋に水を満たし、戻ろつと腰を上げた。

・・・そのとき

ガサッ

バキッ

《何！？誰かくる！！！！》

一瞬で顔がこわばり、身体が震える。

音は徐々に近づき、そのざわめきと共に、相手が一人ではないことを証明している。

・・・油断していた。

あんな無数の遺体を見て、ここが戦場だと認識していたのに、誰かがいるなんて思いもしなかった。

何時間か前なら、喜んだだろう。

生存者を探していたし、孤独に恐怖していた。

生きているなら、誰だって良かった。

でも、今は違う。

守るべき相手がいる。

ここが戦場である以上、彼の敵かも知れないし、自分が殺されるかもしれない。

惨たらしい状況に悲観して、そんなことも考えなかった。

《どうして離れたんだろう！！》

離れるべきではなかったのだ！

彼は今動けないし、意識もない。もし敵だったら！？  
わざわざ目立つ樹の下に寝かせてしまった……！

すべてが呪わしく、後悔ばかり。

いまさら後の祭りで、どうしようもない。

震える手でナイフをつかみ、あの場所へ急ぐ。

同じく震える足が、纏れそうになるけれど、必死で走る。

《どうか……どうか間に合って！！》

森からでたところで、

彼のいる樹が見えたところで、

何かが聞こえた気がした。

夢中になって走る急いた耳に、その音が聞こえることはなかったけれど、

ブスッ

左肩に灼熱が走る。

目の前しか考えていない頭に、突き刺さった矢がわかっただろうか。

前のめりになる身体。

薄れゆく視界の中で

こちらを見た彼の青い瞳が見えた気がした……。

#### ? - 4 紙一重の恐慌

小さなころ、父さんの背中で揺られるのが大好きだった。

広い背中に全身をゆだね、

全身で愛情を感じていた。

不安なんて、

少しもなかった。

身体が揺れる……。

がたがたと、まるで舗装のないでこぼこ道を通ったように……。

《車に乗ってる・・・？いつの間に寝ちゃったのかな。運転してるのは誰？母さん？父さん？

注意しなきゃ。この道ひどいよって。寝たのは悪いけど、ありえないよって・・・。》

父は昔から、山道の好きなひとだった。

乗り物酔いする娘がいるのに、好んでカーブの多い山道を選んでいた。

幼い私には迷惑以外の何ものでもなく、毎回のように吐いてぐったりしたのを覚えている。

母も、姉も注意してくれたけれど、『ごめん、ごめん』なんて謝るけど、やっぱり山道を走っていた。『途中でみる景色と、新鮮な空気が良いだろう？』と車を停めて、笑っていた。

大人になり、最近は車酔いも治まったけれど・・・

それにしても、揺れる。

がたがた揺れる。身体が痛いほどに。

そう、まるで硬い板の上で横たわっているかのように・・・

・・・？

おかしいことに気づく。

硬い板の上の感触？・・・ありえない。この自動車販売競争



の著しい現代で、そんなわけあるはずもない。‘車にソファアの快適さを’なんて宣伝があるくらいだ。トラックの荷台以外でそんなことがあるはずもないのだ。

ひとつを疑問に思うと、この状況のすべてが疑わしく感じる。

ありえない揺れ。

ありえない感触。

そもそも、ドライブになんか出かけた覚えがない。

眠る前は何をしていただろう・・・

このごろの仕事の疲れを押し、待ちわびた新刊を読んで・・・

！！

・・・そうだ

この状況よりもよほどありえない場所で目覚め、彼の元に向かっていた。

急く感情に突き動かされるように走り、彼の姿を認めたとところで、肩に衝撃を感じて・・・

そこから記憶がない。

眠りの世界を振り切るように目を開け、起き上がる。

真つ暗な場所。

足元のわずかな隙間から揺れる光がみえ、ここがどうやら馬車の中だと気づく。揺れているからには移動中なのだろう。

《あれからどうなったの？彼は！？》

あの時、彼は満身創痍だった。

命に別状はなさそうだと思っただけけれど、所詮医者ではない自分の見立てに自信はもてない。

目立つ樹の下に寝かされ、意識もなく、もしあのとときの物音が敵だったとしたら・・・

無事で済むはずもない。

左肩に触れ、何か布のようなもので固定されていることを確かめる。

手も足も動く。縛られてはいない。

状況を確かめたくて、光のほうへ行こうとした。

「動くな」

「っ！」

暗闇からいきなり現れた声。

「もう一度言う。動くな。動けば命の保障はない」

低く、感情の色が見えない声に、身体が静止する。

脅してはいけないことを証明するように、青光りする刃物がのど元に突きつけられた。

世界でも有数の平和な国日本で育ち、今まで命の危機に面したことはない。もちろん刃物を突きつけられるような状況に身置いたこ

となど、あるはずもなかった。

歯の根が震える。

少しでも動けば、血が流れるだろう。

戦場で凍ったと思った涙がにじむ。

男はこちらが抵抗の意思がないのを確認すると、壁を数度叩き、外へ向かって合図をおくった。

徐々に暗闇に慣れてきた眼に、ここに男と自分以外の存在がないことがわかる。

これからどうなるのだろう。拷問か、陵辱か、それともやっぱり殺されるのか。

どれをとっても最悪な結末。

どうしてこんなことになったのか。

背後の男は動かない。

命の危機に晒され、こころが恐慌に飲み込まれようとしていた。

《逃げなきゃ。逃げなきゃ。逃げなきゃ！殺される！！死にたくない！！》

「！！！」

どこにそんな力があつたのか、  
男の腕を振り切り、光へ向かう。  
肩も、首も痛みなど感じなかった。  
ただ、そうしなければという一心に突き動かされ、  
入り口に手をかけた。

「！おっと。．．．お嬢さん何処へ行くのかな？」

銀髪の優男。

やっと出られると思つて乗り出した身体を捕らえられる。  
絶望ににじんだ涙がこぼれた。

「離してっ！離せえっ！！」

暴れてもびくともしない。

「待つて、待つて。何もしない。大丈夫だよ！！  
セディオンから聞いた！敵じゃない！僕は君を診たいだけだ！」

「敵じゃない．．．？」

恐怖につつまれていた心にそれだけが届く。

「そうだよ。僕らは敵じゃない。わかるね？」

僕は医者だ。君は怪我をしてる。それを診せて欲しいだけなんだ」  
優しい声と繰り返す言葉。

「セディオン？・・・だれ？」

「君が介抱した男だよ。僕らの仲間なんだ。  
ひどい怪我だったけど、意識はある。君が助けてくれたんだね。」

気になっていたことだった。

この何もわからない世界で、心の支えだったものだ。

「彼は無事・・・？」

問いに目の前の男が微笑む。

「そうだよ。ありがとう。」

力が抜けた。張り詰めていた心が緩み、涙が止まらない。

「僕はラウル。さっきも言ったけれど医者だ。君の傷を診せてくれるね？」

うなづき、身を任せる。この優しそうな人なら大丈夫そうだ。  
抱えあげられ、馬車の中に戻る。

「話はすんだか？」

！！

低い声。

忘れていた存在に身がすくむ。先ほどまで突きつけられてい刃が眼に入り、恐怖が戻ってくる。掴んだ腕に力が入り、また恐慌に陥ろうとした時、いち早くラウルがそれに気づいた。

「ディーン……。君なにしたの？まさか、何も説明せずに剣を突きつけたんじゃないだろうね。この子の首の傷……、さつきは無かったよね？僕、君にこの子を任すとき言ったよね？セディオンの話を聞くまで、この子には手をだすなって。いくら戦場で怪しい存在だとしても、怪我した女の子だよ……？しかも、こちらの早とちりで矢を放った。つまり、被害者だ。大体、言葉が足りないんだよ、見てごらん。こんなに怖がっているじゃないか。ただでさえ図体が大きくて威圧感があるのに……。」

畳み掛けるように続く言葉に、さつきまであれほど怖かった存在が小さく見える。

ディーンと呼ばれた青年は何か言いたげにこちらをみた。

「……た。」

「何？聞こえないよ？まさか騎士たる者が、非を認めないなんて無いよねえ……？」

良く見れば大きな剣を持つ手が振るえ、耳まで赤くなっている。

「それとも何？君は弱いものを虐げてしか、自分の強さを誇示できないのかい？情けない。さぞかし父上も嘆かれるだろうねえ。」

「……だんだん可哀想になってきた。」

よくよく思い返せば、彼・ディーンは動くなと言っていた。命の保障は無いとか、剣を突きつけたのはやりすぎだと思いが、こち

らだつて早とちりし、状況を尋ねもしなかった。まあ、それがあつてもこの無口そうな彼が納得できるほど説明できたとは思えないが・

「すまなかつたと言つたんだ！」

真つ赤な顔で声をあげるさまからは、先ほどの威圧感を見る影も無い。

見上げればラウールの眼が笑つていて、ごめんね。許してあげてねなんていつてるのが聞こえそうだった。あんなに暗く見えた馬車の中が、明るくみえる。

緩んだ心の糸はこのやり取りに切れ、意識は再び眠りに飲み込まれていく。

「名前は？」

残るかすかな意識の中、名をたずねられた気がして答える。

「え・・・み・・・」

もつまぶたが重くてたまらない。

かすれた声で言つた名前は伝わつただらうか。

前の眠りとは違った、安堵につつまれたまま、意識は眠りの中へ旅立っていった。



？ - 4 紙一重の恐慌（後書き）

## 閑話1 戦場でみたもの

人間はこんなにも残酷になれるのだろうか……

人が他人を殺すと罪になる。

多くを殺せば、「殺人狂」、「大量殺戮者」の名がつく。

理由はいろいろあるだろう。

怨恨、嫉妬、金目当て……中には自殺の道ずれなんて、やりきれないものもある。

しかし、人が他人を殺しても罪にならない場所

それが戦場だ。

敵を討った数だけ「荣誉」が付き、大量に殺すと「英雄」の名が付く。

いつだって犠牲なるのは前線に出るものだけだ。

本当に戦争を始めたいのは、商人や上のごく一部の奴等で、大儀名文を振りかざし、人がばたばた死んでいくのをもののかずにも入

れていない。

やりたいなら、お前たちだけでやればいい。

大して動きもしないたるんだ肉同士、さぞかし早く平和が訪れる  
だろう……。

もっとも、そんなことになる前に、そんな奴等は一目散に消える  
だろうが。

搾取し、溜めに貯めたものを持って。

誰が言ったんだ。

人はみな平等だなんて。

見てみる。こんなに人は不公平だ。

命の価値は同じか？

血の色が違うとでも言うのか？

どうして、こんなに人が死ぬ？

……

どうして、俺は守られねばならない？

同じ戦場で、同じ釜の飯を食い、たとえ身分の差はあっても、  
緒に笑っていた。

「故郷で奥さんと子供が待ってるんですよ」

「これが終わったら結婚するんです」

「何にも無いけど、かかあがうまい飯炊いて待ってるんす。これ  
がおわったら旅行でもって」

なんて、報告をくれた。

こんな救いの無い場所で、それでも未来に眼を向けていた。

今は・・・物言えぬ姿となって目の前にいる。

なんだ！？この救いよりの無い世界は？

神は何処にいる！？

いたら教えてくれ。

命は平等か？

俺とこの者らで何が違った？

亡骸さえ満足に供養されない。

全員つれて帰れもしない。

俺は何のためにいる？

この命を背負ってどうしたらいい？

答えのない叫びは俺の心を凍らせる。

長く終わりの見えない戦争に、凍らせないとやっていけなかった。

裏切りや、うわべだけの言葉しかない宮城で。

いつ寝首を搔かれるともわからない人生で。

そしていつだか自分の心が見えなくなった。

だれか、俺をつないでくれ。

正気の淵にいるうちに。

狂気に飲み込まれる前に。

みなが膝を折るこの孤独な場所で、大切なものを見失うことなく、

守っていけるように。

心を見失い、傷つける側に廻らぬように。

? - 5 現実からの逃避

自分の価値がはつきりと言える人って、

どのくらいいるんだろう？

自分じゃなきゃだめで、

変わりは誰にもできないことなんて、

本当にあるのかな？

この世界での三度目の目覚めは、一番穏やかなものだった。

一度目はありえない状況に悲鳴を上げ、

二度目は暗闇に恐慌を覚えた。

そして今は四度目だ。

永遠とも感じたときだったが、実際は一日にも満たない時間。

先ほどよりは少しましといえる揺れに、馬車の入り口を覆う幌の隙間からは、優しい光が差し込んでいる。

《あのまま、眠ってしまったのかな・・・》

差し込む光は明るく、空気も澄んでいる。

一見して昨日と同じ馬車の中ようだった。

先ほどと違うのは他に誰もいないことと、身体が毛布のようなもので包まれていたこと。

少なくとも、ここではおびえずに眠ることができる。

それが、ありがたかった。

昨夜は一度眼を覚まし、ラウルという青年からこの世界について



ての話を聞いた。

ここはデイガという山中だということ。

ラウルたちの国はここからまだ一日半ほどかかるところにあるカナディオン王国で、ガドーシャ連邦という国と戦時中だったこと。今回は、戦闘後に、負傷した仲間を国に連れ帰って行っていることなど。

ひとつひとつを根気良く教えてくれた。

随分時間がたったころ、ラウルから何度目かのため息。

こちらを見て、相槌は打つが、理解していないことがわかったのだろう。

結局途中で説明は終わり、後は身体が落ち着いてからと席を立った。

正直、認めたとたんに痛み出した左肩や指先、首筋の切り傷、精神的なものからくる疲労もあり、途中で話が終わってしまったことは助かった。

でもそれだけじゃない。

理解できるはずもないし、分かりたくもなかった。

説明が重ねられるたびに、ここが自分のいた世界ではないことが突きつけられ、

自分の足元が崩れるような感覚に襲われる。

戦場では気づけなかったこと。

明らかに日本人とは異なる風貌。

見たことのない服装に、日本では観光地でしか見ない馬車や馬と  
いう交通手段。

実はこれは夢で、あと少ししたらいつものように、出勤前の目覚  
ましアラームがなるんじゃないか。

そうだ、仕事は？

今日は休みだった。

じゃあ明日は？

………確実に欠勤だ。

誰か連絡してくれるだろうか………欠勤の言い訳はどうしよう  
。。。

この現実から逃れるように取り留めのない考えばかり。  
たくさんたくさん、浮かんでは消え、その度に逃れた現実へと戻  
る。

そして、想いが家族のことに及んだころ

頬が熱くなり、目の前のものがぼやけた。

眠る前に考えていたことが思い出され、嗚咽が漏れた。

昨日のことなのに、もう遠い昔のようで。

昨日までの自分とあまりに違いすぎて。

ひたすら「どうして!？」叫び続けた。

「戻りたい」と懇願し続けた。

絶望と、生きている安堵にこころはぐちゃぐちゃで、  
ただ、泣くことしかできなかった。

そして、冒頭に戻る……。

泣きつかれ、そのまま眠ったからか、瞼がはれぼつたい。

泣き叫んだせいで、のどは違和感があるし、頭も重い。

けれど、泣くだけ泣いたら、こころは少しすっきりしていた。

『どうしようもないことを考え続けるより、

どうしたら良いかを考えよう』

社会人になって学んだこと。

先輩から言われ、後輩にも言った。

泣いたら誰かが助けしてくれると思えるほど、自分に自信はないし、  
そんな歳でもない。

社会人7年目。26歳がけっぴち。

入ってくる光にようやく眼を向けることができた。

ようやく、生きていることの、五体満足であることの奇跡を思い  
出せた。

今日こそ、ちゃんと話を聞こう。

状況を把握して、自分のいる場所を確かめたい。

ここが本当に異なる世界なのか。

まだ、完全に希望が断たれたわけじゃないはずだ。

……そう思ったかった。

? - 6 処遇

ふと、揺れがおさまったことを感じた。

馬車が止まったのだらう。

《……何かあったのかな?》

一日しかいなくてもこの世界に信号などないことが分かる。  
ならば停まる理由は他にあるはずだ。

気になって幌へ手を伸ばす。

隙間から見えたのは、30人ほどの人々と馬、もう一台の馬車。  
全員が男性で、腰には剣と見られるものを提げている。

純粋な日本人には、無い色をもったものばかり。

今では国際交流が進み、外国の人々を見かける機会も増えたけれど。

日本で見るのと、自分がその中に一人なのではまったく違う。

心細い……それが一番当てはまるかもしれない。

昨日説明してくれたラウルを眼で探し、  
なかなか発見できずに、身体が幌より乗り出した。

「何をしてる？起きたのか」

「っ!!」

思いがけない方向から声が聞こえ、一瞬小さく飛び上がってしまった。  
う。

振り向く前に、目の前が暗くさえぎられ、布ごと身体を押し戻される。

「自分のためを思うなら、ここからは出るな」

低く抑揚のな声に、昨日の出来事がよぎった。

「……デーンさん……？」

数度しか聞いていない声に確証は持てない。恐る恐る問いかけ、  
自分に被された布を外す。

最後に見た表情とは違う、強張った顔。

後ろ手で幌を閉めた動作は、まるで外から遮るよう  
不安を感じても、安堵を覚えはしない。

彼はこちらを見て嘆息し、

「少なくとも自分が周囲から疑われていることを自覚しておけ。  
そして、見たら分かるようにこの集団には女はお前しかいない。い  
ざというとき、かばってくれる奴などいないくらいのことを思っ  
ておいたほうがいい。」

一息に言った。

「……………」

《どういうこと……ただ、周りを見ようとしたただけなのに。そ  
れすらだめなの?》

さっきの行動は、誰もいない場所で独りの不安と、ほんの少しの  
好奇心からだった。

有無を言わさぬ口調に、小さな反発心が芽生える。

《昨夜、ラウルはなんと言った……?  
セディオンを助けてくれてありがとうと言わなかった?》

恩を着せるわけじゃないが、ここにきて周囲から、疑われている



とは思ってもみなかった。

感謝されこそすれ、疑われるなんて。

昨日のラウールに優しさを感じていた分、信用されていないと言われるのはショックだった。

確かに、

落ち着いて考えれば不審者だ。

見るからにこの世界のものではない服装。殺伐とした戦場に突如現れ、敵かも知れない者。

つかまつたかと思えば、刃物や、脅しに対して過剰なまでに脅え、泣き、気を失う。

これがすべて演技であれば、よほどの刺客である。

信頼は一朝一夕では築けないと、看護師として多くの患者に接し、学んでいたはずなのに。

「信じてもらえないかも知れないけど、私の話を聞いてもらえませんか？」

この世界に一人かもしれないという孤独。  
身近に接する人に信じてもらえない不安。  
目の前の彼でもいい。話を聞いて欲しかった。

しかし、

「俺は話を聞く立場にない。後でラウルが来る。それまで先ほどのようなことはするな」

彼の態度は、こちらの思いを拒んでいた。

次に、幌が揺れたのは、太陽がもう沈もうかとしているころだった。

何も無い馬車の中、動くことさえ禁じられ、今後のことを考える時間だけはたっぷりあった。

しかし、状況を判断する材料もないのに、建設的な考えが思い浮かぶはずもなく……。

いつの間にか、膝を抱え眠っていたようだ。

「この女か。ディーン起こせ」

声と共に身体が揺さぶられる。

「殿下。彼女は人がです。尋問は落ち着いてからでも・・・」

「それでは遅い。この女が敵方の間者という保証はない。見たところ重傷でもなさそうだ」

「ですが、彼女はセディオンを助けてくれました」

「だからなんだ。ここは戦場だ。間者であれば、そのくらいのことはするだろう。少しでも怪しいものをここには置いて置けない。」

「怪しいとおっしゃるのなら、せめて尋問は私にさせてください。先ほども接した私のほうが、彼女も話しやすいでしょう」

「そして報告が来るまで待つのか？二度手間だ。移動中、私が一番暇であろう。お前は怪我人の処置で忙しいはずだ」

「ですが……」

「くどい。反論は認めぬ」

馬車の中は他の人の気配がしていた。  
しかも二人は揉めている。

眼を開けると、隣には私を揺さぶった当人であろうディーンが。  
馬車の入り口にはこちらに背を向けた二人の男性がいた。

一人は、声からして昨日会ったラウールか。もう一人は……  
朝見た人たちの中にはいなかった気がする。

いたら、絶対に気づいたはずだ。それほどに、眼を引く。  
薄暗い空間の中でも光を放つような黄金の髪。隣にいるラウールの銀髪がさらにそれを引き立てる。

「それに……女が目覚めたようだ」

振り向いた顔にさらに衝撃を覚える。

黄金に輝く髪に、深い水を湛えたような瞳。職人が丹精込めて作り上げた彫刻と見間違わん顔。

それは顔立ちが素晴らしく整っていると共に、人間味を感じないという意味で。

「女。名は？」

声も外見を裏切らない。

「名はなんと言っ？」

しかし、芸能人には興味がなく、長らく恋愛からも遠ざかっていた心に、それ以上の感慨は無く。

もつとも、この状況下できゃあきゃあ騒げるなど、よっぽどだろうが。

「みつもと光基 えみ恵美です。……あの、私はどうなりますか？」

「どっ、とは？」

「これから……です」

このときの私は戦時中の人の心理をわかっていなかった。

憲法9条の下、戦争を放棄した日本。戦後60年以上たった国に育ち、戦争など経験するはずも無く。戦時下に突如現れた、身元が知れない女がどうなるか。

「これから……か。敵であればすぐに処分するな」

「……処分」

「怪しいものを置いておけるほど余裕は無い。尋問し、敵であれば殺す。……ああ、皆に下げ渡してもいい。戦時中で皆気が立っている。性欲が満たされ、さぞ気がまぎれるだろう。安心しろ。30人もいる。すぐには殺されないだろう。もっとも、それが生きているといえれば……だが」

感情の見えないまなざしで淡々と紡がれる言葉に、ぞっとした。

「敵じゃありませんっ！私は何も知らない！気が付いたら、あそこにいたんです。ここは私の居た世界じゃない！信じてください！」

信じてもらえなければ、先ほどの言葉どおりになる。それは女性である身で最悪な状況だった。

回避できるなら、額を地に着けてもいい。

役に立てるなら、この身を粉にして働こう。

「……不思議なことを言う。世界が違う？それを信じると？」

自分が突然他人にそんなことを言われれば、精神に異常をきたしたか、現実逃避だと思うだろう。

信じがたい。そんなことは分かっている。だが、必死だった。

「恐れながら、殿下。彼女がうそをついているとは思えません」

今まで脇に控えていたディーンが、不意に言葉を発する。

「なぜだ？」

「にわかには信じがたい話ですが、否定するならもっとまじな嘘をつくでしょう。」

それに、彼女の手には労働の跡が無い。問者であれば付くはずの肉刺<sup>まめ</sup>が。

気配もよめずに、これでは刺客としてはやっていけないのでは。少なくとも、私なら任せない」

殿下はもう一度視線を私に戻し、眼を眇めた。

「……そのようだ。お前の意見を信じよう。ラウル」

「はい」

「この女はセディオンの処置をした。と言ったな。使えそうか？」

「処置は的確でした。先ほどおっしゃったように、今は怪我人も多く、私一人よりも他に手があったほうが助かります」

「ならばこの女はお前の下に置く。夜は私のテントに連れて来い。面白い話が聞けそうだ」

「！！殿下のテントに？」

「これ以上の上策があるか？この馬車を女一人に与えるには惜しい。私もちょうど状況に厭っていた。この女に私を害せるとも思えない」

ラウールはちらりとこちらを見て、諦めたように殿下を見る。

「御意に。」

「私のところにつれてくる前に、もう少し見れるようにしておけ」

そういつと、殿下は身を翻した。ディーンもそれに続く。あとには、ラウールと呆然とした私が残された。



《何？どういうこと？・・・私は助かったの？》

「エミだったかな？良かった。聞いただろうけど、君にはとりあえず私を手伝って欲しい」

助かった？最悪の事態は免れたのか？

怪我人の世話を手伝えという。それで、身が保証されるなら喜んでしよう。

もともと看護師だ。患者の世話など、少しの苦にもならない。

この世界に来て二日目。

私の生活はこうして幕を開けた。



? - 7 価値（前書き）

本文を読まれる前に。

クリミア：ヨーロッパで実際に起こった戦争（地名）

ナイチンゲール：クリミアでの戦時中、劣悪だった負傷兵たちの療養環境を改善し、劇的に生存率をあげた。その後看護の発展に尽力した人物。（夜、負傷兵たちをカンテラを持ち、見廻った献身的態度からクリミアの天使と呼ばれた）また、もともと貴族階級のお嬢様。

? - 7 価値

現代の日本は医療の進歩が著しく進み、世界でも有数の長寿国となった。

病院には数々の医療機器が並び、的確な治療と診断が。

薬局には様々な薬が。

看護師として病院に勤務し、それが当たり前だと思っていた。

《でもそれって、とってもすごいことだったんですね……》

クリミアの天使として、看護師の祖として名高いナイチンゲール様。

あなたもこんな気分だったのですか……？！

ラウールの補助として連れて来られたのは、朝見たもう一台の馬車だった。

この中に怪我人たちを収容し、治療を行っているらしい。

私が居た馬車よりも一回り大きく、つくりも頑丈に見える。

しかし……

「この中に14人の患者がいます。もちろん、あなたが助けたセディオンも」

「……………」

確かに、大きい。……大きいけれど。

所詮馬車だ。

《この中に14人は狭いでしょう!?!》

日本の病院じゃ考えられない。

幌を上げ中に入ると、案の定。人がすし詰め状態……は少し言いすぎだが、人と人の間が、手が一本入るかどうか。

つまり、寝返りもできないほど。

それが、幌をあげれば光は入るが、降ろしてしまえば窓もなく、風通しも悪い環境にいる。

薄暗く、痛みのためかうめき声が響く中、血とすえた臭いが充満していた。

《これじゃあ、治る者も治らない……》

顰めた眉に気づいたのだろう。

「ひどいでしょう? けれど馬車が一台空いたから、半分近くを移すことができるんですよ」

ラウールの言葉にはっとする。

たとえ一晚とはいえ、本来怪我人を運ぶための馬車を、自分が占領していたのだ。

自分が選んでそうした訳ではない。ないが、罪悪感には拭えなかった。

「今から移動するんですか？」

「はい。殿下の指示がありましたから。……フォル！クアジドー！」

呼びかけと共に、二人の兵が入り、次々に患者を運び出していく。ここに何があつて、何がないのか。分からないため、手が出せず。気づけば、患者の数はおよそ半分になっていた。

「今日はここに停泊するでしょう。王都に帰るまで5日。治療を手伝ってくださいますか？」

手伝うも何も無い。殿下がそう言っていたし。なによりこんな患者を見て、手を出さない理由わけがなかった。

「私、何をしたら良いですか？」

「あなたのセディオンへの処置は、とても的確なものでした。あなたは以前、医療に携わっていたんでしょ？」

問いかけてという形はとっていたが、確信めいた言葉。隠すものではないし、頷き、肯定する。

「ならば、こちらの患者はお任せします。はじめの治療自体は終わっています。後は、薬を飲ませ、傷の消毒を。あと、日常の世話をお願いします。力仕事や、必要なものがあれば、先ほどのフォルに言ってください。

あと、分からないことがあれば私へ。それもフォルに言付ければ伝わります。

日に一度は診に来ますので」

信頼してくれるような言葉に、感動する。

一方で、不安も感じた。

「いいんですか？何処のものか分からない私に……」

「いいも何もない。患者は多く、私はひとり。手伝える人間が咽喉から手が出るほど欲しいのです。

しかもあなたは医療に携わった経験があるという。これを見逃す手はない。

それとも、あなたはこの者たちを傷つける意思でもあるのです



か？」

慌てて首を振り、否定する。だが、それでも不安は残った。先ほどの殿下の言葉が頭をよぎる。

「フォルさんは……その……」

貞操の危機はないか、などなかなか言い出しにくく、言葉が続かない。

入り口に立つ二人の男のほうを見て、不安そうにしているのに気づいたのだろう。

「ああ……。そのことですか。あれは殿下なりの鎌かまかけ……  
というか冗談です」

「冗談!？」

「はい。確かに、戦時中で気が立っているのも否定できませんが。今は怪我人を運び帰国途中です。

そんなに緊張が漂っている段階でもないですし。そもそも女性によつてたかつてそんなことをする者たちではありません。そんな素行では、移動の最中に国の評判を貶おとしめかねない。

安心してください。大丈夫だと思います。

それに、今回同行しているのは皆騎士です。国に帰れば引く手あまた。それなりにもてるのですよ」

《つまり、あなた程度のものに食いつくほど飢えてないですよ。って意味？確かに安心はしたけど、気分は複雑だな・・・》

人間というものは、とことん贅沢なもので安全が保証されれば、そのほかに眼が行く。

そんなに自分に自身があったわけではないし、いいのだが、それでも見目の整った青年から面と向かって眼中にないと言われるとあるかないかの自尊心が傷つく。

なんだか、思考がそれ、緊張が薄らいできた。

改めて患者のほうに目を向け、気を引き締める。

「分かりました。精一杯頑張ります」

患者のために。

そして、自分の価値を示すために。

「頼みます。必要なものはそこにおいてありますので」

こちらの決意が見えたのか、

一通り、医療用具と薬、患者の状態の説明をするとラウールは去

っていった。

「さて……。まずは挨拶と怪我の状態確認からかな？」

もと居た環境とは比べようもない医療現場にやりたいこと、欲しい物はたくさんあったが。

すべてを後回しにし、一人一人に声をかけ状態を診ていった。

その日、区切りのいいところまでなんて思いつつ、馬車の中と外を往復していた。

少しでもよくなってもらいたくて、  
できる限りのことをしたくて。

フォルさんから腕を止められ、気づくと、  
外はいつの間にか真っ暗で。

《あ……》

月はとっくに上の方にあった。

馬車から降りて上を見上げる。

《不思議……。月は変わらない……。》

ずっと身体を動かしていたからだろう。心地の良い疲労が溜まっていた。

馬車の中にはあの戦場で会ったセディオンもいて。

改めて御礼を言われた。

彼は今回が初陣だったそうで、落ち着いて見ると思いのほか若そうな外見に驚き。

年齢を聞き、また驚いた。

・・・17歳。

それがこの世界で早いのかどうかもわからない。

けれど、日本で生まれ育った私に、

17歳であるの惨たらしい戦場を経験するのはあまりにもつらく聞こえた。

比べてもしょうがない、とは思っているけれど。

17歳。私は何をしていたらろう？学校へ行き、くだらない話に盛り上がり、箸が転げても笑っていた。・・・大人の猶予期間。

「きつかったね・・・」と言った。

それに対し、彼は「確かに怖かったけれど、きつくなかったとはいえないけれど・・・国のために戦えることは僕の誇りです。」と言った。

迷いのない青い瞳で、まっすぐ私の眼を見て。

それに生きています。あなたが助けてくださったから、僕は家族に会うことができる。

だからありがとっございます・・・と。

大人なんだ。と思った。自分の道をしっかり見据えている人の眼

だ、と。

「私もそうあれるかな・・・」

向こうでは日々に慣れ、そこまでの目標や、大した信念も持たずに生きてきた。

それが間違っていたとは思わなけれど。

この少年に向き合うには足りない気がした。

まだ右も左も分からず、自分の足元さえすっかりしていない。

不安に叫びたくなる心を、無理やりおさえつけ、やっとのことで一日を乗り切っただけだ。

だけど、この瞳に恥じない自分でいたいと、信頼にこたえられる自分になりたいと思った。

やれることは少ない。

とりあえず今はできるだけのものを。

その後一通り処置が終わり、

夜通し付き添いがいるような患者もいないため、

一人一人に声をかけ、馬車を後にした。

とりあえず、ラウルへ今日の報告をと考え歩いていると、前方から当の本人が来る。

しかもなにやら急いでいるようで。

「どうしたのですか？ なにか・・・？」

「エミ！ まだここにいたんですか！？」

「・・・そんなことを言われても。」

少し焦った様子に、何かあったのか・・・もしくは自分が何かしてしまっただろうかと不安になる。良く見ると、後ろからはディーンも来ていた。

「夕方、殿下の下された言葉を覚えているか？」

「・・・？ ラウルを手伝え・・・と」

他に何か言っていただろうか。

よくよく思い出しても、何も浮かばない。その前に言われた皆に下げ渡す云々が強烈過ぎて、他が印象に残っていなかったが。もしかしてそのことだろうか。

覚えてないのがありありと分かったのだろう。ディーンはいつかのように嘆息する。

「エミ。ディーンが言いたいのは、今日から夜はあなたを殿下の天幕へ連れて行くように」と言う言葉なんですよ・・・。まさか本気だったとは。ディーンの顔では殿下から催促でもあったようですね。」

「殿下はもう天幕に入られた。身支度が済んだら連れて来いとのことだ」

・・・ちよつと待つて。今何か変なことを聞いたよな。殿下の天幕へ？とんでもない。近寄りたくない。昼間のことが思い出され、鳥肌まで立ってきた。正直怖い。

「あの・・・天幕へと言うのは、どういふことでしょうか？私へ問いただすことでもあるんでしょうか？疑いはまだ強いのですか？」

尋問も、拷問もできる限り避けたい。

「いや・・・」

「・・・」

そこでどうしてお互い眼を逸らすんですか？言いがたいことのように言葉を濁す2人にいやおうなく不安が募る。

「行きたくない」なんていえないのだろうか・・・。

この世界には歴然とした身分制度がある。それは昼間のやり取りを見ていて感じた。

日本で思い出されるのは上司と部下くらい。他は分からないが、少なくともここのようにすべてを差し置いても絶対の存在ではなかった。拒否という選択肢があった。

「詳しいことは殿下が説明されるだろう。お前は今晚は殿下の天幕で過ごすことになる」

一晩かけて話を聞くと言うことか・・・。  
信じてもらえるだろうか。異なる世界を。自分の境遇を。

そのまま、ディーンに連れられ、水場へ行き身体を清めた。昼は暖かかったが夜になると水で身体を洗うのは寒い。それでも、血や



汚れなどですえた臭いがするよりはましだと思い、髪も洗った。

有難い事に石鹸がある。身を清め、新しい着物に袖を通すと気分も変わるようだった。

殿下の天幕は周囲の中でも一番の大きさ……ではなかったが一番立派なつくりをしていた。

一緒に入るものだと思い傍らを見上げるが、首を振って否定される。

「あの……？」

「この中に入れるのは、殿下に呼ばれた者か、きまゆう危急の件がある際だけだ。今回殿下はお前だけを呼ばれた。俺は入れない」

一人で殿下の尋問を受けると言わんばかりの様子に、肩が下がったのはしょうがないだろう。それでも、入りがたくて、立ち止まっていると中から声がかかった。

「早く入れ」

こちらが、見えているのだろうか……？

無常な一言と手に背を押され、遂に入り口にたどり着く。

いったい何を聞かれるのだろう。

自分でも分からないものが答えられるだろうか。  
この世界に独り。味方もいなければ、相談できる者もない。  
どうしたらいいなんて誰も言ってくれないのだ。

暗くなる心とは反対に、灯りのともされた天幕の中へ一歩を踏み  
入れた。

## ? 19 日本人の性

「失礼します」

この世界の礼儀もしらず、とりあえず日本式の礼をとり、その中へと踏み入れた。

品良くまとめられた室内よりも、圧倒的に眼を引くひと。

何の感情も浮かんでいないような瞳が怖くて、視線が上げられない。何を聞かれるのか。どういえば信じてもらえるのか。

一番偉いという事は、自分を如何どうにでもできる決定権を持っていると言っこと。

言い換えれば、気分を損ねたり、不信感を抱かれれば、自分の人生の終わりに直結する。

「少しは見られるようになったか・・・」

小声でつぶやくようにした声は遠くて届かない。

「ラウールからお前の働きは聞いた」

緊張のため力が入り、握り締めた手が震える。  
なんて報告を受けたのか。  
それを聞いてどんな判断を下すのか。

「完全に疑いが晴れたわけではないし、信用するわけでもない。」

抑揚のない声音に、広いはずの天幕が息苦しく感じ、

「ないが……この道中での身柄は保証しよう」

殿下の言葉が理解できると、安堵あんどに膝が崩れた。

「ありがとうございます！……良かった……!!」

完全に信用が得られるなどはなから思っていない。

それでも、ここにいられる。安全が保証されたと思うと、涙さえ  
浮かんでくるようで。

異なる世界に独り、今までに見た景色はあまりに惨く、いずれ自分もそうなるのではと心の底で疑っていた。もちろん今だって、どこかでまだ不安はある。

だが、先ほどまでの深刻な危機感を抱かなくてもいいと思うと張りつめた神経が緩んだ。

緩んだから、気づけなかった。殿下の視線に。その意味に。

ふと視界に影が落ち、顔を上げようとする。

その正体が殿下だと知ったと同時に身体が浮いた。

「!？」

抱えられている？

どうして？

「あ……？ 降ろしてください」

「……」

こちらの言葉に反応することなく歩を進める。

社会人になってからこんな風に抱えられた記憶などなく、降りよ  
うとすると落ちそうで動けない。

広いと言っても、所詮天幕の中。目的の場所はすぐ近く。

ほつりだすかの様に降ろされた。

柔らかな感触。

とっさに起き上がるようにするが、その手を縫い止められる。

近づいてくる身体にわけが分からないまま危険と恐怖を感じ、身  
じろいだ。

「……離してください。」

「……………」

分かっているのかいないのか。  
縫いとめる力だけが強くなり、こちらの不安は増していく。

不意に、  
足に冷たい感触が。

「?!」

それが何か理解すると共に手は奥へ奥へと進んで。  
何をされているのか分からないほど子供じゃなく、未経験でもな  
かった。

この場合、自分の立場上どうしたら良いのか。とりあえず足を動  
かし、それ以上手が進入しないようにするが、ワンピースのような  
着物では障害となるはずもない。むしろ布地が足へまとわりつき自  
由が妨げられる。

「やめてっ!! やめてくださいっ。離して!!」

先ほどの言葉はなんだったのか。  
人を安心させるような話をして、油断させておきながら。

手はどんどん進み、捲り上げられた布はもう意味を成さないほどで、身体のほとんどが晒さらされている。

首筋にやわらかい感触。わき腹と足のきわどい場所に手を感じ・・・  
・・・堪忍袋の緒が切れた。

「ふざけるなあっっっ!!」

「っっっ?!」

確かな感触。改心の一撃。

いまどき、痴漢・変態への対処法なんて聞き飽きるくらい聞いている。実践は初めてで、決まるか不安だったけど、こういうときに手加減は命取り。全力を込めた。

ワンピースの裾を戻し、かすかに震える手でこぶしを握る。

見回した先に、想像どりの姿。

眉間に皺しわ、額に汗。身を折り膝を着け、手はお腹へ。

《・・・お腹?》

どつやら目的とは若干ずれがあったらしい。

相手から何か反応があってもいいように構えるが、いつまでたっても動きがない。

若干、両肩が震えているような気もする。

「……………」

「……………」

「……………大丈夫ですか？」

何をされたか忘れたわけではないが、あまりにも反応がなく、もしかしたらやりすぎたのかも・・・と心配になってきた。そろりと寝台から足を下ろし、相手に近づく。

「もしもし…………？」

「……………」

声をかけ、反応がないのを確認すると、一歩、また一歩と近づき、ついに肩に手をかける。

「大丈夫？」

これが、仇となった。



そして状況はまた戻る。

ひっくり返った視界に、苦しげによった眉間が見える。  
逃れたはずの身体の下。要所要所を押さえられ、今度こそ逃げ場がない。

《まただまされた……》

お人よし過ぎるのだろうか。

それとも平和ボケした日本人だから？

……まさか学習能力が低いのか。

後悔先に立たず。

互いにそれ以上動かず、視線が交差する。

「……大丈夫？」

悲しいかな看護師の性さが。少しでも苦しそうなところが見えれば心配になる。増して原因は自分だ。

「ぶっ」

「ぶっ？」

「ふはははははあはっははははっはははっはははっ！！」

重みは退き、殿下は横に倒れ、腹を抱えて笑っている。

「あの……？」

頭でも打つたのだろうか？

「殿下っ！！」

声と共に天幕の中に二人の姿。

「大丈夫ですか！？」

ひとつはディーンさんから殿下へ。もうひとつはラウルさんから私へ。

ラウルさんは私のよれた衣服と、乱れた寝台を見て痛ましそうに。

ディーンさんは、腹を抱えて、笑いやまない殿下を不審そうに。それぞれがそれぞれを見て、動かない。

「ラウル。ディーン。白だ」

「へ？」

「この女は白だ。問者でも、刺客でも、まして領主たちが送り込んだ情婦でもない。警戒は解く。」

《何のことデスカ？》

「悪いが試させてもらった。どうやらお前の居た世界とやはらほど平和らしい。警戒心がなさ過ぎる。寝台に連れ込んで媚もしなければ、誘いもしない。自分へ危害を加え逃れた相手の心配さえする。この世界ではありえない。こんなに甘くては生きていけない」

「では、信じるのですね」

「とりあえずはな。異なる世界とやらについては追々聞きだしていくことにする」

話を聞く限り当事者であるう自分を、置き去りにしたまま状況は進んでいく。

「連れ出しても？」

「いや・・・女はここに。聞きたいこともある。待遇は変えない。ひるはラウル、お前付きとし、夜は私の身の回りの世話をさせる。分からないことはその場で聞け。いいな？」

「・・・」

「おい。お前に言っている」

殿下の目線は私に向いている。今言ったのはこっちへ？

「分かったか？」

「はい」

とりあえず返事を。

「と言つことだ。下がれ」

まだ言いたいことがあるような、後ろ髪惹かれるような顔をしつつもそれ以上殿下が何も言わないのを感じ、二人は天幕から出て行った。

天幕の中ふたり。

まだ状況は見えていない。

？－9 日本人の性（後書き）

誤字・脱字等ありましたら、ご指摘お願いします。

天幕の中は気まずい静寂に包まれていた。

私はもちろん動けないし（どうしたらいいのかわからないし）

殿下は背を向け寝台に横たわっている（ここに居てどうしたらいいの？）

正直に言うとラウルに連れて行って欲しかった。

そつでしよつ？

誰が先ほどまで自分の貞操を危険に晒したやつと二人でいたいと思つのか。

そんな人がいたら、見てみたい。

わたしは嫌だ。

確かに、怪しいとは思つ。いきなり戦場に現れ、敵か味方かわからず、気が違ったのかと思つような話をする女は。

けれど、だからと言って確かめるだけにあんなことをされてはたまらない。

『ふざけるな。もうこんなところに居たくない。帰る!』

そう言えたらどんなにいいだろう。

実際にはいえるはずもない言葉。

誰も知らない、何も知らない、命の危険さえある場所で。

私がどんなに帰りたいと願っても、耐え難いほどの恥辱を受けて  
さえ、安全を捨てるほど馬鹿ではなく。

また、私を不審に思い、確かめたい向こうの考えも分かるから。

何も知らない子供なら良かった。

泣き喚いて、叫んで、哀れみ、慰め保護してもらえらるうから。  
事情なんて、大人の都合なんて知ったことじゃないと突っぱねら  
れたらうから。

(実際そんなことになれば、子供だって関係ない)

分かっている。

分かっているけれど。

つまり、気まずいのだ。

こちらから状況を打開するには、相手の身分が高すぎて。  
こちらの立場が弱すぎて。

散々心の中でつぶやいてはいるけれど。

結局のところ、其処で寝そべっている人に聞きたい。



《私はどうしたらいいのですか？世話しろといふのなら、せめて指示を下さいっ》

と。

思考が堂々巡りする中、時間だけが過ぎていく。

何もしない、何も話さない時間は、過ぎていくのが遅すぎて。

ほんの少しの時間でもとても長く感じる。

辛くはないけれど、そろそろ正座をしていた足がしびれてきた。

「・・・おい。私は眠る。夜の準備をしろ」

「え？」

思考の海としびれる足に気をとられ、反応が遅れた。

「夜の準備をしろと言った。お前は耳が不自由なのか？命令は一度で理解しろ。何度も言わせるな。」

先ほどはああいったが、役に立たないものを置いておくほどの余裕はない。」

殿下はいつの間にか寝台に腰掛けこちらを見ていた。

「あ……」

「何だ」

「夜の準備とおっしゃられても私には分かりかねます。教えていただけますか？」

「……………そうだったな」

深いため息と、少し疲れたような表情。

しかし、分からないのはこちらのせいではない。

この世界のこと、自分の状況さえはっきりと掴めていないのに、いつもやっていることのように命令されてもできるはずもない。

ただ、役に立たない荷物であるつもりはさらさらなくて。

やれることなら何でもやるつもりだ。

仕事があるほうがいい。

考えるひまがないほうがいい。

時間があると、どうしようもないことばかり考える。

今を否定し、泣き叫びたくなる。

「もうこの時間では遅いか……。女、外に出て桶に水をもらって来い。今夜はそれだけでいい。皆休んでいる。仕事については、明日ラウールか、デイーンにでも聞け」

《女つて……。昨日名乗った覚えがあるんですけどね。取るに  
足りないことだったんですかね》

その横柄な言葉に引っかけりを覚えると共に、部下を思いやるよ  
うな発言を意外に思う。

二日間。それも話を聞いたのはごくわずか。限られた中での物言  
いに高飛車で、有無を言わせない印象を持っていたけれど。それだ  
けじゃないらしい。

「早く行け。私はお前と違って暇ではない」

……。私には当てはまらないけれど。

天幕から水をもらいに外へ出る。

夜はまだ始まったばかりだった。



? - 11 上に立つもの

天幕から出て、殿下の言いつけどおりに水を汲みに出る。

すぐ外には二人の見張りの騎士がいた。

用事を告げると水場へ案内してくれるという。

『仕事中に申し訳ないし、水場さえ教えてもらえれば一人で行けますよ』と言った私に、騎士道精神か二人のうち一人が、暗い中性一人に行かせられないと引き下がらない。

水桶は二つ。

やはり見慣れない土地であるし一人では無理かと思い直し、同行をお願いした。

夜の森は驚くほど静かで、些細な物音が大きく聞こえる。

街灯もないし暗いかなと思っていたが、月明かりに照らされ、道筋は案外明るかった。

その分、光の届かないところにある闇は先が見えないほどだったけれど。

一人では到底たどり着けなかったに違いない道をしばらく進むと、水が流れる音が聞こえてきた。

「もう着きますよ。この先に小さな湧き水があるんです」

同行してくれた青年が教えてくれる。その言葉どおり、すぐに湧き水を発見できた。

桶二つ分に水を汲み、最後に一口含む。

「おいしい・・・」

戦場の近くの森を思い出す。生々しくて思い出したくないことが多かったが、あそこで飲んだ水も美味しかったと思う。

そういえば。

小さなころ、親と湧き水を汲みに行つたな・・・。

行きはほいほいと持てたタンクが、帰りはとても重くて。

『持とうか』と何度も聞く親の声に、一人でできる！とうんうん唸りながら運んだ。

手伝えることが嬉しかったから。

頑張つたねと誉めてもらいたかったから。

現状との違いに、ため息ひとつつき、腰をあげた。

ひとつを彼に渡し、もうひとつを自分で運ぶ。

「持ちましようか？案外重い。俺が運びますよ」

「……………」

「どうしました？」

彼の言葉が今思い出したことと重なり、笑いたいような、泣きた  
いような。

結局はそのどちらもできなくて。

自分のやるべきことは自分でと、いつかと同じ方を選ぶ。

「ありがとうございます。でも両手で持てば大丈夫ですよ。

んしょつと……………」

足元が盛大に濡れる。

両手に持ち替えたとたん、左肩にはしまった痛みで桶を取り落と  
てしまった。

《痛まないから忘れてた……………せつかく汲んだのに》

ラウルからもらった鎮痛剤は効果が強く、今まで怪我したこと

を忘れていた。

「すみません。やっぱりお願いしてもいいですか？」

左をかばったことで察したらしい彼は、すぐに水を汲みなおし運んでくれた。

「すみません」

「いいんですよ。男ですからこれくらい大丈夫です」

気遣いが嬉しい反面、手ぶらの自分が申し訳ない。

それ以降、話すこともない帰り道は行きよりも少し長く感じる。歩きつつも前だけに視線を固定できず、隣を見上げ、その顔にまだわずかに幼さがあることに気づき、セディオンは17歳だと言っていたことを思い出す。

隣の彼もきつと自分より年下で……。

若くして戦場へ行く。

この世界では当たり前なんだろうか。

まだ移動中、情報の限られた中ではなんともいえないし、予想もつかない。



ラウルは5日で国に戻れると言っていた。

国に着けば何か分かるんだろうか。

この世界のこと、自分の状況、そして何より日本に戻れるのかどうかが。

静かで何もすることがないと、考えすぎてしまう。

ふと、殿下と呼ばれていたあの人はいくつなんだろうと思った。

《聞けば教えてくれるのかな?》

出てくる前のことを思えば、そんな気安い雰囲気になるかがまず問題だけだ。

そうなれたらいい。

世間話でもいいから、話ができるようになれたら、何かが変わる気がした。

《頑張ってみようかな・・・》

月を見上げる。

日本で見ると変わらないまん丸の優しい月が、なんだか心強く感じた。

天幕の前、中まで水を運んでくれた青年にお礼を言って。

中に入るとすでに灯りが落ちていた。

外から差し込む僅かな灯りを頼りに、そろりそろりと寝台近くに水を運ぶ。

衝立の奥、こんもりと人型に膨らんだ掛け物は、横に立っても身動きひとつしない。

《寝たのかな？》

起こすのも忍びなくて、踵を返そうとしたとき、

その手が掴まれた。

「すみません。起こしてしまいましたか？」

さりげなく手を引こうとするが、びくともしない。むしろ掴む力は強くなっていくほど。

振り返ると強い眼差しと出会い、視線を落とす。

「遅かったな。ただか水汲みにいつまでかけている」

「すみません」

下を向いても感じるほどの圧力に肩がすくむ。小さな決意が見るしほんでいくようだ。

「手伝ってもらったのか」

「すみません」

「……………」

「……………」

「すみませんと謝ってばかりだな。責めているのではない。肩は大丈夫だったか？」

「……………大丈夫です。見張りの騎士の方が手伝ってくださいま

した」

「そうか」

「はい」

「いない間にラウルが来た」

「ラウルさんですか？」

「ああ。お前の方の調子はどうか診に来たらしい。水汲みに行かせたといったら怒られた。『怪我人でもうら若き女であるお前に夜分にそんなことを頼むなんてどういうことだ』とな。『間者でもない普通の女性がこんなところにいる不安を察しろ』とも言われた。まあ実際はもっと柔らかな物言いだっただが……」

殿下が夜の世話をさせると言ったときも、ラウルはこちらを気遣う様子だった。

優しい人なのだろう。自分のために、目上のひとに意見まで言うてくれた。そう人がいる。そのことに涙がでそうだった。

「すまなかつたな」

「え……」

「戦場において、考えがすすんでいたのかもしれない。冷静になれば、お前への態度はひどいものだったと思う。刺客かどうか確認したかったこともあるが、そうでないなら、女のお前には耐え難いものだっただろう」

「……」

なんて言えはいいのだろうか。出て行く前とは違いすぎる態度。戸惑いも感じるが、気遣う言葉にやはり厳しさは表面上のもので心は人を思いやれる人なのかもしれないと考えを改める。

顔を上げると、行く前よりも幾分人間味のある表情でこちらを見ている殿下の瞳があった。

丹精に整った顔は綺麗であると同時に、精悍さも感じさせる。少し疲れを感じさせるが、肌には張りつやがあり、帰りしな考えたとおり自分よりもずっと年下なのだろうと思った。

この歳ですさんだ戦場に身を置き、なおかつ人の上に立つ。

ここに来てから何度も思うが辛くはないんだろうか。

しかも人の上に立つということは、下のものをまとめ、規範となることでその心を支えるということだ。弱みは簡単には見せられない。

上が弱いところや慌てるさまを見せれば、下は不安に思う。時に

はなめて、いうことを効かなくなったり、反抗することもあるかもしれない。

戦場で統制が取れないことは、敗北を意味する。

敗北とは死を招くことだ。

それをさせないため、強くなければならぬ。上の責は重い。

目の前の人にかかる重圧はどれほどだろう……。

平穏な国で育ち、平凡な日々を送っていた自分には想像しかできない。

本の中、ブラウン管の中で他人事だったできごとが今は眼の前にある。

掴まれた手はいまだ離れてはいなかった。

? - 1 2 心に秘するもの 1 (前書き)

すみません遅くなりました。

手をつないでいるわけじゃない。

ただ、掴まれているだけ。

互いにどうしたらいいのか、相手の出方を伺っている。

態度の軟化を喜ばいいのか、新たなる何かの予兆なのか。

《せめてこの手を離してくれたらきちんと座れるのに》

片手を人質に取られた気分だ。

実際問題、半端な中腰のまま動けずについて、そろそろ腰が痛くなってくる。

掴んだ当の本人はと言うと、さっきから顔を伏せ、ぴくりともしない。

あまりにも動かないから、もしかして眠っているのかも何て思ったが、すぐにそれはないと否定する。

さっきも眠ったかと思って近寄ったらこうなった。

しばらく様子を見よう、いつも待ちきれない短慮で癩癩かんしゃくを起こした



ときほど後で後悔することが多い。

《それにしても綺麗な髪。外人さんなんてあんまり見たことないけど、それでもこんなに綺麗な金髪って始めてみる。良く手入れがされてるのかな？荒れてない。それとも若さ？》

行動範囲の限られたなか、実質見えるのは目の前の人だけ。

自然と観察するように、値踏みをする視線を向けてしまうのは許して欲しい。綺麗なものを眺めるのは、自分に被害が来ない状況ではしょうがない。人間の性だ。<sup>さが</sup>

掴んだ手と掴まれた手。

黄色人種の自分の肌と、白人の特徴を持った白い肌。

丸みを帯びた女の手と、骨ばった無骨な男の手。

何処までも違うその二つは、決して交わることがないように感じる。立場さえもまったく違い、若いけれど人を従え導く者と、年上だが何も持たない者。

「お前は、異なる世界からきたと聞いていたな」

顔を伏せたままこちらに声がかかる。

やっぱり眠ってはいなかった。

「はい」

「信じるわけではない。信用もしていない。」

そう繰り返さなくても、怪しいことは良く分かっている。寂しいし、心もとないけれど、仕方のないこと。

「ただ、私はひどく状況に厭っている。現状にな。ちょうどいい暇つぶしだ。話をしろ」

「話……ですか」

「そうだ。聞いて欲しいのだろうか？」

「なにを……何から話したらいいですか」

聞いて欲しいことはたくさんあった。逆に聞きたいことも数え切れないほど。

けれどもいざ話せと言われると、何から話しているのか、言いたいこと、聞きたいことがありすぎて逆にどれから言えばいいのか迷ってしまう。

「そつだな……おまえはどつやって戦場に現れたのか。どこから、何の目的があつてか」

そんなものこちらが知りたい。ここは何処なのか。どうして自分はこんなところにいるのか。

顔を上げ、こちらを見る殿下の眼は昼間とは違い、今は暗い湖の色だ。

底の見えないほど深く、怖くて近寄りたくないのに、なぜか引き寄せられる。

いつのまにか手は離れ、殿下は寝台に腰掛けている。

「座つても・・・？」

「ああ。許す」

少し離れたところに移り、座り込む。

夜、肌に触れる空気はひんやりとしていたが、床には毛の長い絨毯のようなものが敷かれており寒くはない。

「信じてもらえないかもしれませんが、たぶん私はここではないところから来たんだと思います。どうやってあの場にいたのかなんてわかりません。気がついたらあそこにいました」

眼を開けたら、あの救いようのない世界にいた。

「ここではないところ？他国ということか？それとも違う大陸か？」

そうだったらどれだけいいだろう、これが私が暮らしていた世界であつたら。

それだったら、日本大使館を探して、日本に帰ればいい。

日本、アメリカ、中国なんでもいい、誰かが知っているはずだ。

? - 12 心に秘するもの2 (前書き)

会話が中心となっています

目の前の彼は知らないだろう。

わずかな願いと、それを諦めるためにこれから話す言葉を。

「私が住んでいたのは、日本と言う国です。

そこで私は看護師として働いていました」

まだ何日も経っていないのに、ひどく時間が過ぎたように感じる故郷<sup>に</sup>。

入り口からのわずかな灯りに照らされ、暗い天幕の中には沈黙がおちる。

殿下が何も言わないのを確認して、言葉を続けた。

「殿下は私の国をご存知でしょうか？」

私の国は、世界に知られる国のひとつです。戦争放棄をし、表面上は平和な国。一年には四季と言う四つの季節があり、自然は季節により様々な顔を見せてくれます。」

そう、あんな絶望の景色とは縁を切った国。  
過去を反省し、平和と言う財産を未来に残そうとしていた。

「駄目なところ、嫌な部分もありますが、私は日本が大好きです。日本に生まれてよかったと思っています。そんな国で私は父、母、姉の四大家族に生まれ育ちました。カナルディオン国など聞いたこともないところで。先ほども言いましたけど、私は気がついたらあそこになっていたんです。」

あの日、眠る前のことが蘇る。

何の変哲もない平凡な日々。命の危険など考えもしなかった。明日も変わらない日常が続くのだと、思っていた。

「……こちらこそ、ニホンなどという国の名は聞いたことがない」

「ではアメリカは？中国、イギリス、ロシア、インド、エジプトは？」

「えじ？……どれもないな」

分かっていたけれど、聞きたくなかった言葉に足元が崩れ去るような気持ちになる。

日本を知らない人なら、もしかして世界で知らない日ともいるのかも知れない。

しかし、各大陸での主要国をひとつも知らないものなどいないだろう。仮にも殿下と呼ばれ、人に傳かすかれるほどの立場のものであれば。

《状況は絶望的なね・・・》

読み途中であった小説のように、誰かが召喚したのだと思えるほど自分の価値を過信していないし、異世界であるのならば、お決まりのように魔術師がいて都合よく国に返せる方法があると思えるほど楽道家でもない。

そんな便利なものがいれば怪我人など簡単に治療できるはずだ。

泣きたいほど切ないのに、顔には出さず、こちらの気持ちなど知らぬように会話は進む。

「お前の国に、戦争はないのか？」

「60年以上前にはあったみたいです。世界中を巻き込んだ戦争がですが日本は・・・私の国は大敗しました。・・・多くの取り返しのつかない犠牲者をだして。そのときに戦争放棄をして、その後戦争は行っていません。ですが、世界のどこかではまだ悲惨な戦争はあると聞きます」

「過去を反省し、未来のためにあゆむ・・・か。良い国なのだな」



そう、良い国だ。だからこそ帰りたい。

「殿下の国はどんな国なのですか？」

「カナルディオンか。たいした大国ではない。ないが知らぬ者はいないだろうな。子供でも知っている。愚かな国としてな」

「愚かな国・・・？」

「そうだ。そう呼ぶにふさわしい行いをした国だ。だがそれをお前に説明するには長くかかりそうだ。

またの機会にする。お前はここが見知らぬところだと言った、では頼れるものも居らぬのであろう。聞いたかも知れぬが我が国まではまだかかる。毎晩お前が私の相手をするというのなら、道すがらに話してやろう、私もお前の国に興味がわいてきたのでな」

確かに年下であるはずの人はひどく大人びて見える。

「今日はもう遅い。眠れ。疲れているはずだ」

こちらの体調まで気遣ってくれるのだろうか。  
けれど・・・

「ひとつだけ。」

「何だ」

これだけ教えて欲しい。  
かけらでもいいから、これからここで生きていくための支えが欲しい。

「殿下の祖国に、異界渡りの話がありますか」

支えがあれば、頑張れるから。

たとえ往生際が悪いといわれようが、もう諦めた方が楽じゃないかといわれようが。

一筋の可能性に縋れるから。

「さあな。他愛のない御伽話ごたわとしてならあるかもしれない。が私は知らぬ。国にもどればあるいは……」

? - 12 心に秘するもの2 (後書き)

中途半端なところですみません。

どんなに辛い日でも、どんなに嬉しい日でも。

光の見えない絶望の時も、ずっと続いて欲しいと願う幸福のときも。

眠りは誰にも訪れる。

明けない夜がないように。

経たない月日がないように。

精神こころのために、身体のために。

明日へ踏み出す一歩のために。

殿下の言葉が耳に残り、  
疲れているはずなのになかなか眠れなかつた。

寝台から衝立ついたてをはさんだ少し離れたところで、身体に布を巻きつけて寝転がる。

床の毛深い敷物のおかげで寒くはないが、やはりなれないせいもあるのだろう。

どうも体の向きは落ち着かないし、小さな虫の声や、風に揺れる木々の音、それにやはり他人が同じ空間にいるということも気になつて仕方がない。

体の向きをころころ変えてみたり、頭の中で羊を数えてみたり。

しかし集中力のない状態では雑念が多すぎて、こつちじゃ何ていうのだろうとかどうでもいいことばかり浮かんで消え、浮かんで消え……。消え……。消え……。

眠らなければと考えるほどに頭の中は冴えていく。

日本の自分の部屋なら、ひまをつぶすことは容易にできた。

本を読んだり、テレビを見たり、電話をかけたがり長風呂したり。

一人暮らして特に夜中に外出したからと言って咎められることも、口煩く言われることもない。どうしても部屋に居たくないときには夜中のドライブとしゃれ込んだものだった。

仕事はどうしても上手くいかなかったり、人間関係に悩んだりしたとき、よく誰も自分を知らないところに行きたいと思っていた。

静かできて、誰も自分を気にしない、過去がなくても上っ面で付き合えるところへ。

一時的な表面上の付き合いは容易い。

それこそ病院で数え切れないほどにとおりすぎっていく。

一ヶ月から短ければ3日で目の前を通り過ぎていく患者たち。

愛想が良く、話も聞いてくれていい看護師さんだなんて誉められたこともある。

誰かのために動くことは楽だったし、そのことで誉められたり、お礼を言われるのは嬉しかった。

与えるだけの環境。

患者あいての中には踏み込んでいくけれど、決して看護師わたしの中には患者は踏み込んでこない。

誰だって、自分が辛いときは話を聞いて欲しいものだ。優しく思いやって欲しいものだ。増してそれが当たり前かんきょうの病院なら。

進んで声をかけ、話し、笑うその姿を、羨ましいとさえ言われた。

けれど、本当は人と深く付き合うことが苦手だった。

他人に、自分の深いところを見せることができなかった。

本当に悩んでいることはいつだって口にだせず。

口から出るのはどうでも良い上滑りした言葉だけ。

暗い天幕の中を見渡す。

もう何度もしたことで、見える範囲には今更気を引くものもない。

《あんなに誰も知らないところに行きたいと思ったこともあったのに。今はこんなにも帰りたい》

見えるもの、感じるものすべてが自分の知らないもので。

知らず知らずのうちに溜息が出る。

「眠れないのか」

掛けられた声に思わず飛び起き、振り向くと衝立の向こうで衣擦れの音が聞こえた。

寝苦しくて立てた物音が他人の眠りを邪魔してしまったのかと思うと申し訳なく感じる。

包まっていた布を横へどけ、衝立の向こうにいるであろう人物に向かって背筋を伸ばす。

「すみません。起こしてしまいましたか」

「こんな狭い空間で何度も衣擦れの音や溜息が聞こえてはな・・・」

起き上がるような気配があり、衝立に隠されて見えないが声は疲れしているように聞こえた。

「少し寝苦しくて。すみません殿下は疲れていらつしやるのに。原因の私が言うのもなんですが、気にせず眠ってください。」

言うては見たが、眠れるとは思っていない。

ただ、疲れている殿下に気にせず眠って欲しいだけだ。

初めの印象こそ怖いの一言に尽きるが、短い時間の中でそれだけではないと思ったから。

自分には理解できない環境で、その背に多くの人の人生を背負う年下の男性に、何も出来ない年上の自分が出る精一杯の思いやりをあげたいだけ。

自分の不安は消えないだろうし、考えることもやめられない。

けれど身体は疲れているのだから、きつといつか眠りの帳とばしは下りるだろう。

どんなに辛くても、どんなに悩んでも、身体は本能に忠実でいつしか眠りは訪れる。

そしてそれが重なるうちに薄れるのだ。

どんなに幸せなことも、辛かったことも。

今まで生きてきた26年ずっとそうだった。

そのことに救われてきた。

だから今回も。

「おやすみください。私も眠ります」

「・・・眠れるのか？」

「疲れていますから、きつと。それに明日もやることはたくさんあります。そのためにも少しでも身体を休ませないといけませんから」

やれることがあると言つのは幸せなことだ。その間だけでも余計な事を考えずにすむ。

こんな風に、何もない時間のほうが辛いのだ。

考えすぎる上に、建設的なことは浮かばないのだから。



「そうか……。明日もあるか」

「はい。フォルさんが朝起こしに来てくれると言っていました」

時計や携帯電話もないここでは、そうでないと起きられないだろう。昼日中、フォルは朝が来れば自然と眼が覚めると言っていた。慣れない環境に、夜更かしの身に付いた疲れた身体では朝早く起きることは難しい。けれどそれさえもいつかは慣れていくのだろう。

「ならば休め。私も言われたとおり眠ろう。明日のためにな」

「はい。おやすみなさい」

衝立の向こうの影が横になり、規則正しい息が聞こえると私も横になり目を瞑る。

少しずつ身体が重くなり、思考は薄れ、時をおかず、疲れた身体は眠りの淵に落ちていった。

こちらを伺うような気配に気づかず。



朝、約束ど通りに呼びにきてくれたフォルに起こされ簡単な朝食後、怪我人の待つ馬車へ向かった。

睡眠の充分とはいえない体は、少しけだるさを纏っていたが朝の空気に徐々に頭は冴えていく。

同じ位の睡眠しか取れていないであろう殿下は、目覚めたときにはもういなかった。

《この世界・・・いや自然と共に生きるとみんな早起きになるのかな。夜起きていても何にもないし》

元の世界に比べれば不便極まりないともいえる環境。

しかしそれと引き換えに排気ガスに汚されていない新鮮な空気に美味しい水があると考えれば、そのほうがいいのかもしれないと思う。

まあ、あの便利さに染まりきった自分がいつまでそれを良しと出来るかは疑問だが・・・。

「おはようございます。具合はどうですか？ 変わりはありませんか？」

自分の割り当ての馬車で一人一人に声をかけ、傷や身体の状態を観察していく。

昨日は出来なかったが、今日は怪我人にしてあげたいことがたくさんあるから、時間はあっても足りないかもしれない。

まずは空気の入れ替え。

そして、顔や身体を拭き清めつつ、全身の状態を観察。

みんな、戦場のままであちこちに血や泥がこびりついているから、感染防止と、気持ちと身体を少しでもすっきりすることが出来たらという願いを込めて、丁寧に拭いていく。

全身が綺麗になったら、傷の手当てだ。

化膿していないか、腫れてはいないか、熱が出たりしていないか、血液の量や、浸出液しんしゅつえき、膿の性状を見ていき、新しい布を当てていく。そんなことをしていたら、すぐにお昼の時間が来るだろう。

お昼は食事のセットと、食べられない人には食事介助をする。栄養は身体を保つ基本だ。少しでもたくさん食べて欲しい。

美味しいと感じること、食べたいと思うこと、ものを食べると言うことは生きることへつながるから。

そしてそれが終わったら、汚れた寝衣しんいを変えて、できたら床じきの布も変えたい。

病院の看護師の職では限られた時間と、多くの患者対応のため、一人一人へ自分が出る充分な看護が行えなかった。機械的にさえなっていたかもしれない。

だからこそ、そんなものに縛られない今、出来ることの精一杯をやりたかった。

重いものを運ぶとき、水を汲むときなどはフォルにたのみ、あとは『どうしても女性に身体を見せるのは！？』と顔を真っ赤に染めて逃げ惑う男性達を押さえ込んでもらう。

もちろん、仕事柄慣れてますよ・・・なんてこちらの感覚ではとんでもないらしいので、下半身は各々《おのおの》でやってもらうが。

なかでも、洗濯はきつかった。（もちろん洗濯機などあるはずもない）

なにかきついつて、まず中腰、そして冷たい水仕事に、大量の汚れ物。

それでも干したものが綺麗になり、乾燥させた香草の香りをつける  
と評判は上々で。

やりがいを感じているうちに3日が過ぎた。

こちらの世界に来てからは4日。

移動の中、昼は怪我人の世話。夜は殿下の身の回りの世話を。

と言っても、殿下はほとんどのことを自分でやってしまったため、殿下のためにやることは内実ほとんどないに等しい。

夜と朝に使う水の準備、衣装の手入れや天幕内の掃除それだけ。あとはほんとに手がかからない。

初日はあんなにも接触があった殿下だが、それが嘘だったかのよう  
に以降は必要最低限の会話のみ。

日々の端々《はしばし》でいろんな人の報告を聞き指示を出してい  
る場面を見るし、一時もひとところじっとしていない。

ひとつ屋根の下だから分かることだが夜も遅く、朝は早い。

状況に厭っていたと言っていたが、厭きる暇があるとは思えないの  
だが。

ディーンやラウルも忙しそうだ。

あの天幕での一件以来声も聞いていない。

移動と停泊を繰り返す日々は、周囲の人が気を使ってくれているの  
か、それほどひどくもなく、もっぱら仕事の合間にかかわる人と話  
すことで寂しさは感じずにすんでいる。

特に水汲みのときに手伝ってくれた青年ローディマス（というらしい）やセディ  
オンなどはあれこれと話しかけてくれる。

騎士道精神なのか（実際は知らないが、たぶんフェミニストのすご  
い版？）女性が珍しいのか、最初に恐怖したような人は幸いにもい  
なかった。皆一様に親切だと思う。

「エミは綺麗で若いし、良く働く、素晴らしい女性だからみんな好  
意しか抱けないんですよ」

セディオンなどはこういつてくれるが、正直きつい。

それを素直に受け取れるほど図太い神経は持ち合わせていない。

しかもここまでの人生そんなにまっすぐに誉められなれていないのでこの恥ずかしさといったら言うに及ばないだろう。それなのにこの人々（かわわつてくれる人限定なのでそんなにはいない）はみな人の眼をまっすぐに見つめ、砂でも吐きそうな誉め言葉を惜しげもなくくれる。

《イタリア人がいたらこんな感じかな・・・》

このごろやつと聞き流すことを覚えた。

初めはいちいち赤面したり、否定したりと無駄に精神力が削られ、何度目の前の口をふさいでやたいと思っただことか・・・。

しかし道中4日が経ったと言うことは、初めラウルが教えてくれた言葉を信じるならあと二日ほどで彼らの国に入るということだ。それにしては景色は変わらないのが気になる。

この世界がどんな文明の栄え方をしているのか、地理さえもまったく知らないのなんともいえないけれど。

それでも民家のひとつとして見当たらず、村人の一人にさえ会わないなんてことがあるのか・・・。

疑問は尽きない。

? - 14 黒髪(前書き)

いつも読んでくださりありがとうございます^^



抜けるような青い空だった4日目。

その日の夜に事は起こった。

とりあえずの悲嘆も、苦惱も日々の忙しさの前に忘れてしまえたその日。

優しい人たちに囲まれ、現実から眼を逸らしていたころに。

天幕の中で眠るのにも慣れた。

雨風もなく、床は毛皮で暖かい。

殿下が一緒の空間にいるが、間に衝突がありほとんど気にならない。女として、かけらも危機感を抱かないと言うのはどうなのかと言う側面もあるが、恋愛に心ときめかす余裕などあるはずもない。あるのは年下の彼の背負うものの大きさへの同情と少しばかりの憐憫<sup>れん</sup>、そして人の上に立つものへの尊敬だった。

今日の日中も患者の世話に走り回り、疲れは泥のように身体に溜まっている。

だが、劇的にはいえないが、徐々に治っていく怪我人たちの姿に心は軽くなっている。

今は夢も見ない眠りの中。

しっかりと与えられた掛け布を抱え、時折寝返りを打つ。

その姿を毎晩見ているものがあるなどかけらも思いもせず……。

「……この女には危機感や、羞恥心と言ったものがないのか？ 毎晩、毎晩、本当に良く眠る。いつそ感心するほどだ」

夜もふけたころ、天幕の布が揺れ、金と銀の男が足を踏み入れる。

殿下とラウルだ。

殿下は毎夜、女が寝静まったところに天幕の外へ出て行き、ラウルの寝場所へ転がり込んでいた。

それは騎士としての矜持であり、男として未婚の（たぶんそうである）と思う……女への礼儀として。

女の前では初めからの態度を貫いているが、それは余計な気を使わせないためで、初めの晩、脅えながら眠った女の頬に濡れた跡を見つけて以来、あるかないかの罪悪感が刺激されている。

戦場では女は戦利品だ。

侵略され、蹂躪された村や町の哀れな女たちの結末を何度も見て来

ている。

今更、何も感じないはずだった。

自分の手はそんなに大きくない。

多くのものはつかめない。

下手な同情で欲張れば、手の中の大事なものを失ってしまうから。

前に進むために、真実大事なもの意外は諦めて、目を逸らしてきたはずだ。

そして、何も感じないようになっていたはずだった。

少なくとも今までは……。

二人は布に包まり、すやすやと眠る女を覗き込む。

ここに着たばかりのころのただ痛々しさだけが目立っていた顔ではなく、どこか満足そうに眠るその顔を。

「疲れているのですよ。目の前のことに精一杯で、ほかを考える余裕などないのでしょう」

ラウールの言うとおり、頭上で会話がなされているにもかかわらず、目覚める気配はない。

この男所帯の殺伐とした隊の中、独りぼっち、誰も知るもののない女。

まるでこんなものは初めて見た、触ったとでも言うように、一つ一つを不思議そうに扱い、ものめずらしそうにしている姿を、いたるところで見かけた。

もう成人しているだろうに、物を知らず、かといって何も分からな  
いわけではない。

現に、教えられたことは今のところすぐに出来るようになっていようであるし、

「怪我人への対処は評判がいいと聞いた」

怪我人の処置ではラウルですら唸らせる。

この、国で最上の医師の一人であるラウルを。

「はい。彼女には7人の世話をしてもらっています。任せている者は比較的重体ではないものの、良く気がつき、彼らの評判は上々です。女の人だからでしょうね。私には香草を布に焚きこめるなど思ってもよらなかった。手当ての仕方も理にかなっている的確。他の医療従事兵たちに教えて欲しいくらいですよ」

「そうか」

「徐々に周囲のものの警戒心も解いていつているようです。見返りもなく怪我人のために尽くし、走り回る姿や、嫌な顔もせず毎度律儀に挨拶やお礼を言う女性を嫌い続けられるものはいないでしょう。それがたとえあの姿かたちでも・・・」

視線の先の艶やかな黒い髪。

背中の中ほどまでをゆったりとしたウェーブが覆っている。

睫毛や、眉も同じ色彩で。

肌は刈り入れ時期の麦の稲穂のようできて、上質の衣のような手触りだ。

一度だけその肌に触れたとき、その気持ちよさに驚きを覚えた。

滑らかな手触りはその下に柔らかな弾力を伝えてきて・・・正直離すのが惜しかったほどだ。

顔に、少しのそばかすが浮いている。

閉じられた瞳の色は黒か茶色が、未だ光の中で覗く機会はなく、判別できない。

美しさや、可愛らしさなら宮殿の女たちのほうが明らかに勝っている。

それに、戦場に突然現れ、正体の見えない言動は警戒すべきものだ。

だが、不思議にこちらの手になじむ肌。こびない態度。

どこか不安定な風情に、眼が、心が引かれるのも確かだった。

「これから、彼女をどうするつもりですか。今は信頼できるも者だけですが、戻ればそうはいきません。連れて行っても傍には・・・」

「分かっている」

傍におくのは余計な隙を作るようなものだろう。

国の多くのものにとって忌むべき色を身につけていては。

足をすくわれる可能性・・・まだ足場を充分に固め終わっていない立場としては避けたい、避けるべきことだ。

「情が移りましたか」

「かもな・・・」

「珍しいこともあるのですね。とっくに枯れ果てたかと思っていま

したよ」

「失礼だな……。お前よりは若い俺に」

伸ばした指に絡みつく黒髪。

「これは、染めさせましょう。あなたが珍しくも心引かれた女性を失くす訳にはいかないですしね」

目の前の苦難の道ばかりが用意されている彼に、少しでも安らぎを与えられる者ならば。

彼女にとっては迷惑かもしれないがここは譲ってもらおう。心が動くと言うことが少なくなった殿下のために。

「まあ、このまま何事もなく国に帰れるとも思わないが」

眠りの中にいる彼女の与り知らぬところで状況は進んでいく。

国に入るまであと約1日。

足音が天幕に近づいていた。



? - 14 黒髪(後書き)

? 章は帰国するまでとなります。

と言つか、まだ殿下の名前が……。



? - 15 王都へ 1 (前書き)

今回主人公は夢の中で、まったく登場していません。  
よろしく願います。

足音に気が付くと、二人は入り口へと近づいた。  
こんな夜中に天幕へ近づくものがあるとすれば敵か危急の報告のど  
ちらかで。

「失礼します。殿下。火急の報告が」

どうやら後者のようだ。

国に帰り着くまであと1日。何事もなく帰りつけるとは思っていな  
い。

むしろここまで何もなかったほうがおかしかった。

《ここで報告を受ければ、さすがに眼を覚ますか・・・》

後ろで何も知らずに眠る者の安らぎを妨げるのも気が引ける。

彼女は何もここで苦勞しなくとも、後に波乱含みな生活が待ち構え  
ているのだ。

そう考えると今くらいは安らいでいて欲しかった。

「外で聞く。入るな」

ラウルと共に天幕から踏み出すと、片膝をつきディーンとフォルが待っていた。

夜にもかかわらず、二人共に休んだ形跡はない。

むしろ外套は土埃を被っており、今まで何をしていたかが伺える。

「何か動きがあったか」

夜気は澄んでいて、昼間とは違い肌寒い。

「殿下の予想どおりに。森を抜けたところに約20、こちらへ向かってくる様子あり、皆山賊風の格好をしていましたが中に見知った顔を見つけました」

「浅はかな・・・」

言葉に反応したのはラウルだ。

優しげに見える顔を歪め、吐き捨てるように言った。

「いくら山賊風情を装っても、自国の兵を使つては気づけといっているも同然」

安易な偽装に命じた黒幕の軽い頭が透けてきそうだ。

せめて傭兵を雇えばいいものを、奴はそこまで考えが及ばない。

もちろん命を受けるおろかな者たちも。

「こちらにたどり着くまであと四半日もかからぬかと・・・」

「・・・」

「奇襲を避けるとなると、すぐにでも移動の開始が必要です」

その場にいる視線が集まり、決断を迫る。選択肢は多くない。一瞬の迷いが多いの人命を危険に晒す。

「二手に分かれて山を下る。怪我人の中でも歩けるもの、状態の軽いものは降ろせ。荷は少ないほうがいい。重症の者のみを一台の馬車に乗せ、警護は4人ほどに。道を引き返し一旦セザール領のほうへ迂回、そこで帰還が叶うまで治療および待機とする。人選はディーンに一任する」

セザールは王都から他の領地を2つほど挟んだ田舎だ。領民のほとんどが農業や畜産で糧を得ている。

セザールの領主は40を少しばかり超えた長身にがっしりと筋肉をつけた男だ。

顔立ちは悪くなく、土地の豊かさなどから、宮廷にいたころは多く

の姫君達から秋波を送られていた。

しかし・・・本人は農業を愛してやまず、女性の魅力よりも牛や豚の魅力を讃え。

高価な調度品よりも農具を喜ぶ。

一言で言えば変わった男だった。

名をエイディールといい、国の農業についてかつて教えを受けたこともある。

性格は明朗活発、陽の下が似合う明るい男だ。

曲がったことが大嫌いで、正々堂々を好む。

魑魅魍魎ちみもつりじょうりゅうの跋扈はつこする宮廷内で、信頼に足ると思わせた数少ない者のひとりだった。

そのエイディールは、裾引くご婦人たちを振り切って、昨年あつさり乳兄弟の妹と結婚し、自領を継いだ。農業を愛してやまぬ男にとつては望みどおり道の道であった。

本当は引き止めておきたかったが、それをしない代わりに協力をしると迫った。

『お前が窮地であれば、そんな取引せずとも俺はお前を助けるだろ』  
『う』

持ちかけられた当人は笑って承諾してくれ、今に至る。

怪我人の十や二十くらい余裕で受け入れてもらえるだろう。

「すぐに移動に取り掛かれ。王都へ向かう者も準備を。街道を逸れ、川沿いから王都へ向かう」

敵は20。正面から突破しても勝利する自身はある。腕の立たないものなどこの隊にはいない。しかし、怪我人もおりなおかつ戦場からの帰還で疲弊しているであろう騎士に無理はさせたくない。しなくてすむのならば戦いは避けたかった。

「殿下、あの女性はどうされますか」

すぐに踵を返すかと思ったフォルから天幕の中へと視線が移る。

何も知らない女。武器で戦ったことなど皆無であろう柔らかなその手。

今頃は夢の中だ。

一瞬、連れて行く事も頭を過<sup>か</sup>つたが、足手まといにしかならぬうえに、危険が伴う王都への道のりを考えるとやはりセザールへ向かわせたほうが本人のためだろうと思う。

「彼女はセザールへ向かわせる。王都への隊に女が居ては不審に思われるだろう」

「私もそれが良いかと」

ラウールの賛成も得て、これからの細かな方針を決める。

「全員を起こし、一刻（一時間）後に出発とする」

そして全員がその場から踵を返した。

ディーンは隊の編成を。

フォルは細部の伝達を。

ラウールは怪我人の確認と組み分けを行うために。

一瞬、天幕で眠る顔を思い浮かべたがすぐに思考から消える。

この肩に背負う命は一人ではない。

誰かのためだけに動くことは許されていないし、今はその猶予もない。

時間内に確実に全員が動けるよう、指示を出さなければいけないのだ。

きっと誰かが彼女を非難させるだろう。

説明など後からでも充分だ。

出会ってたった4日の女。

何も心に残るものはない……そう思っていた。





? - 15 王都へ 1 (後書き)

つたない文章ですが、これからもよろしくお願いします。

かりんとう 拝

閑話 厭わしく愛しい日々(前書き)

まだ異世界に来る前の、日常の二こまを載せさせてもらいました。  
楽しんでいただけたら幸いです。

## 閑話 厭わしく愛しい日々

1・自然の春。乙女の春？

今日も空は抜けるように青く、春特有の心地よい風に、何もなくても口が綻ほころんでくる。

新緑の季節。

起きだしたばかりの新芽は薄い緑に染まり、触ると吸い付くようで。

咲き乱れる花々は、眼にも鮮やかに世界を彩る。

こんな生きてることが幸せに感じる日は、お弁当でも持って、公園に散歩に行きたい。

近くにある植物園に花を見に行くのも楽しいだろう。

ドライブもいいかもしれない。道の駅や先々見つけたお店でのランチもいい。

でも、

干して日の光をたっぷりと浴びた布団に包まれて、お気に入りの小説や、ネットをしながらごろごろ過ごすのも捨てがたい。

きつと心地よい眠りの中、極上の夢が見られるだろう。

そう、

ここが実家でなければ……。

「エミっ。いつまで寝てるの！？早く起きてご飯食べちゃって」

「はあい。今行く〜」

寝ぼけ眼まなこに、寝癖だらけの髪、化粧一つしていない顔、よれたスウエットの上下と普段の余所行きの姿しか知らない人には到底見せられない格好で階段を下りていく。

たまの三連休、親孝行でも……なんて実際はご飯作るの面倒くさいなあなんて考えつつ実家へ顔を出したものだから、寝坊も許されない。

それでも、起きたらご飯が待っている。それもトーストに野菜ジュースなんて簡単メニューじゃない、純和風の朝ごはん。少しの不便さえ我慢すれば、彼女は今ご満悦と言えた。

この家では、

上の姉は一昨年嫁に行き、今待望の初孫を妊娠中で。

しかも娘婿は少しおとなしすぎるのと、県外であることを覗けば申し分ない。

父親は定年後、パチンコに勤しむことが難点であるが、老後に困らないだけの年金はもらえそうだし、下手な駄洒落は無視すればいい。もっぱら二階の自室で大人しくしている。

母はパートで日々の暮らしには困らないし、休日には趣味の温泉や

家庭菜園にいそしむ。

となれば、一家の、特に母親の心配事は下の娘の行く末だけであった。

休日に、気の抜けた格好でもそそとご飯を食べる26、いやもうすぐ27歳になろうかと言う女。

浮いた話も聞かず、このごろ世間一般に言われるオタクかも・・・など心配になるほどの読書好き。

親にとってどんな子供でも我が子は可愛い。

いや少々の親ばかフィルターはあるかもしれないが、実際我が子ながら綺麗なほうではないかと思っている。性格も少し変わっているが動物好きの優しい子だ。

ただちょっと天邪鬼なだけで・・・。

しかし、このままでは心配だ。

親元に足しげく通うのはいいが、予定はないのだろうか。

付き合っている異性は？結婚の予定は？

親に話すのは恥ずかしいのだろうか、仲の良い姉になら話しているのではと思ひ尋ねたが、聞いたことはないと言う。

それなら、知っている人を紹介してあげて・・・と頼むがなかなか難しいらしい。

どうしたらいいものか・・・

\*\*\*\*\*

最近、母親から妙な視線を感じる。

ちよつと前までは『あなたいい人は居ないの?』と顔をあわせるたびにいつていたが、この頃それが無い。

遂に諦めてくれたのかな、なんて思っていたけど、姉から聞く限りどうもそうではないらしい。

朝は人をたたき起こす勢いだったのが、昼過ぎから妙に機嫌が良く、鼻歌なんて歌っている。(オンチなのに・・・)

いつもなら『せっかくの休日なんだから出かけたら?』とか『予定はないの』などやたらと外出を推奨するのに、今日はそれも無い。

かといってだらだらするのを許すかと言えば、夕方には『休日とはいえどきちんとした格好をしなさい』

なんて・・・不気味だ。

日が長くなってきたとはいえ、季節はまだ春。夕方にもなれば暗くなり、肌寒くなる。

そろそろ風呂の準備でもしようかな、と思っていたときに家のチャイムがなった。

「光本さーん。坂田ですけど」

どうやら向かいのおばさんのようだ。

向かいのお家は我が家の三倍は大きな家で、ついこの間は外壁工事をしていた。

詳しい家族構成など知らない。

定年退職した夫婦と年取った柴犬のタローが散歩しているのをたまに見かけて挨拶する程度だ。

今の地域社会が希薄になった現代ではこんなものだろう。増して自分はもう家を出た身だ。

関係ないと判断し、風呂場へ向かう背に声がかかる。

「エミ。ちょっとこっちに来て。早く」

猫なで声に鳥肌が……。嫌な予感バリバリである。

坂田のおばさんは玄関の向こうに居るのか姿は見えない。  
しかし、居るのは分かる。

嫌だ。

行きたくない。

「早くしなさい。話があるのよ」

動かない娘に向かって一段低くなった声。  
悲しいかな、逆らえません。

廊下が長くて時間がかかる……。なんてわけもなく、玄関に付いた  
私を母はぐいつと前に出し、ここのたまった。

「始めましてかな、隆君。家のエミです」

!!!!!!?

図られた!!

「エミちゃん家の隆よ。エミちゃんとは5つ違いね。光本さん（この  
場合は母のこと）に聞いたけど、ちょうどお互いに今、<sup>い</sup>好い人が居  
ないって言うから」

だからなんだ。

「あんた晩御飯まだでしょう。ちよつどいいから隆君と食べに行つてきなさい」

何がちよつどいいだ。

冗談じゃない。

人の気持ちも知らず、目の前ではおばさん二人が、気持ちの悪い笑いを浮かべ、さあどうぞと言わんばかりに道を明ける。

一步も踏み出さない私に、母は天岩戸も開けられるんじゃないかとと思う力で背を押し、おばさんは機関銃のごとき勢いで息子の紹介をしてくる。

私は無言だ。

顔は愛想笑いを浮かべていようが、内心は口汚い罵り言葉でいっぱいだ。

目の前の青年は動かない。

視線も定まらず、5つ上とは思えない不審な態度でもじもじしている。

というか、紹介されるつもりならジャージの上下なんか着てくるなよ。

背は182cm、大手警備会社に勤めているらしい。

長身痩躯、親から言わせれば、優しく良い子で、趣味はDVD鑑賞だそうだ。

高校から寮に入り、柔道をしていたとの事、その割りに筋肉は付いていなそうだけど。

つか、自分の自己紹介くらい自分でしゃべれよ!!



おばさんに『あなた車出したら』なんていわれて息子が踵を返す。黒の四輪駆動車。つい最近買いとえた新車だそうだ。

・・・三十過ぎて、親に車を買ってもらうなよ。  
と、相手の車では主導権が握れない。

「おば様。私車出しますよ。ちょうど、通りに停めているんです」

したくもない愛想笑いに、内心の憤りを隠したせいで、少し高い声。おほほなんて、今まで言ったこともない台詞を言いつつ、慌てて車を取りに行く。

家の前に着けた車の助手席に、無言の私と、お願いしますなんて、聞こえるかこらっと怒鳴りたくなるような小声で言い乗り込んでくる馬鹿息子。（もう心の中で決定）  
どうぞ。と言いつつ窓を開け放ち、急発進する背中に、

「上手くいくと良いわねえ。そしたら来年は結婚式かしら」

なんて寒気の来る台詞が聞こえる。

・・・マジで勘弁してください。

相手は予想どおり、自己主張のない、口を開けば社会不適合者かと思えるほど会社の愚痴をこぼし。

特に趣味もなく、服も親が選ぶという。

そんなこんなで食事中ずっとイライラさせてくれた青年にときめきなど覚えるはずもなく。

食後は堪忍袋の尾が切れ、社会人として一時間みっちり説教してあげましたとも。

帰宅後、そわそわとこちらを伺う母にきっちり拒否をし、ストレス解消に風呂浴して、もう近くにいたくもないとばかりにさっさと、自分の家に帰宅。

しかし、翌早朝。

「向かいの息子さん、あんたさえ良ければ話を進めて欲しいって。どおする?」

とまったく懲りてない母からの電話。

・・・最悪の目覚めです。

あいつは（もう尊称も何もなし）マゾか？年下の女から一時間説教されて、どうして話が進むのか。

頭かち割って見たい。

いや、もう近寄りたくない。

「どうも何も、きっちり断って。言いにくいなら私が直接言っよ!」

電話越しにも私の剣幕が伝わるのか、母は慌てて『母さんが言うから』と電話を切った。  
当たり前だ。

しかし、向かいの家との関係は微妙なものになるだろう。  
母のため、自分のためにもしばらく実家に顔は出すまい。

母が持ってきた思いもよらない春は、娘にとっては台風並みの迷惑さを存分に振りかざし。

親の心子知らず。子の心親知らず。

私の春はまだ遠い様です。

閑話 厭わしく愛しい日々(後書き)

闇夜に溶けるように身を隠し、息を殺す。

恐怖から来る緊張に、心臓はばくばくとつるさい。

自分の鼓動が聞こえる。

震える手足、鳴り止まぬ歯の根を押さえ、藪の中で身を小さく縮めた。

雨はまだ止まない。

力の入った指先が白く強張り、

ししどに濡れそぼった体から熱が失われていくのが分かる。

この身体から零れ落ちるものはなんだろうか。

体温？体力？気力？

それとも……

まだ心のどこかで隠し持っている希望だろうか。

藪やぶを掻き分け、枝を踏み折る音がする。

敵か味方かも知れぬ音と、暗闇、そしてひたすらに震える身体を苛さいなむ雨。

孤独と恐怖に心は白旗を振り逃亡を試みる。

夢の中へ。

狂気の中へ。

決して逃げ切れぬことを知りながら、

瞼を閉ざし、現実を否定する。

終わりは近い。

彼の人の言うことが真実であるのならば、

ここで待つのもあと少しのはずだ。

ひとつ、ふたつ、みっつ……

もう何度目なのか、何を数えているのか、

ただひたすらに言いつけを守る。

小さく膝を抱え、さらに岩陰に身を潜めつつ。

夜明けはもうすぐだった。

\*\*\*\*\*

まだ、眠気の残る瞼を擦りながら俄かに騒がしくな<sup>にわ</sup>った周囲を見渡

す。

「準備は出来たか」

真上から聞こえてくる低い声にうなづきを返しつつも、つつい頭が垂れる。

砂礫の付いた長靴。

きつともとは艶のある黒だったのだろうが、今は土に塗れ、足首辺りまでが白くなっていた。

まだ辺りは闇に覆われている。

月は天高く地上を照らし、今が夜更けであることを教えてくれる。眠ったのは月が真上に届く前で……

時計や、時間を表すものがない生活は不便だ。

今まではあんなに時間に縛られるのを苦痛に思っていたのに、自由になったとたん、時間に固執する。

この四日間の移動は全て朝方だった。

夜に寝て、朝起きる規則的な生活。

しかし今は真夜中で。

何か、あったのだろうか。

夜の静寂を壊すように、人の動く音、物がぶつかる音が辺りに響く。いつもならここに、人々の話し声が聞こえるのだが、今はそれもない。



騎士たちは口を嚙み、緊迫感を孕んでいる。

「急がなくてはならない。説明できたら良いが、今は時間がない。

エミ、自分の荷物を持つたら、怪我人と共に移動しろ。

隊はここから二手に分かれる」

荷物というほどのものはない。支給された着替えが一着と、布が三枚、そして簡単な医療具だけ。

寝入っているところをたたき起こされ、それらを皮袋に詰め込みここに立っている。

普段と違うのは、革張りの編み上げ長靴を履いていることと、外套を着けていることが。

どちらもサイズが大きく、着ているというよりは着られているといった風情。

頭上から振ってくる声に顔を上げる。

3日、昼間を共に過ごした。

慣れない環境で看護する自分をなにこれと面倒を見てくれたフォルが居る。

160センチの自分より、頭ふたつは高い、引き締まった体躯。

赤茶の短髪に、茶色の瞳。

額から右眉にかけてある引きつった古傷が、甘くなりそうなマスクを引き締めている。

その表情は、見たこともないほど真剣で、睡魔の名残が残っていた

思考が消える。

「なにかあつたんですか？」

三十人ほどの隊が二手に分かれる理由が。

こんな真夜中に逃げるように急遽移動するほどの何かが。

「詳しい説明は出来ないが、大人数での移動は危険だと判断された。怪我人と、何人かは安全な道に行く。その他は川沿いに逸れ、王都へ向かう。寝入りばなに悪いが朝までは待てないんだ。世情は不安定で、決して油断できないのだから」

説明しつつも、足は野営地の中心へ向かう。

よほど時間が惜しいのだろう。

口調は早口で、何も知らない身では説明内容は良く分からない。詳しく聞いたかったけれど、それが許される雰囲気ではなかった。

危険がある。

怪我人は安全な道に行く。

残りは川沿いに王都へ向かう。

何とか分かった三点を頭に叩き込み、うなづきを返す。

「エミは怪我人に付いて行け。他にすることがあり、俺は連れて行

けない。できるな」

怪我人に付いていく。

それは理解できた。

了解の旨を示すとフォルは私の頭をひとなでして走り去っていった。

《私は小さな子じゃないんだけどな・・・》

もつとも、フォルからしたら子供のような身長差。

急いでいて、とっさに手が出たに違いない。

外国人からすれば幼く見えるという日本人だが、昔から老け顔で、歳相応にも増して年下になど見られたことはないのだから。

周囲は物音を立てつつも、確実に出立の準備を進めている。

皮袋を掴みなおし、言われた言葉を思い出しつつ周囲を見渡す。

野営地の端、いつも通っていた馬車から降りてくる怪我人たちが見えた。

セディオンもいる。

彼は折れた腕を布で吊ってはいたが、鎮痛剤を使えば歩行に支障はなさそうだ。

彼らはそのまま歩き出し人の集まったほうへ向かっている。

『怪我人に付いて行け』

フォルの言葉を思い出す。

見失わぬように、彼らの向かう方へ小走りの速度を上げる。

自分の患者以外のもう一台にいる者たちのことは思い出すことはなかった。

視界の外。

眼を逸らしたまさにそのときに。

怪我人の降りた馬車から馬が外され、奥に止められていたもう一台の馬車に何人かが移っていた。  
その周りを囲む騎士は4人。

怪我人全員が乗り込むのを確認し、ひっそりと野営地から反対方向へと出立する。

馬車と騎馬の速度は速く、その姿はすぐに森の奥へと消えて行った。

? - 15 王都へ 2 (後書き)

いつも読んでいただきありがとうございます。

よければ感想などお待ちしています。

かりんとう

小走りに歩み寄った先には、追いかけていた目的の人物のほかにも、14・5人ほどの騎士たちが集まっていた。

帯剣し、旅装束に身を包んだ騎士たちの視線は集まったその中心に向かっている。

160cmそこそこのエミに比べれば、皆一様に背が高く、その先は見えない。

隙間からでも・・・と身体をひよこひよこ動かす様はどこか滑稽だ。松明を囲んだ向こうにでも行けばいいのだろうが、向こう側は中心つまり注目の的。

目立つ気もない、しかし中が気になる身としてはやることはひとつ。

つん、つん

「・・・」

つん、つん・・・ぐいっ

「何だっ。・・・エミ?!」

袖を引くこと数回。

まっすぐに立つ他の騎士たちに比べて、片方の足を庇うその姿は集

団にいてもすぐに分かる。  
だが暗闇では、あの輝くばかりの青い瞳は見えない。

「セディオンごめんなさい。中が見えなくて、何を言ってるのか教えてくれる？」

「っ……っ」

ぐいっ

袖を掴んでいたはずが、しゃがみこまされる。

思いのほか素早い動きに、怪我也随分良くなったのか、鎮痛薬が良く効くのか。

たぶん後者だろうなと考える。

骨折はいくらなんでも4日では治癒しないから。

いまだ包帯の巻かれた箇所視線が集中する。

そのことを咎めるように、

「どうして此処にいるんですか？怪我人の方じゃなかったんですか」

質問したのに、答えよりも先に質問で返された。

しかも何故だなんて、そんなの決まっている。

「怪我人の方って、あなたも怪我人でしょうか？セディオンがこちら

に向かうからそうなのかなと思って付いてきたのだけど……」

違うのだろうか。

「馬車は？もう一台あったでしょう」

背後を振り向き、そこに在るべき物を探すが、あるのは暗闇と、馬のいない木箱だけだ。

馬車などいない。

「もう一台？」

いるはずもない。

もう去ったのだから。

同じく視線の先に目的のものが無いのをセディオンも確認する。

彼は首を振り、無事なほうの手で顔を覆う。

そしてうなだれた顔の隙間からは、深い溜息が聞こえた。

「……………」

怪我人……もう一台の馬車……

フォルの言葉。



「・・・」

やってしまった。

間違えた。

付いていかなければいけない隊を間違えたのだ。

馬車は2台あった。

自分の世話する怪我人の乗った馬車と、ラウルが世話する重傷者の乗る馬車の2台が。

怪我人に付いていけと言われて、普段自分のかかわる人たちだと思  
い込んでいた。

「どうしよう。い、今ならまだ追いつけるよね」

馬の付いていない木箱が寂しく映るほうへ腰をあげる。

その方向はもう人の気配もなく、木々の向こうは闇が見えるばかり。  
街灯が当たり前にあり、真の暗闇など体験することがない社会で暮  
らしてきたものにとっては、不安と恐怖心をあおられる景色だ。  
怖い、が向かわなければならぬ。

馬車に容易に追いつけるとは思っていないが、道さえ分かればその  
うち追いつけるはず。

「じゃあ、わたし行くから。セディオンも気を付けてね」

早く行かなければ。

何も出来ないのなら、せめて指示くらいは確実にこなせるように。自分のミスに急くように、逃げるようにその場をあとにしようとした。

「待つて。待つてください」

先ほどは自分が引いた袖を今度は逆に引き止められる。

「なに・・・私急がないと」

「急いでも追いつけません。相手は馬です。それに女性が一人で森の中を行くなんて、何があっても文句は言えない。せめて、馬を借りられないか僕が聞きますから」

それまでは・・・と続くであろう言葉に、しかし頷くわけには行かない。

自分のせいなのに、誰かに迷惑をかけたくない。確かに暗闇は怖いし、不安もある。

《けれどきつと大丈夫。

歩いてもだめなら、走ってでも・・・》

根拠のないただの強がりだが、迷惑をかけることに比べたら、正しい考えのように思えた。

寄る辺のない身で、何も知らない世界で、自分が迷惑をかけることで呆れられ、見捨てられることのほうが怖かった。

「そこまでしてもらえない。それにセディオンは片手でしよう。私を乗せて馬を走らすなんて無理。大丈夫、私なんかを襲う人はいない。すぐに追いつけるはず・・・」

だから放して・・・と続くはずだった台詞は、突然かけられた言葉によって消える。

互いと、自分のこれからに集中し、周囲が見えなくなっていた二人にとっては突然で。

しかし、いつの間にか終わっていた通達に静まり返っていた騎士たちにとっては当然に。

ここにいるはずのない明らかに男性とは違う高い声に

気づかないほど愚かなものなど、居るはずもないのだから。

背の高い騎士たちの間から、夜なものにもかかわらず松明に照らされる眩いほどの輝きを持った人に。

「お前が何故ここにいる」

そう言われるのは必然であった。

？ - 15 王都へ 3 (後書き)

小箱は馬車本体を表します。

「殿下……」

中心から現れたひと。

背後にはフォルやラウル、ディーンの様も見える。

殿下が声をかけたことによって、全員の視線が集中し、居た堪れない。

怒ってないだろうか。

呆れられていないだろうか。

視線が上げられない。

「フォル。私は確か、別働隊に渡せとお前に言わなかったか」

感情の見えない声に、自分が言われたわけでもないのに身体が固まる。

声を聞いた途端に地面に膝をついたフォルに、罪悪感が募る。

「フォルさんはちゃんと伝えました。私が思い込みで間違えたんで

す

彼は悪くない。

それを分かって欲しい。

責められるべきは私なのだから。

「・・・フォル＝シュテービリアン。言い訳はあるか」

「いえ」

「無事に城に戻った後、罰を与える。それまではお前が責任を持つて対応しろ」

まるで私の意見を見殺した沙汰に、焦りが高まって。

フォルは悪くないのに、思い込んだ私が悪いのに。

もう決定事項を伝えたとばかりに踵を返そうとする殿下に、真実を分かって欲しくて声を出す。

「ま、待ってください。本当です。フォルさんはちゃんと私に伝えてくれました。

私が、思い込んで間違えたんです。フォルさんに非はありません。

それに、私はすぐにここを発つて別働隊のほうへ向かいます。ご迷惑はかけません、ですから・・・」

「黙れ」

「っ」

何の言い訳も許さない静かな声は、それほど大きくないのにその場にいる全員に聞こえた。

一つ一つ、いい含めるように、声は続く。

「お前が罰を受けるとでも？今からここを発つて別働隊に向かう？迷惑はかけない？」

思いつがるな。女一人、何も知らないお前に何が出来るのか、自分の立場をよく考えて物を言え。それに、下のもののミスは上のミス、有事の際に指揮系統を乱す奴は論外だ。一つの誤りが全員の命にかかわるということを肝に命じる」

かけらの反論も許さない発言は、確かに命の駆け引きの中に生きている者の正論で。

感情に任せた無様な答えなど入り込む余地は無い。

「一人で別働隊に追いつこうなど無理以前に、もう手遅れだ。自分のやったことを噛み締めて、以後は指示に従え。決して一人で行動するな。ここからは一人のミスが全員の命に係わってくる。以後お前の身はフォルに一任する。戦場で次など無いと思え」



それだけ告げると、殿下は今度こそ背を向け、歩いていく。

遠ざかっていくぴんと伸びた背に、揺らぎは見えない。

自分の口からこぼれた愚かな言い訳に、罪悪感と、羞恥心が募る。そして今まで感じなかった見捨てられたような恐怖に身は竦み、手足は固まったかのように動かない。

自らの失敗を自分で拭えない今、フォールに謝罪をしなければいけないのに。

けれど、どんな言葉で謝れば良いのか、これが今後にどう影響を及ぼすのか、戦時を経験したことの無いものに、その行く末は創造しきれないのも確かだ。

事実、起こして知ったことの重大さを全て分かりきったわけでは無いだらう。

たかが行き先を間違えただけ・・・日本にいたならそれで済ませられたことなのかもしれない。

だがここは平和な日本ではなく、今も戦争が身近にある異世界だから。

事の大きさを理解し切れていない上での謝罪の言葉が浮かばない。自分のせいで処罰を受ける彼に謝りたいのに、分からない上での言葉は上滑りしそうで。

言葉が出ないから、次の一步も踏み出せないまま立ち尽くす。

ポツ……ポツ……

晴れない心を移したのか、先ほどまで月が見えていた空が、分厚い雲に覆われ

気まずい空気に耐え切れないように冷たい滴しづが地面を濡らしていく。

「エミ、行くぞ」

緊張に冷たくなった指先に触れるもの。

近づいた彼を見上げるばかりで動かないエミに、フォルは両手で包み込むように皮袋を握らせる。

いつ落としたのか、身に覚えが無かった。

「あの……」

交わした視線の中には、怒りも、厭きれも、蔑むような感情も見えない。

ただただ静かで、相手を気遣う様子さえ伺える。

くしゃ

「済んだ事は気にするな。二度としなければいい」

頭に置かれた大きな手に

なんだか泣いてしまいそうだ。

「だがこれはお前が招いた結果でもある。あちら（別働隊）ならまだしも、これからはキツイ道程となる。泣き言は聞かないし、足手まといも許さない。殿下の言うとおりだ。何も知らないお前に何が出来るわけでもない。弱いということを自覚して、決して俺から離れるなよ。俺たちの言う事は絶対だ。分かったか」

「……ごめんなさい」

「王都に還ったら、殿下の罰則の手伝いでもしてくれ」

「はいっ」

優しいだけじゃない、ただ許す訳じゃない。

けれど見捨てられても、詰られても文句は言えなかったである。自分を受け入れてくれた。

フォルも、そして気づかせてくれた殿下も。

これからはもっと頑張ろう、決して足手まといにはなるまい。

「エミはちっさいから馬から落ちないか心配です。疲れたら言っして下さいね」

降り出した雨にしつとりと濡れた頭へ外套のフードが被される。振り返るとセディオオンが馬を2頭連れていて、そのときはじめて自分たち以外の存在が消えていることに気づいた。

「他のみんなはもう馬に乗ってます。後は僕たちだけです。フォル、荷物はもう括り付けました。行きましよう」

「ああ、助かる。エミ、俺に掴まって決して落ちるなよ」

フォルの手助けを借りて馬上に上がる。すぐに後ろへ乗った彼の言葉に頷きフードを深く被った。

夜の静寂に包まれていた森に蹄と馬のいななきが響き渡る。

まだ地面は泥濘ぬかるみにはなっていない。

雲に覆われ月の位置が確認できないため、時間を予測することは難しい。

しかし敵はこうしている間にも確実にこちらに近づいてきているはずだ。

雨のひどくならないうちに距離を稼ぐため、一行の脚は自然と早くなり、馬に慣れていないものにはきつい道のりとなっていく。

残された広場には持ち主のいなくなった木箱が一台、ただ雨にうたれていた。

？ - 15 王都へ 5 (前書き)

状況的には足踏み中です。

徐々に酷くなっていく雨の中、木々の合間に数頭の馬がいた。

一番しんがりを行くのは2頭の栗毛。

馬たちは徐々に森の奥深くへと消えていく。

その馬上に人影は無かった。

「良かったんですか？馬を放して・・・まだ目的の場所じゃないの  
に」

馬とは対角線上にフォールと、セディオン、そして少し離れた位置に  
全員がいた。

一行は野営地から、急ぎ足で駆っていた馬を先ほど手放していた。  
慣れない騎乗でお尻が痛く、また足が満足に立たなくなっていたエ  
ミにとつては、馬を下りることは大歓迎だったが、それは休憩のた  
め、一時的なものだと思っていた。

しかし馬をおり、生まれたての小鹿のような頼りなさで傍の木にす  
がって振り向いた時には、鞍が外され、一行から遠のいていく馬が  
見えたのだ。

初めは脱走かと思って、慌ててフォールの裾を引いた。  
早く捕まえなければと思った。

「馬、馬が逃げて行ってますよ！捕まえなきゃ・・・」

声をかけるが誰も動く気配が無い。

焦る気持ちに後押しされ、ふらつく足取りで追いかけてようとし、  
『  
必要ない』とフォールに止められたのだ。』



そして、先ほどの台詞になる。  
まだ目的の場所じゃないのに……と。

「これからの道は険しく、馬は使えない。軍馬を手放すのは惜しいが、命には代えられないからな」

だが、雨に抜かるんだ土に足をとられ、今後歩きづらくなること確  
実で。

しかも夜半に出発したため、皆十分な休憩が取れていない。  
各自が荷を持った上でのこれからの行軍はきつい筈だ。

「旅なれぬエミにとっては、苦しい行程となるだろうが、耐えても  
らわなければいけない」

こういった言葉かけをされるということは、『一行の中で一番足手  
まといなんだから弱音を吐くなよ』  
ということなのか、それとも純粹に氣遣ってもらっているのか……  
つつい頭の中を暗い考えが過かよってしまう。

それは……自分が足手まといだと分かっているから。

ただ、見捨てないで欲しいと願っているから。

けれど何うように相手の顔を見上げて、他意の無い視線にぶつかり、恥じ入りたくなった。

《考えすぎ・・・か》

「大丈夫です・・・とは自身持つて言えないですけど、頑張ります。立ったり、歩いたりには慣れていきますから」

看護師の仕事は朝から晩まで立ち仕事だから。

ナースコールに走り回ることもあったし、体格のいい患者を持ち上げたりもする。

体力が必須だし、病院によっては職員は階段しか使えない所もある。

正直に言ってしまうえば、体力のありそうな騎士たちに”険しい”とまで言わしめる道のりには不安しか抱けない。

が、自分より皆はるかに重そうな荷物を持ち、休まずにここまできているし、

そのうちの3人は、こんなことになるまで治療と療養を必要としていた患者だった。

隣を見上げると、こちらを気遣うようなセディオンの瞳とかち合う。

そのこちらの不安を見越したような表情に、「大丈夫だよ」という意味を込めて、小さく頷きを返した。

ほっとした様に頷き返す彼は他人の心配する余裕など無いはずだ。

一行は、各人が、荷を背負ったり、腰に巻きつけたりしていた。手に荷物を持つているものなど一人もいない。

両手が自由に使えないと、いざというときに対処できないから。

だがセディオンは、右手に杖代わりの杖を持っていた。

よく見れば、少し右足を庇っているのが分かる。

治癒過程にあるといってもまだ完全じゃない身体で、ここまで自分で馬を駆ってきた。

右足の矢傷はもちろん完治などしていないし、片手は添え木で固定されている。

鎮痛剤を飲んでいるとはいえ、酷使すれば当然痛みは酷くなるし、治りも悪くなるだろう。

けれど、弱音を吐かない。

こちらを気遣ってさえ見せる。

男の維持とか、騎士の矜持きやうじというものなのかもしれない。

辛くないはずは無い。

ただ、それを見せないだけなのだ。

それに比べて、肩に矢傷を負っているものの、負荷さえかけなければ五体満足といえる自分が。

ただ馬に乗っていただけ、しかも迷惑をかけたばかりの自分が・・・

弱音など吐けるはずも無かった。

\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*  
\*

夜の暗い山中を、つかづ離れず、黙々と歩いていく。

何人かが、ランプに灯りを燈し、その小さな光だけを頼りに進む。

なだらかなだけの道ではなく、木の根もあれば、岩もある。

その一つ一つを時に躓きながら、えっちらおっちら、遅れないように付いていく。

大丈夫と言ったものの、障害物が多く、苔が密生しているところでは、滑って転びそうになる。

暗いせいもあるだろう。神経が集中し、歩くのに精一杯で声も出ない。

自分ひとりでは絶対に歩けなかった。

誰かがいる。

そのことが支えであり、頼りだった。

実際、だんだん険しくなっていく道程は、もう道とはとても言えなくなってきた。

樹が鬱蒼と生える間を、岩が積み重なる段差を。

このころになると、両手を使わなければならず、体力はさらに削られる。

おまけに、外套を着込んでいるものの、合羽のように完全防水ではないため、衣服は重くなっていった。

唯一つの救いは、まだ下着までは染込んでいないことか……。

目指す目的地まではまだ遠いのだろうか。

歩き出して、小一時間ほど。

どんだんと森の奥深くに入っていて、王都からは遠のくばかりのよくな気がしていた。

総勢15人の集団の中でただ一人の女であるエミは、隊やや後ろ部分で前をセディオン、後ろをフォルに挟まれそのあとに2人の騎士

が歩く。

自分のことで精一杯なエミは、先程からさりげなく差し伸べられる手に、特に気づく様子は無い。

泥濘はひどくなり、足は泥に捕られ、隊の足取りは徐々に遅くなっていく。

遠く、木箱佇む広場で、不吉な足音が響いていたが、まだ気づくものはいない。

「先頭から伝令です。前方に敵の影なし。夜のうちにこのまま川沿いまで進み、王都へ向かうとの事です」

先頭からの指示を受けた、ローディアスがフォルに告げるその声にも疲れの色は隠せない。

彼もまた雨に濡れ、足元は跳ねた泥で汚れている。

《まだ歩くのか・・・》

文句ではない。

ただ、無意識にまだこの行軍が続くのかと思っただら、気合の前にもうしても溜息が漏れてきてしまう。

そんな姿を見てか知らずか、助けの手が入る。

「このままでは体力の消耗が著しく、移動に支障も出てくるだろう。殿下は他に言っていないかったか」

.....

「はい。あと2ユール（約2KM）ほど進んだところに洞窟があるようです。そこで短く休憩を取ればと仰っていました。」

目標が、ゴールが見えれば、不思議と力が湧いてくるようで・・・

そこからの足取りは、前につんのめるように前へ、前へと進んでいき、  
疲れに沈んでいた瞳は、休憩という餌に釣られ、一時の輝きを取り戻す。

一瞬前とは違いすぎる態度に、フォルは静かに笑みをかみ殺していた。





? - 15 王都へ 5 (後書き)

お気に入り登録ありがとうございました。  
これからもよろしくお願ひします。

かりんとう

《あと少し。あと少しの辛抱……。》

先が見えない暗闇の行軍よりも、終わりが見える今の方が遙かに元気になったようだ。

もちろん思い込みで、なれない運動に身体はそろそろ白旗を掲げそうで、それを無理に気力で動かしているといっても過言ではないだろう。

報告のなかの『2ユール』がどれくらいなのかは分からない。説明されても理解し切れなかっただろうし、聞くだけの余裕もなかった。

それでも、あと少し……という言葉信じて前を向く。

足元は小石が混ざり始め、泥の中を歩くよりかは足が進めやすくなってきた。

ついさつき、靴底を水溜りで洗った。

どうせ汚れるのに……と思ったが隣から少しでも足跡を消すために必要なことだといわれ、靴なのか泥なのか判断しづらかった足元は、一応それと分かるまでになっていた。

ただ、中まで水浸しのそれは、足が守られるという利点以外は気持ちが悪いただけのもので。

「ビニール製の長靴ながぐつが恋しい・・・」

ついでに合羽や傘も。

できたら車も・・・。

文明の中で生き、特に登山やアウトドアの趣味は皆無だった。

覚えている限りここまでびしょ濡れになったのは小学生以来だと思  
う。

あのころは、雨に濡れることが楽しかった。

怒られるのを承知で、雨の日は溝の中に進んで入っていった。

お世辞にも、女の子らしい子供ではなく、腕白小僧と評されるのが  
合うような子供ガキだった。

自然が大好きで、毎日の些細なことが楽しくて、輝いて見えていた。

・・・年月というのは残酷だ。

良くも悪くも人を変える。

「・・・」

べしよ。

「・・・えっ・・・と。セディオオン?!大丈夫?」

ただ機械的に踏み出していた足が何かにぶつかったと思ったら、前を歩いていたはずのセディオオンの背中だった。

膝を着いていた彼に気づかず、体当たりし、背中に乗り上げてしまっていたらしい。

すぐに身を起こし、隣へしゃがむ。

前を歩く集団は停まらず、今もなお進んでいる。

覗き込んだ顔はどこか遠くを見ていて、こちらの声を聞いているのかいないのか。

「セディオオン?」

「先程から動物の影が少しですが隊を追い越すように過ぎていきます。見た限りですが、中にはあまり走らない物までいるようです」

前後の脈絡の無い言葉。

動物が走っている・・・それが何なのだろう。

夜なのに頑張ってるな?というか、こんなに真っ暗なのに良く見えるな・・・。

「ガース、聞いたな。殿下に報告し、指示を仰いで来い」

フォルが厳しい表情を浮かべ指示を出す。

言われた青年は、一礼し走り先頭へ向かっていく。

「思ったよりも早かったな。向こうも無能ばかりでないということか……」

エミ、急いで先頭に追いつく必要ができた。走れるな」

動物と、走るほど急がなければいけないことが繋がらない。

森の中だから、小動物くらいいるだろうし、何かあれば走りもするだろう。

疑問はいっぱい。

走れるか……といわれれば、どちらかと云えば、もう疲労困憊ひんがうこんぱいで無理だと言いたい。

言いたいけれど、言えるはずも無い。

濡れた靴に包まれた足先は悴かじかみ、慣れない行軍に感覚も遠くなくなって  
いる。

一つ息を吐き、ゆっくりと屈伸をする。

腰をあげるのも辛い。

このまま座り込んでしまいたい。

そう考えたのは一瞬の間で、

「大丈夫です。頑張ります」

出来る限り、大丈夫なように、心配されないように眼に力を込めてうなづきを返した。

疑問はたくさん。不安なんか数え切れないほど。その全てを胸の中に詰め込んで、足を踏み出す。

「エミ、頑張りましょうね」

自分もきついだろうに、こちらを振り返り振り返り励ましてくれる彼に弱音は吐けない。

「ありがとう。大丈夫だよ。セディオンこそきつかったら言ってね」

剣帯や荷物を背負う彼らに比べて、持っているのはわずかな荷物と医療具のみ。

それでも肩に響いてきたが、どうしようもない。

出来る限りの笑顔（強張っていたが）を作ってみせる。

暗闇の奥では変わらず動物たちが走り去って行っている。

足が纏れそうになりつつも先頭が見えてきたとき、すでに全員が揃っていた。

わずかな灯りに照らされ、騎士たちの真剣な顔が見える。

整わない息を潜め、会話に聞き耳をたてる。

隣にはセディオンがいて、フォルはもう中心へ近づいていた。今なら聞けるだろうか。

「セディオン、さっきのはどういう意味？」

「動物の行動ですか？」

「そう。良かったら教えて欲しくて」

「あれは……動物は夜行性のものも多いですが、獰猛なもの以外は基本的に夜は身を潜め眠っているものなんです。たまたま起きていたのだとしても、人には近づきません。肉食の猛獣でさえこの人数の集団を見れば、警戒して姿はおろか、気配すら隠すものなんですよ。それが今日は違う。夜にもかかわらず動物たちは移動し、こちらに姿まで悟られている。それも何かから逃げるように。つまり……」

「……つまり、人に姿を見せることを考えられないほど、逃げ

なきやいけないものが後ろから迫っているということ?」

それは、普段なら近寄らないほどに警戒しているものが気にならないほど、後ろから危険が迫っているということだ・・・この雨の中、山火事は考えにくい。

全ての動物たちが逃げるほどの動物は自然界にはいないだろう。この世界のことの方が分かるわけではない。

だが、今まで見た限りでは地球とそう変わらない植物ばかりで。

もし、予想が正しければ迫り来る危険とは人間のはず。

それも少ない人数が、荒々しく行動している。

真夜中に、開けていない森の中、まとまった人数で、こちらに向かっている。

分かれた味方で無いなら・・・

・・・それは

「・・・敵?」

後ろを振り返っても、何も見えはしない。

変わらない闇があるだけだ。

だが今通ってきた道が、見通せない暗闇が、急に恐ろしいもの変わってしまったかのように感じ、本人も気づかないくらい少しずつ、



身体は隊へ近づいていた。

「多分・・・いや、そうだと思います」

互いに表情は硬く、視線は自然と中心から出てくる人に向けられた。

「報告」

8月14日から、平凡な日々の小話ともいえない短い文を載せはじめました。

続くかどうかは疑問ですが、お時間があれば、よろしくお願いします。

かりんとう

殿下の足取りは確かで、手足の先にまで力が、気迫が見えるようだった。

暗闇の中でわずかな灯りに照らされた金色の髪は、深みのある琥珀の様。

その足元はここにいる全員と同じように泥に汚れ、全身は雨に濡れそぼっている。

なのに、それでもどこか気品漂う佇まいは、自分と同じ人などではなく、違う生き物のようだ。

人の上に立つひと。

人を纏め、導くひと。

全員の眼が自身に向けられているのを確認すると一呼吸置いて、低いテノールを紡ぎだす。

「これより、進んだ地点で、敵を迎え撃つことになった。出来る事ならこのような事態は避けたかったし、皆も疲労が溜まっていると思う。だが、敵は思いのほか行動が早く、この先逃げ切れとは思えない。背中を討たれるよりも、作戦を練り、待ち伏せするほうを選ぼうと思う」

《また戦うんだ……。》

戦場で見た光景が蘇る。

二度とみたくない世界。人と人が殺し合い、希望の無い世界。あの時は、何も知らない人たちだった。

言葉を交わしたことも無い、通りすがりの遺体<sup>ひとびと</sup>。

だが今度は違う。

この五日間を一緒に過ごし、言葉を交わした騎士たち。慣れない作業に手を差し伸べて、親切にしてくれた。

この世界での唯一の知り合い。

唯一の心の拠り所。

唯一の安全。

それが失われるかもしれない。

誰かが傷つくのかもしれない。

また独りになるのかもしれない……。

怖い。

血や、怪我には多少慣れていても、直接的な暴力には全くかわりが無かった。

人が人を傷つけるところは見たくない。

奇麗事かもしれない。

逃げなのかも知れない。

それでも、自分の知っている人たちに傷ついて欲しくなかった。

だが、そんな、戦争を知らない国で育った自分の考えは甘いのだろう。

この世界の情勢も何も知らない。

この国の人たちだって、好きで戦うわけではないと思う。

ならばこれは避けられないことなのだ。

「作戦の詳細はディーンが告げる。皆……」

だけど……。

この先を聞きたくない。

「生きて帰るぞ。独りの欠落者も許さない。その覚悟で臨め。お前たちにはそれが出来ると信じている。私が勝利の報告をし、諸君らの家族に頭を下げさせなどしないとな」

口の端をわずかに吊り上げ、不敵に笑う。

殿下のみんなを見渡す瞳には力があつた。

暗く、死を覚悟したものではなく、生きるために戦う覚悟をした力  
が。

辛い言葉を、命令を聞くのだと思い込んでいた私にとって予想外の  
言葉。

このときその場にいる全員の気持ちが一つに向かっていただろう。

これから起きることは、戦いだ。

決して安全ではないし、命の保証も無い。

誰もが万が一の事を覚悟していたと思う。

だが殿下はその覚悟を許さないと言った。

みんなが生きて帰るのだと、死は名誉なことではない・・・と。

それがどれほどすごい言葉なのか、このときの私は全く理解してはいなかった。

ただこの殺伐とした緊張感あふれる場で、死が身近になってしまっているところで、上に立つものが死を否定してくれることに私はわずかな光を見たように感じた。

日本では戦時中、『お国のために死んでいくこと』が名誉とされるような風潮があったという。

死にたいと本当に望んで戦いに赴いた兵などいなかったらう。

国は敗戦間近の崖っぷちで切羽詰り、まだ歳若い少年とも言える子達に、特攻隊という確実に死に行く仕事を与えた。

周囲の全てが死へ向かわせていた。

生きたいと、逃げる事が許されないほどに。

それは、どれほどの異様な空気だろうか。

平時では決して無いだろう異常な状況下で、全ての人が感情を狂わせる。

お上の言うことは絶対で、誰も否定が出来なかった。

それが戦争。

小さなころからずっと叩き込まれてきた悲惨な記憶に、戦争とはそういうものだと思っていた。

そして隊に合流させてもらってからずっと、規律の整ったところを見てきた。

上の者（殿下）を絶対とする騎士たちを目の当たりにしてきた。

だから、初めに見た環境（戦場）を心に、感情に刻まれた日本の古いにしえと混合していたのに……。

この人に着いて行こうと思った。

今、出来ることは少ないかもしれない。

だが精一杯の出来ることをしたかった。

この人の力になりたいと思わせる・・・それだけのものを目の前の人から感じたから。

ディーンにより次々と詳細な作戦が告げられていく。

背後から迫る者に対して感じる恐怖は変わらない。

けれどそれは先程と違い、立ち向かう意志を伴ったものだった。

息を潜める。

隣にはまだセディオンが居て、独りではない。

雨脚はどんどん強くなり、今は周囲の景色が見えないほど。

登ってきた岩の間は滝のようになっていて、もう一人では越えられないだろう。

土は雨に削られ、茶色の奔流となって下へと流れていつている。

視認できないが、至る場所に騎士たちが身を潜めている。

冷えた身体に剣を抱き、

ただひたすらにその時を待ちわびて……。



? - 15 王都へ 7 (後書き)

戦いの時は近い・・・。

? - 16 激突 (前書き)

少し血生臭い表現があります。

「・・・来た」

「え・・・？」

灯りも無い闇の中

おもむろに懐から取り出した棒のようなもので、剣の鞘を叩く。  
辺りに鈍い金属音が響き渡った。

見上げた表情は硬く、視線は岩の向こう側、未だ見えない敵を見ている。

「エミ、これから戦いになります。危険ですから、ここから決して動かないでください。もうすぐ俺も出て行くことになる」

「でも、セディオンは怪我が・・・」

先程、薬を飲ませ、包帯も換えた。

だが、怪我を負う身でこれまでの行軍。十分に戦えるとは思えない。  
相手が万全であれば、むしろ怪我を、最悪の事態も考えられる。

「大丈夫です・・・とは確約できないけれど、俺も騎士です。信じてもらえませんか？それに俺よりも、戦術すべの無いあなたのほうが危険です。他人の心配よりも自分の心配をして、ここから動かないで下さいね。これだけの繁みの中なら見つかりにくい筈。動いたり、何かをしようとしなくてここに居て下さい。終わったら迎えに来ますから」

言い方は易しいが、その雰囲気は反論を許さない。

心配だし、怖い。

何も知らない世界の暗闇の中、セディオンが傍にいてくれればどんなに心強いだろう。

だが自分の我侷で引き止められないし、引き止めたとしても彼は領かない事は容易に分かる。

読んでいた小説の中では、よく主人公が無茶なことをしでかす。その多くは結果的に上手く行ったり、誰かが絶妙なタイミングで助けに入ったりする。

自分も目の前で何かあれば動いてしまいかもしれない。声を上げてしまいかもしれない。

だが、それが上手く行くなんで誰が保証してくれると言うのだろうか。誰かが助けに来てくれると樂觀できるほど、今までに見た光景は優しいものではなかったし、むしろ自分が余計なことをしたせいで誰かが迷惑を被る確立のほうが遥かに高い。迷惑くらいならまだいい。

だがそれが元で怪我をしてしまったら？  
死んでしまったら？

取り返しも付かないし、償えもしない。  
自分のせいで誰かが傷つくのが怖い。この状況も怖いけれど、それよりもずっと。

それならば動かないほうがいい。  
じっと息を殺して、待っているほうがいい。  
待つ恐怖や雨の冷たさくらい耐えてみせる。

「分かった。ここで待ってる。声も上げないし、ここにある木々の一部のようになってみせる」

「木々のように・・・」

微妙な顔をされた。

まあ、「冗談というか、それくらいの意気込みを持って臨むのだと思っ  
つて。」

だんだんと、エミの耳にも森の中に似つかわしくない音が聞こえてくる。

枝を踏みしめる音、剣と剣がぶつかるような金属音。  
そして、人間のうめき声。

「だから、必ず迎えに来て。あなたが来て」

誰も怪我をしないで。  
無事な姿を見せて。

戦いの音はもうすぐそこだ。

この繁みを抜けた場所、少し低い位置にある開けた所で誰かが戦っている。

あの戦場が甦る。

倒れ臥す物言わぬ人々。

朱に染まる世界が。

腰の剣帯から剣を引き抜き、柄を握る手。

外套も何もかも濡れそぼち、前髪から雫が伝う。

セディオンは頷くと、その背を翻し、木々を掻き分けていった。

まだ、他の騎士に比べると幾分細く、華奢な身体。

いくら大人びていても、いくらこの世界では成人しているのだと分かかっていても、日本ではまだ庇護の必要な子供の年齢だ。

幾日か過ぎ、人を思いやれる優しい子だと知った。

幸せになる権利があるはずだ。こんなところで命をおとしまっていないはずが無い。

絶叫が聴こえた。

命を削りあう音に、耳を塞ぎたい。

頭を過る最悪な光景が見たくなくて眼を覆ってしまいたい。

けれど今居る場所から眼を逸らさないことが、その上で無事を祈ることが、唯一自分に出来ることだから、両手を組み只管ひたすらに願った。

誰も怪我をしないなんてありえない。

だけど、誰一人として命を落とさずに返ってきて欲しい。

自分の知っている限りの神様の名前と、この世界の何かに向かって待っている間中祈りを捧げよう。

悲鳴やうめき声、人の倒れる音が行きかう中、徐々にその数は減っていく。

倒れたのはどちらなのか。

誰が倒れたのか。

何も分からないままただ祈り、ただ身を潜める。

それはとてつもない不安との戦いで。

とても長いような短いような時間。

雨と緊張で指先は悴<sup>かじか</sup>み、歯の根が音を立てそうになる。

自分の震える音が辺りに大きく聞こえそう、唇を噛み身体を小さく抱えてそれを制する。

《セディオンは来るって行った。殿下がみんなで王都へ帰るって行っていた。だから大丈夫。必ず誰かが呼びに来てくれる》

ガキッ

戦いから離れた位置の繁みに身を潜めどれくらい経つだろう……。

鋭い金属音と同じくして耳と右頬が一瞬熱くなった。  
頬を生温い雫が伝い、襟元を赤く染めていく。

手で触ると痛みが走り、指先を見れば血に染まっていた。

《斬られた・・・？》

確かめようと背後を振り返るよりも早く

「ちいっ」

舌打ちと共に見知らぬ男が向かってくる。

《逃げたほうが・・・それともじっとしていたほうがいいの！？》

迷う間にも男の影は近づき、繁みを抜けた瞬間視線が交差して。

一瞬の交じり合い。

頭に布を巻き、顎鬚を蓄えた浅黒い顔に驚きと戸惑いが浮かび・・・  
何か言おうとしたそれは永遠に叶うこととは無かった。

視界一面が鮮血に覆われ、すぐさま真紅のシャワーが我が身に降り注ぐ。

暗闇で、血の色が鮮やかに見えるわけが無い。

だが命の源であるその赤は、なぜか眼にも鮮やかに見え・・・。

まるでスローモーションのように、主を失った体が倒れてくる。



抱えた膝に重みを感じたとき、少し離れたところで、ボールが落ちたような音がした。

雨と泥に汚れ、何が起こったのか判らなかつただろうその瞳は、

驚愕に見開かれ、閉じることは無かつた。

? - 16

激突

2 (前書き)

引き続き、少し血生臭い表現があります。

降りしきる雨の中、そこだけ赤い雨が降る。

冷たい身体に不釣り合いなほど、生温かい雨が。

頸動脈から噴出する血液も、徐々にその勢いを失い、膝の上のものは徐々に冷たくなっていく。

浅黒かったはずの皮膚も白くなり、人から人だったものへと変わった。

一瞬前、確かに眼が合ったのに、今は眼どころか赤黒い肉と骨の断面が見えるだけだ。

頭部は離れたところに泥まみれで転がっている。

ここまで走ってきたはずの足は、もう二度と動くことは無い。

手のひらをみて、膝を見て、

現実を見る。

「~~~~~」

《何？何なの？！イヤ・・・イヤだ・・・！！》

全てがわずか数瞬の間の出来事。

その一瞬が生と死を分けた。

\*\*\*\*\*

怒号や剣戟が飛び交うなか、そこには性別も、立場も、貴賤きせんさえも関係なかった。

ひたすらに、立ち向かってくる敵をかわし、斬って捨てる。

激しい雨に抜かるんだ泥、長い行軍のための疲労という、戦いのコンディションとしては最悪な状況。

敵に勝っているものは、譲れない『帰る』という意味と、待ち伏せた分の地の利のみ。

人数は相手が勝り、体力、備えにしても、万全の備えでここに望んでいる事がわかる。

長引けば長引くほど、自軍のほうを押されるだろう。

絶対に負けられない。

王家に生を受けて23年。

生まれたそのときから、民を守り、導くものとしての教育を受けてきた。

ここで散らして良いほどの、安い命ではない。

ここで捨てられるほど、負う責は軽くない。

「ぐっ・・・」

受ける剣の重みに思わず、呻きがもれる。

敵は報告どおり、山賊を装った粗野な外観のがっちりした男達だった。

当初の計画では待ち伏せ奇襲をかけることで、多少の人数の不利を補う、いや補えると思っていた。

実際に眼にしたのは予想よりも多い人数で・・・もちろん普段の万全な態勢であれば問題にならなかつただろう。それくらいの精鋭をつれているつもりだし、実力も伴っていると自負している。

日々、辛い訓練に耐え、己を、隊を磨き上げることに苦心してきたのだ。

剣の技では負けるつもりは無い。

だが、状況と対格差はいかんともしがたい。

食いしばったその顔が見えたわけではないだろうが、我が身の有利を悟った男はにやりと口角を吊り上げ、更なる攻勢に及ぶ。

この場にいる全員が剣戟を交わしていて、自分以外の助けに入る余裕は無い。

さすがにディーンやフォルなどは若干の余裕と、その優勢が感じられるが、その分多くを相手どっており、敵味方入り乱れた状態で離れた位置の攻防に手を伸ばすには至らない。

力押しで振りかざすそれは正面から受け止めるにも限界がある。

現に、彼の両手はだんだんと痺れを感じるようになってきていた。

長くは持たない。

「つつ・・・！」

そのとき彼の右が泥に足をとられ、重心を失い・・・。

己の利を確信した髭の男はさらに一步踏み込み、全体重を次の手に踊りかかってくる。

その剣が相手の血飛沫で濡れそぼつ瞬間を確信して。

《・・・これ待っていた》

「?!」

目の前から相手が消え、しまったと気づいた時にはもう遅い。

力で駄目なら、策を練るのみ。

泥に足を捕られたと見せ、片手を軸に、剣で相手の剛剣を跳ね返す。

自身を過信し、その全力を両手にこめた結果、重心が前へ傾き、開



いた懐にもぐりこまれても、見事な巨体は簡単には立て直せない。とっさに剣の軌道を変え、その反動で身をよじり、最悪の事態を免れたことは、男もそれなりの使い手だったといえよう。だがその分無理をし、横になった剣に下から強く衝撃を加えられることまでは避けられなかった。

一点に衝撃を集中させることで、攻撃力を何倍にも変え、本来なら強いはずの剣が折れる。

折れた剣先は甲高い音を上げ、繁みのほうへ飛んで・・・

「ちいっ」

形勢逆転。己の不利を悟った男の行動は早かった。

素早く身を翻し、先にある深い繁みへと逃げ込む。

しかし、それをやすやすと見逃す訳が無い。

力を振り絞り、渾身の一撃でその首を一閃した。

いたずらに苦しめないために、しくじって味方の負担にならないように。

視界の端に、フォルが敵のひとりを後ろでに捕縛するのが見えたから、捕虜は多くなくて良い。

平時ならともかく、今のこの状態で多くを捕らえることは返って不

安のほうが大きくなるから。

雨脚が少し弱まったのか、胴から離れ落ちていく頭と、断面から血が噴水上に吹き上がった。

頭を失った身体が、その首を恋い慕うように、ゆっくりとくず折れていく。

だが、いつまでたっても巨体が地面に跳ねる音が聞こえない。

怪訝に思い、繁みを掻き分けた直後、

「~~~~~つ!!」

小さな物音と共に声にならない声を耳にし、斬る直前、男がなぜか一瞬止まったように見えた身体の、そのわけを理解した。

その姿を見た時、  
一番に感じたのは、心配でも、苛立ちでも、非難させなければとい  
う使命感でも無い。

首の無い死体から逃げるように後ず去った跡。

雨に濡れたその上から、返り血を浴び、赤くないところを探すほう  
が難しい。

全身小刻みに震えて、歯の根が鳴っているのに、眼だけが見開かれ  
ている。

近づく彼にも気づいてはいないだろう。  
何も見えていないのかもしれない。

つい、何時間か前に見た穏やかに眠る姿とあまりにもかけ離れたそ  
の姿に。

ただ  
切なくなつた。

誰も知るものがない場所で、何の因果か、彼女の置かれる状況は

辛いばかりで。

それでも、今生きているということは運が良いというのだろうか……。

神に守られていると言えるのだろうか。

頭を振り、余計な考えを捨てる。

ひとまず、今はこの場から彼女を離す事が先決だ。

「分かるか？エミ。ここから離れるぞ」

目の前に立ち声をかけても、少し揺さぶった程度では心はこちらに戻ってこない。

《女性に手を上げたくは無かったが……》

そうも言っではいられない。

バシッ

平手でも衝撃は充分だったか、やっと眼の焦点が合い彼を認識する。それを確認すると、短く離れることを告げ、承諾を得ないまま手を引き洞窟に向かって走り出す。

本来の休息予定地である息のつける場所へ。

・  
・  
・  
背後では、戦いが徐々に収束へと向っていた。

? - 16 激突 2 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。  
これからもよろしく願います。

? - 16 激突 3 (前書き)

視点がころころ変わります

眼下に見える戦いは収束を迎えていた。

立っているもの、座り込んでいるもの様々だが一様に同様の外套を羽織っている。

外套は雨にぬれ、泥に塗れ、返り血でところどころが汚れており、戦いの凄まじさを想像させる。

それは目の前の騎士にも当てはまることで。

「殿下。捕虜3名、死者14名、10名ほどは逃げ延びた様です」

あの人数を相手にして、それは十分な成果だったとも言えるし、取り逃がした10名が気になるところでもある。

洞窟の入り口に腰掛け、デインから報告を聴いていたが、今はそれよりも味方の方が優先だろう。

「味方に負傷者は」

「何名かが重症を。ですが動けないほどの怪我ではなく死者はいま



せん」

眼下ではしゃがみ込んでいた者も徐々に立ち上がり、冷たくなってきた死体を少し離れた繁みの中へ運び込んでいる。その先ではすでに煙が上がってきており、蛋白質独特の焼ける臭いが漂い、燃えているものが何かを知ることが出来る。

周囲では獣よけの効果のある草も燃やされ始めていた。森の中、雨も勢いを失い、止んで来ている。

辺りには雨に流されたものの血の臭いが漂い、死体をそのままにしておけば野生の獣たちが集まってくることは容易に予測できた。獣に囲まれることは危険が及ぶ可能性が高くなることを示しており、それを考えれば早期に原因を排除してしまうのは当たり前といえた。

「そうか……。皆ご苦労だった。捕虜を連れ、ここへ。今夜はそのまま休むとしよう。尋問は明日疲れを落としてからだな」

「彼女は……」

デインは戦いが終わったところ、先んじて繁みへ飛び込んだセデオンが狂ったように名前を呼び、探していたのを聞いている。フォルから報告を受けたが、その場に殿下の姿が見えないことから大丈夫だろうと判断していた。

戦いの中、視界の端で殿下が敵の首を一閃していたのを確かに見たのだ。

無事なはずの殿下が消え、彼女もいないとなれば、殿下が連れているに違いないと確信し、フォルにはその旨を告げていた。

「エミか。奥で休ませている」

洞窟の奥は暗く、入り口からではその様子はいかがい知ることはいかない。

「セディオオンが非難させていたと聞きましたが、殿下が連れているということは何かありましたか」

「運悪く、逃げようとした賊の進路に隠れていたようだ。首を刎ねた血をまともに浴び、呆然自失していた。ここまで連れてきたは良いが、限界だろうと思って当身で眠らせている」

「……これはそのときの？」

よく見れば殿下の足元に血で染まった衣類が丸まっている。全体が赤黒く染まり、血独特の滑りを纏っていて、元の色や風体は検討も付かない。

「ああ、もう服の役割など果たしそうも無かったしな。下着を残して斬って捨て、荷の中にあつた適当なのをかけている」

戦いに望む前、持っていた荷を全てこの洞窟の奥に集めていた。

今、その静寂と束の間の平穩に満たされた場所で、手足を丸め布に包まってエミは気を失っている。

確かに殿下が衣服を変えてくれたおかげで、布に汚れは見当たらない。

しかし、髪や衣服から出た手足に浴びた血潮は凝り固まり、すでに異臭を放ち始めている。

そのためか眠る眉間にはわずかに皺が生まれ、口から漏れる息は苦しそうだ。

入り口の二人はそれに気づかない。

「デイン、殿下もご無事で。あの子はどうですか」

ゆっくりと向ってきたラウルも、その優男風の身体に見合わず剣が使えるのか、細かな傷を負ってはいても目立つ重症は無い。

その後ろから、騎士たちが洞窟へ徐々に向って来ていた。

「今、デインに話したところだ。奥で眠っている」

顎をしゃくり、奥を示す。

それに頷きだけの返答を返し、少し気だるそうに隊の中でただ一人の医者は奥へ進んでいった。

洞窟の中は雨のせい、湿りを帯び、ところどころで水が染み出していた。

松明に照らされ、暗かった内部がぼんやりと全容を現す。

奥まで進むと荷が散乱し、その横に、こんもりとした人の形がある。灯を固定し、かけてあった布を捲ると、暗闇では分からなかった凄まじい様相が浮かんだ。

殿下が言ったとおり、身体にかけてある布が白いだけに、その顔や手の赤が目立つ。

荷の中から医療具と包帯に使おうと思っていた布を探し、もう一度眠っている顔を見て・・・溜息が出た。

治療しようにも、何処もかしこも血だらけのうえ、乾いてきて簡単には取れないと言ったたちの悪さ。

これでは一度水を汲んできて濡らした布でふき取らないとどうしようもない。

《一度起こすべきか・・・》

少し、忍びない感じもするがそれが一番手っ取り早い。

そう決心し、その身体に手を伸ばしたとき、背後から近づいてくる足音が聞こえてきた。

「ラウル様、フォル及びセディオンです。そちらへ行ってもよろしいですか」

この声はフォルだろう。

彼の騎士は長年の付き合いだというのに、ラウルが上級貴族の出というだけで、様付けや一歩引いた態度を決して崩そうとしない。

「どつぞ」

布を肩まで掛け、素肌を隠してやる。

近づいた二人はその顔を歪め、痛ましそうな表情を浮かべた。セディオンは横にしゃがみ込み血に染まる頬にふれ、髪をかきあげる。

「怪我は・・・？」

「一見酷いがな・・・ほとんどが返り血のようだ。まあ、実際は落としてみないと分からないが」

「返り血？」

「殿下が追う敵の進路に偶然隠れていたらしい。首を飛ばしたまさに真下にな」

「首から噴出する血をまともに浴びたという訳ですね」

「そつらしい」

ラウールの視線は、眠る傍らに膝を着く歳若い騎士にあった。自身の方が傷ついたような顔をして、両手を膝の上で握り締めている。

「俺があんなところに隠れさせなければ」

そついう彼も、闘いの中必死だったはずだ。現にとりどころ切り傷があり、血に汚れているし何より濡れそぼち、冷えた身体は疲れが溜まっているはず。

ただ彼女にその場に隠れるように言った・・・たまたまセディオンが居合わせたのが本来誰が言っても仕方なかった。責任など感じる必要は無い。

パツと見ただけだが、命にかかわる怪我でもなし、精神のほうはどうだか分からないが、目覚めない限り判断できないことであって、今どうこう言っても仕方が無いことだから。

「考えても仕方の無いことだ。あの場合、何処に隠れても危険はあった」

何の変哲も無い言葉。

目の前の彼には伝わっていないだろう。

責任感が強いたちなのか、それとも他に何かあるのか。

《責任を感じるのは自由だが、それで潰れてもらっては困るな・・・

》

正直、ラウルには目の前で苦しむ会ってたった5日の女性よりも  
今後に期待を掛ける騎士のほうが大事だ。

《何かやらせていたほうが罪悪感が薄れるかもしれないな》

フォルに視線をやる。彼も同じことを思っていたのだろう。

「セディオン、エミのために水を汲んできてくれないか。こんなに  
汚れていては寝ていても気持ちが悪いだろうから」

洞窟内にはほぼ全員の騎士が戻ってきている。

その波に逆らって、大きな袋を抱えた若い騎士が走っていく。

あの様子ではそう時間がかけずに戻ってくるに違いない。

残った二人は少し苦笑し、その後の準備を進めた。

? - 16 激突 3 (後書き)

なかなか作中の時間が進みません。



? - 17

束の間の休息（前書き）

脳裏に浮かぶ残酷な瞬間。

始めてみる人が殺されるその時を

恐慌にとらわれていた私は良く覚えてはいない。

病院でたくさんの方の最後を見取ってきたけれど、

それとは全く違った人生の終焉。

やらなければこちらがやられる。

そこには殺意も憎しみもなく、ただ生きようとした結果があったただ  
けで

だれも責められるものではない

少なくとも、何も知らないただの足手まといの自分に言えることなど無い。

だから平気な振りをする。

忘れた振りをする。

目の前のことだけを考えて、自分に求められた役割を演じる。

人一人、いやもつと数え切れないほどの命が、この短い期間で失われてきたのに

それが一緒にいた騎士でなくて良かったと、

自分でなくて良かったと、

心のどこかでおもっている私に

泣き喚く権利など無いのだから。

\*\*\*

「エミ。大丈夫ですか？」

濃厚な血生臭さが、やっと薄れてきた頃長く待たされることに心配になったのかセディオンの気遣う声が聞こえた。

洞窟の奥、いつの間にか横たわっていた私にラウルが渡してくれた布と石鹸を持って、セディオンが用意してくれた水で、今私は身体を清めている。

隊のみんなからは少しはなれた岩陰で凝り固まった血を少しずつ流していく。

その後に石鹸で洗いなおすと、水はあつという間に濁りを浮かべた。

「大丈夫。もうすぐ終わるから」

一人になるのは危険だと、護衛代わりにセディオンをつけられたが、身体を洗う間中近くにいられるのは少し恥ずかしいし、申し訳ない。洞窟では、何人かの騎士が火を熾し煮炊きを始めている。

食欲をそそられる臭いがさつきまでの殺伐とした空気を吹き飛ばす。

岩場の辺りは不思議な、蚊取り線香のような臭いと、何か焦げたような臭いが立ち込めていた。

雨は止んだらしい。

遠くに虫の音が聞こえる。

空を見上げると、あんなに酷く降っていた雨が嘘のように、雲の切れ間から星の輝く夜空が覗いていた。

月は随分大地に近い。

まだ空は少しも日の出の気配を感じさせないけれど、夜がその役目を終えるのもそう遠くないだろう。

袋の中の汚れた水を流し、身体を拭く。

血の臭いは消え、心は不思議なくらい凪いでいる。

「ごめんなさい。戻ろうか」

荷物を抱えた腕からすかさず重みが消え、先を進まれる。

本当にこちらの人はフェミニンが多い。

それともこの子が特にそういう風に育ったんだらうか。

10も歳が離れると、気分はもう姉を通り越して母親だ。

迷惑かもしれないが、ほほえましく見えてしまうし、少しのことが心配になる。

まあ、最初の出会いが出会いだったからそう感じるのかもしれない。

今は軽い麻のような服一枚の背中を見ながらそう思う。

お尻の半ばまであるシャツに、腰を紐で締めた柔らかそうなズボン。この世界の人がそんなのか、この国の人の特徴なのか、それとも騎士になる条件に身長があるのだらうか、皆一様に背が高い。

そして、腰の位置が日本人には絶対に無い高さ。

「ああ、綺麗になりましたね。じゃあ傷の具合でも見ましょうか」

洞窟入り口ではラウルがスープの入った椀を持って待っていた。暖かい湯気と、優しい香り。

「どこか痛むところがありますか」

優しい気遣い。

「頬と右耳が少し切れたただけなので手当してもらおうほどじゃないです。もう血も止まっています」

頬にかかる髪を耳に掛け、傷口を診せる。

傷はまだぴりぴりと痛んだけれど、これが何だというのだらう。

みんなの傷に比べればただのかすり傷。

「そのようですね。ですが仮にも女性が顔に傷を残すのはいただけません。軟膏を渡しておきますので一日に2・3回塗ってください」  
そういうとラウルは軟膏と、その手に持っていた椀をくれた。

セディオンも、周囲のどの騎士も、顔に腹を満たす喜びが浮かんでいる。

体力が要求される行程において、食べることも重要な仕事の一つ。  
手の中の暖かな椀に口をつけ、一口、二口。

《お腹、空いてないんだろうか・・・》

湯気の出る鶏肉のスープは本当に美味しそうなのに、半分ほど口に入れるのが精一杯だった。

食料が貴重なことは分かっている。  
けどそれ以上飲み込むことが出来ない

《環境によるストレスかな》

昔からストレスが胃腸に反映される性質<sup>たち</sup>だった。

これまでを考えればしょうがないのかもしれない。

胃が締め付けられ、口の中が苦くなってくる。

メインだろどっしりと浮かぶ肉は結局諦めた。

こっそり廁を済ます振りをして、そつと土に埋めた。

残した罪悪感と、役に立たなければという気持ちから片づけを手伝い、出立までの短い休息を迎える。

ただ一人女性だからという理由で一番奥を譲られ、『ゆっくり休んでください』なんて言葉をもらおう。

何の役にも立たないのだから、みんなと同じで良いのに。むしろ、みんなのために何かが出来たら良いのだが、所詮文明に慣れきった現代日本人にできることは無かった。

真つ暗闇の中、眠る人の息遣いと愛嬌だといえるほどの鼾と寝言を聞きながら入り口近くのほんのり見える明かりを見つめる。

両手と顔に感じる暖かなぬめりと、鼻に付く鉄さびの臭い手が、歯の根が震えるのはきつと勘違いだ。

だってあんなに綺麗に磨いた。  
寒くないように掛け布ももらった。  
外は虫が鳴くほど温かいはずで。

気が付かないうちに何度も両手を布に擦りつけ、身体を抱きしめるように抱える。

眼を瞑ったまぶたの裏に、あの赤が蘇るようで……。  
もう一度洞窟の中を見渡す。

周囲は真つ暗、寝息も聞こえる。みんな生きている。

だから大丈夫。



一番身近な温かいものに身を寄せ、もう一度眼を閉じる。

確かな鼓動。

生きている証。

その日、必要な眠りは長いこと彼女の元を訪れず、ようやく睡魔に身を委ねることが出来たのは、空が徐々に明るくなってきだした頃だった。

カナルディオンの国民、騎士に限らずこの世界の人は一様に背が高いです。

男性の平均が180〜185cm。

女性も平均で170cm以上あります。

エミの身長は160cmなのでここではとても小さいほうに入りますね。

確か眠った時にはそれは居なかったはずだ。

しかし、今その背には温かなぬくもりが張り付いている。

正確に言えば、しがみついていた。

限られた洞窟内では、王族だからといって、特別な寝床は用意できないし、望んでもいない。

だからわずかな見張りを除いた全員が同じように眠りに付いたのだ。ディーンやラウールの意見もあり、洞窟の一番奥近くに身体を横たえたが、彼女はもつと離れた場所にいたはず。

握り締めた手の中にはしわくちやになってしまった上着があり、頬が押し付けられている場所は湿った冷たさを訴えている。

昨夜は血みどろで異臭を放っていた身体はいま、石鹸の香りを纏い、何処にも戦いの名残は無い。

「よほど怖かったんですかね。泣いた痕がある」

不意にかけられた声のほうを見れば、一人の騎士がこちらを覗きこんでいた。

「おはようございます殿下。ラウル様から起こしに来るようになるといわれたんですが、大丈夫なようですね」

ひよろりと伸びた背をかがめ、引きつった傷に片目を半分閉じている男。

短く刈り込んだ灰色の髪に青灰色の瞳。日に焼けた肌。見るものが見れば、実用的な筋肉の付いた身体だと分かる。

「ガウエイン……。これはどう云うことだ？」

「そんなことを言われても。見たまんまなのでは？戦いに傷ついた女性が、寝ぼけて一番近くに居た殿下のぬくもりにすがりついた……。男冥利に尽きますねえ」

こちらの問いに小首をかしげ、ヘラツとした笑いを返してくる。答えにもなっていない答え。

まあ、もとより答えなど期待していなかったが。

「そのままことに及んでも俺は黙っていますよ。何なら協力しましょうか？」

「ふざけるな。ラウルにはすぐ行くと伝える」

尋ねた相手を間違えていた。

軽薄を現したようなしゃべり、普通の貴族・増して王族なら不敬だと怒りを露にする所だが、登用したのが自分であるだけにそれも言えない。

戦いの技それだけを見れば、あれほど使えるものも珍しいというのに。

戦うために生まれた者というのは、あの者のようなことを言うのだろう。と始めてみたときには思ったものだ。どんな逆境に落ちようが、半笑いを浮かべ、楽しそうに戦う男。

戦いの中にしか生きる意味を見出せない者。

「この嬢ちゃんですよ。昨日殿下が血の海に突き落とされたのは。泣きも叫びも、狂いもしなかつたって聞きましたよ。ふふっ、本当はどうか知らないが、この涙を見る限り相当な強がりってところですね」

すぐに去るかと思われた男は、何かに誘われるように背後に目を向け、興味があるというそぶりを隠そうともしない。

物の好き嫌いが激しく、己の興味があることにしか気持ちを裂かない男がだ。

「……何が言いたい」

「いえ。ただ面白そうだな・・と。初めは興味のかけらも無かったですかね。ただの悲劇の中でけなげさを演出する女狐かなあと思ってたんですが。なかなか違うらしい。女が一丁前に弱音も吐かず、素面じゃ涙も見せねえときた」

あまり集団行動にむかない性質と、自分が個人的に雇い入れたものであったから、男には隊から離れた役目を課していたのに、いったいいつそんな観察をしていたのか。

「泣き喚いたり、足手まといになるようなら、こっさり斬って始末しちまおうと思ってたんですが・・このまま生かしたほうが楽しそうですね」

後ろ手に庇い、捕食者の瞳から隠すように身をずらす。

警戒した眼に気づいたのがガウエインは、『冗談ですよ』と笑い、背を向けていった。

入り口から差し込んでくる日差しは、すでに夜が明け切り、昼近きことを知らせる。

意外なほど良く休めた。

まあ、今のやり取りで若干疲労した感じも否めないが。それでもとどめの戦いで疲れたせいか、若さ故か、しがみつかれた事に気づかないほどに休息をむさぼった身体は、体力の回復と、空腹を訴えていた。

\*\*\*

起きて見た景色は昨日の雨が嘘のように晴れ上がっていた。

セディオンによると、朝方にもう一度激しく降ったという雨が、戦いの名残を流し去っている。

辺りにはわずかにこげた臭いと、癖のある草の臭いが漂うくらいで、出来ることなら昨夜のことを夢だったということにして忘れたいくらい。

夢だとしたら、とても、とても怖い夢。

でも夢なら声に出せる。こんな変てこな夢をみたと、笑い飛ばせる。本当にそうならどれほど良かったか……

だが、あの赤は鮮明すぎて、安易に夢だと誤魔化し、忘れることなどできそうに無い。

一晩眠ったくらいでは、何も変わらないのだ。

細かな全てを記憶しているわけではない。

混乱していたし、衝撃を受けすぎていたから。

かといって、全てを覚えていないわけではない。

人の命が失われる瞬間。

元の世界に、日本に居たならば、決して見ることも無かったであろう瞬間を。

「セディオン、他の怪我した人たち呼んできてくれる？ラウルさんが他の事で手一杯みたいだから、私が診るからって言うって」

頭の中ではまだ混乱も、ショックも、ダメージさえ生々しく残っている。

しかし、表面上はそうと分からないほどに繕われており、医療用具片手にテキパキと動くさまは、急な旅立ちの前と変わっていないように見えた。



だが、セディオンにはそれが無理をしているように感じられたし、実際のところその通りで。

自分を救ってくれた女性ひとの力になる覚悟はあったが、本人はそれをさせてくれそうも無い。

何も無かった・・・そう本人が振舞うのに、弱音を吐いてくれと自分から言い出せるほど青年は場数を踏んでは居なかったし、その人のことを知っているわけでもなかった。

結局は、頷いてその言葉どおりに動くしかないのだ。

エミは青年の物言いたげな視線に気づいていた。

気づいていたが、あえて無視していた。

今は自分を支えるのに精一杯で、他人のことを気にかける余裕がない。

悪い言い方をすれば、ほおって置いて欲しかった。

青年が心配してくれているのは分かっていたが、自分より遙かに年下の子に頼るつもりは毛頭無かった。

実は逆で、もし相談したいことがあったのなら悪かったが・・・。

もう一晩だけ待ってね。そしたらもっと上手く振舞えるから。

まだ新しい心の中の出来事も、もう一度眠りという癒しがあれば、非日常という忙しさに流され、頭の片隅に押し込んでしまえるだろうから。

頬の傷も髪に隠れて見えない耳朶の傷も、今は乾いて血も滲まない。きつとこのまま時が過ぎれば、何事も無かったかのように消えてしまっただろう。

今、自分が辛いのは誰かのせいでもない、しいて言えば自分の弱さのせいで、周囲に気を使って欲しくなかったし、これ以上の足手まといにはなりたくも無く、またなる気も無かった。

これからも行軍は続く。

確かな一歩を踏み出すために、自分の弱さを露呈するわけには行かない。

そして、自分にはそれだけの強さがある。

このときの彼女はそう思っていた。

? - 17

束の間の休息

2 (後書き)

なかなか状況が進みませんが、説明文に主人公の生きる話と銘打つてますので、ご了承ください。

? - 18

束の間の休息

3 (前書き)

中盤から、少し残酷な表現が入ります。

この世界に来てから6日目。

どんどん軽くなる医療用バックを抱えて、各自の職務をこなす騎士達の間を巡る。

初めはセディオンに呼んで貰っていたが、一番役に立たない自分が行った方が早いだろうと思って荷をまとめて回診のような、出張診療をやっている次第だ。

何かとやることがある騎士達には、これが思いのほか好評だったが、陽が真上に来る頃には全員を廻った上、汚れた包帯などの洗濯も終わっていた。

セディオンも回診を شدした頃から、彼の持ち場に戻ってる。そういえば、いつ出発するのだろう・・・。

昨夜の戦いでの疲労があるかもしれないが、そもそも急ぐためにあんな夜中に野営地を出発したのに、いまだ動く気配が無い。それとももう危険は無くなったと言うことが。

誰かに聞いてみようかな

自分のすることが無いというのがどうも落ち着かない。

何も考える暇が無いくらい忙しいほうが、夜もきつとぐっすり眠れるし、朝が来るのも早いだろう。

そうして、あつという間に日々が過ぎ去れば昨夜の記憶も、同じように風化していく。

全員合わせても14人の隊は、今その周囲に9人しか見えない。

殿下、ラウル、デインともう一人は洞窟の中にこもっていて、なぜか中は立ち入り禁止。

フォルからは、人が出てくるまでは近づくこともいけないと注意されていた。

不思議に思ったけれど、どうして・・・と聞くことは躊躇われた。

何でも、なんでなんだろうということが子供みたいに感じたし、自分が聞いて良いことなのか分からなかったのもある。

そのときのフォルの雰囲気がエミが理由を知ることを拒んでいたように見えたのかもしれない。

実際、洞窟内では今捕虜の尋問中で、最悪拷問も辞さない。など、昨夜のエミの状況を知る者には告げにくい真相。

そもそも、女子供に知らせるような内容じゃないのだ。

尋問や拷問を喜ぶ人間などごく少数だろう。

騎士達だって本当は、何もなければしたくない、しなくて良いことで、それについては時代や、環境がそうさせるのかもしれない。

ヒトには生まれる時代や、状況は選べない。

後悔してるとか、後ろめたく思っている訳ではなく必要に駆られた結果だった。

先の戦いで目減りした医療品のこと、薬品のこと。

ラウルが目の前にいたら、医薬品の補充について話せただろう。

後になってしまっても、姿が見えたら相談しなければいけないと思

う。

エミー人では、薬草など分かるはずもない。

分かれれば暇な時間を見つけて、薬草集めに勤しみ、隊の役に立てた  
だろう。

ひとり手持ちぶさたで、気まずく思うことも無かった。

こんなことなら薬草少しでも勉強しておくんだっただな

いくら病院づとめだ、看護師だ、医療従事者だといっても、所詮薬剤師ではないし、アウトドアに精通していたわけでもないわけで。そもそも薬といった形で販売をされている日本で、薬草の知識に詳しいものなど早々いない。

まあ薬草に精通していたとしても、世界そのものが異なるところで、その知識が役立つたかどうかは疑問だが……。

荷物に近づけないため、荷の整理は出来ない。

手当てはもう全員にした。

洗濯も済んだ。

食料を探しに遠くへ行く……結果的に迷い、迷惑をかけそう。食事の準備を手伝う……さっき食べ終わったばかりだ。

考えれば考えるほど、立ち尽くしてしまふ。

世間話をしようと出来るほど、ほのぼのした状況じゃない。

恥を忍んで、誰かに尋ねよう。それが一番だよな。

何もできないよりも。

考えを改めたエミは、一番近くに居た騎士に狙いを定め、近づいていった。

\*\*\*

太陽が真上に昇ったせいで、入り口からの陽光が微かにしか届かない洞窟の奥は、昼間でも薄暗く、ひんやりとしている。そこに、姿の見えない4人はいた。

「全部話した！！開放してくれ！」



「おいおい、本当か？何にも知らずにただ頼まれただけだっ？」

そんな中でも、一人飄々とした態度で薄笑いを浮かべた騎士が、足元に転がった二人の男を足蹴にしながら話していた。

足元の二人は、全身が泥に塗れたかのように汚れており、両手両足がくぐられていた。

一人は暗い表情を浮かべ、顔には涙や鼻水の後が浮かんでいる。もう一人は少し苦悶表情だが前に立つ男を全身で警戒している。対照的な二人だ。

同じ山賊風の格好なのに、なぜか涙した男の靴は上等なもので二人のちくはぐさが際だっている。

「お前、まだ言ってるねえ事があるんじゃない？早く吐いちまえよ。義理立てするんなら馬鹿らしいぜ？お前はこんなに苦しんでいるのに、命令したやつは今頃悠々自適生活、こんな状況知りもしねえだろうなあ。お前がここで死んじまっても、痛くも痒くもないだろうなあ。吐かねえんなら、ここで朽ち果ててみるか？」

言葉と同時に男の靴の下にある指二本が、鈍い音を立てて、曲がった。

その上、無事だった残りの指にも攻撃の手が伸びる。

「ひいっ……！？」

「指一本ずつ逝ってみるか……眼でも良いぜ。耳にするか？舌が

無くても生きていけるらしいぜ」

どこか軽薄な口調と、話す内容の残酷さが相まって、なおさら恐怖をあおる。

しかも、表情は薄笑いなのに、眼は全く笑っていない。

それを向けられたなみだ目の男の表情は、引きつり蒼白になってきている。

混乱した頭で、敵のはずの周囲に、思わず助けを期待した視線を向けるが、もちろん誰一人として反応はしない。

この尋問が始まった当初から、しゃべっているのはこの男一人で、皆静観している。

目の前の男は、オカシイ。なみだ目の男の基準から言えば、狂っているといっても過言じゃない。

だが、それを平然と観察する周囲の騎士たちの態度が、この狂った男が何をしても動じない態度が、なみだ目の男の恐怖をなおさら煽り立てるのだ。

「脅しだっ。しゃべるな！」

同じように横に転がされている男が叫ぶ。

叫ぶが・・・男の右手の甲には剣が刺さり、男を蝶の見本のように地面に縫いとめていた。

額には痛みのためだろう脂汗が浮かんでいる。

だが、眼には力がある。諦めない、屈しないという力が。

それを横目で見たなみだ目の男は不思議でたまらなかった。

初めは隣の男が剣で刺された。しかし、何も話さなかったため、そ

の後はずっと己に攻撃が集中している。

あいつも痛いはずだ……だがそれは最初だけだ。後は全て自分が被害を被ってるじゃないか

現に自分の左の指5本全ての爪には拷問の後が刻まれている。

皮膚と爪の間に針を刺され、小指と薬指は折られている。

苦痛に慣らさないためか、少しずつ、もったいぶるように、絶え間なく新たな痛みが刻まれる。

それも自分だけに。

目の前の男が、これ以上をしないとこの保証はあるだろうか。これが脅しだと、口だけだと言う保証は。

目の前の男の言うことが段々正しいように思えてくる。自分だけがこんなに苦しくて、痛くて、理不尽な恐怖を味わっている。

あの方は、今も何も無かったように過ごされているというのに！！

「全てを話してしまえば楽になれる。俺は約束を守る男だ。けつして嘘は言わない。治療もしてやるし、飯だって与えてやるよ」

今まで静観していた男の一人、一番体格の良い男が耳元でささやく。低く絞った声で、ゆっくり言い聞かせるように紡がれた言葉は、酷く優しく聞こえる。

耳のほうへ振り向けば、誠実そうな表情があり、『俺がこいつを納得させる。手をださせはしない』と続けられた言葉に、救いの光を

見た気がした。

「わ、私は死にたくないっ！！助けてくれっ！！」

やっと現れた、たった一人の味方。

待ち望んでいた救いの手。

「全てを話すか？」

「話すっ。何でも洗いざらい喋るっ。助けてくれっ！！」

男は知らない。

全てが仕組まれていたことを。

捕虜となつて一晩放置されたのは、一度助かるかもと思わせることによつて、次に来る絶望をより深く感じてもらうため。放置された時間が長ければ、その間様々事を想像するだろう、助かることも、最悪の事態も……。

まず違う相手から痛めつけたのは、視覚による衝撃を期待して。

その後なみだ目の男だけを責めたのは……履いている靴のせいだった。

山賊荷に合わない高級な靴は、男の裕福さと、変装の詰め甘いところからは緊迫した状況になれない者、つまりは苦痛に慣れていないということを教えてくれる。

そして、裕福な苦痛に慣れていないものは、痛み、恐怖に総じて弱いものだ。

一番に戦いの場から逃げようとしたことでもそれは伺えるし、結果的にその通りだと証明された。

周囲を閉鎖的空間にしたことで逃げ場を無くし、縛り、転がすことで自信の不利を、立場の弱さを強く脳裏に刻ませる。

ガウエイン一人に尋問させ、ディーンが救いの手を伸ばす。

一度光を、逃げる道を見つけてしまえば、それに必ずすがりつく。

後は何もなくても自分から全てを話すのだ。

もう一人の男も、身動きが取れなければどうしようもない。

口だけでは、他人を実際の苦痛と恐怖からは救えない。

しかも、自身が縛られていては説得力などかけらも無いだろう。

こうして明らかになった情報は、必ずしも良いものではなかった。

隊は更なる帰還の遅れを迫られることになったし

大きな計画の変更に、方針はなかなか決まらず……。

結局、2人がデイーンの言ったように治療と、食事に取りつけたのは夜も深けた頃だった。

陽もとつくに落ちた頃、洞窟から4人の姿が見えた。

すでに夕食の準備は出来ていて、そのほとんどが配り終えている。

\*\*\*

あの後、エミは捕まえた騎士と薪を集めたり、夕食の元になる肉や野菜の準備をしていた。

自分に出来ることなら何でも手伝う気だったが、実際にウサギや鳥が、目の前で絞めて捌くさばのにはちよつと勇氣と心の準備が要るかも・・・と思っていた。今までのように、切り身となった肉を捌くのと、生き手いる動物の命をこの手で摘み取るのは全く違う。

目を見てたら、抱いてしまったら・・・泣いてしまつかもしれない。しなくて済むならしたくない。

けれど、このままここで生きていくには、慣れないといけないことなんだろうと心を決めた。

心配は杞憂に終わった。

行った時にはメインディッシュはもう絞められていたし、自分がしたことといえば首を落とされた良く分からない生き物の鱗をそぎ落とし、色鮮やかな羽を？いで切り分けただけ。しっぽは何もしなくても簡単に手でちぎれた。

（初めの形から想像するに『鱗の生えた鶏のような大きさの羽のあるトカゲ』が一番近いかもしれない）

調理というほどの器具も設備も無い旅路では、料理は簡単。

全てを入れて、かき混ぜ、煮込む。それだけ。

途中少し味見をし、塩と胡椒で味を調べて終わり。

料理が趣味です！などは、間違ってもいえないエミにとって、『料理が出来ない女』という不名誉を免れたのは幸いだったのかもしれない。

さすがに『包丁持ったことはありません』なんて言い訳することは無かったが。

伊達に6年間も一人暮らしをしていた訳ではない。

他人様に料理ですと自信を持って進められるものが作れないだけで、生きていくのに必要なことはほとんど一人で事足りていたくらいだ。

今までの知識や小説の中では、こういった旅や行軍中ほとんどが、干肉や干飯、乾燥させたパンなどを湯で戻した味気ないものを食べたりしていた。



昨日までの天幕を張り、荷馬車がある状態ならば、余裕があるだろうから普通の食事も不思議に思うことは無かった。けれど、夜逃げ同然に最低限の荷を持ち出立した行軍で、まさか料理をしたものが食べられるなんて・

たまた担当が、話したことのあるローディアスだったから疑問をぶつけてみた。

思っていたとおりの、干し肉や乾燥させた果物・干飯ほしいいなどもあるらしい。けれど、今後行軍が長くなることも考えると、少しでも余裕があるときには狩りや、採集をして食べ物を確保したほうがいい。・・・なるほど。

時間の無いときや、火を熾せない状況の時には、乾燥したそれをそのまま噛み千切り、胃を満たすこともあるのだとか。

ローディアスは以前の任務で味わったことがあるみたいで、『正直に言ってしまうと、乾燥した食物を自分の唾液だけで戻して食べるのはとても顎が疲れるし、味わうというよりも、とりあえずの栄養補給のようなもので、あまり好きじゃないんですよ』との感想をくれた。

そうだろうなあと思う。

味気ない食事が長く続くと、気分も滅入ってくる。

よく、食事療法の先生が言っていた。『食べる喜びは生きる喜びにつながる』と。

それとも、辛い状況の中でより早く美味しいものにありつくための気力が湧くのだろうか……。

このまま行軍が続けば、乾物を食べる機会もあるかもしれない。

洞窟から出てきたのは、殿下・ラウル・デインと見かけたことはあるが名も知らない騎士、そして全身薄汚れた上、両手を拘束されている2人の男。

灯りとは言っても、何箇所かに置かれた松明の灯りで、細部までを見渡せるものではない。

そんな光を持つてしても、縛られた二人は疲れきり、汚れていた。二人とも両手には包帯が巻かれていて、怪我をしているのだと分かる。

手当ては済んでいるようだから、エミの出番は無いだろう。

そもそも格好はまだしも、その待遇から言って、明らかに昨夜の捕虜だ。

説明されなくても、それくらいは理解できる。

「お疲れ様です・・・」

みな視線を無視し、目の前へ来た4人へ腕を渡しつつ。

思わず出たのが、こんな言葉・・・。

聞きとがめた殿下の、少し見開いた深い緑の瞳が綺麗だ・・・と思っただ。

同時に、少し疲れてるな・・・とも思った。

何でだろう・・・雰囲気かもしれない。

それを見て、自然と『お疲れ様』が口からこぼれた。  
長い間に培ったいたわりの言葉。

いち社会人として、毎日交わっていた挨拶のようなもの。

この国にそういった言葉は存在しないのかもしれないけど。

そんな、殿下との腕を渡す間だけの短い視線の交わりは、すぐに何事も無かったかのように終わりを向かえ、遅い夕食が始まった。

大の大人が集まって無言で食事を食べる風景は場所と、状況が違えばほのぼのしているようにも見える。  
だが、捕虜の二人は両手を繋がれているし、皆は剣を脇に置いている。

全員が無言の夕食は、どこか張り詰めたような空気が漂っていて、勘違いなど一瞬で消えた。

エミは、隊の中でも洞窟の右端。昨日身体を拭いた付近の岩に腰掛けて食事をとっている。

昨夜とは違い、今は辺りがスーパの臭いに包まれ、蛋白質と、香草の焼ける臭いは漂ってこない。

誰も、何も教えてはくれなかったけれど、

一般の人なら分からなかったであろうその臭いの元を。

蛋白質の焼けた臭いの原因を。

病院に勤め、一時は手術室も経験した私は分かってしまう。

考えたくも無いのに、知りたくなど決して無いのに。

容易に想像が付いてしまうのだ。

そしてその想像は、確実に現実起こったことだろう。

そしてそれらの事柄は、ここに居る全員がかかわっているのだ。  
もちろん、知らされていない私も。

温かいスープは身体を温めてくれる。

けれど冷えた心までは温めてはくれない。

心の中で辛いときにに口ずさむ歌のフレーズが繰り返し流れている。

スープは冷め始めていたから、急いで胃に押し込み、短い食事を終える。

出汁の効いた野菜だけのスープ。

今度は肉は初めから入れなかった。

その後、一つに集まった隊の皆にディーンさんから今後の行程の修正を告げらる。

捕虜から得たという情報を元に、より安全だが、時間と手間隙のかかるほうを選んだという方法は、今までの緊張感ある旅路を塗り替えてしまうほどのもので。

万全の準備を行うために、遠回りして近隣の村付近まで降りていくのだという。

出発は明日、早朝。

朝靄漂う中、振り分けられた自分の仕事に全員が驚くになるとも知らずに。

騎士たちは明日へ備え、眠りへと身を委ねた。

? - 18

束の間の休息

4 (後書き)

もともと朝に強いほうじゃなかった。

仕事の日も、休みの日も、許されるぎりぎりまで惰眠をむさぼり、15分おきに設定した携帯の目覚ましにせつつかれ、しぶしぶ起きて一日を始めるのが常だった。

だからといって、逆に夜に強いかというとそうでもなく、夜更かしはするがいつもではない。本を読み出したら止まらないとき、そしてそのほかの夜は何かしなければと焦燥感に襲われつつ、何も踏み出せないまま時間が過ぎて、結果的に夜更かしをしていた・・・というときが多い。

26歳の一社会人としてはお恥ずかしい話だ。

隊が天幕を張っていたとき、エミは初めの一晩を除いて、夜は殿下の天幕の隅に毛皮のような絨毯を敷き、比較的安眠を得ていた。得体の知れ無い人物としては破格の。日本では当たり前とも言える寝心地。

だが今朝は、

《痛い~~~~。・・・身体のおちこちがぎしぎしするし、体の下になつてたところが猛烈に痛む》

鏡で見れるものなら、きつと痣になっていることだろう。

ここ二日間寝起きし手いた洞窟は、一般にイメージする岩がごつこ

つして暗く狭い空間や鍾乳洞のような、じめじめとした高湿度、低温の空間とは違った場所だ。

床には平らな岩場が中心に広がり、大の大人が10人寝転べるほどの広さがあり、天井部分の奥まったところは小さく空と通じ、そこから細いが確かな一筋の光を差し入れている。

簡単に言えば天然の吹き抜けのある踊り場・・・が一番近いのかもしれない。

総合すると、

『平らで、暗くもじめじめもしていない雨から避難できる場所』

これだけ聞けば随分過ごしやすそうに聞こえてくる。

だがベッドや布団に慣れた身体には、石の硬さや寝苦しさはかなりのものだった。

眠るときは外套を下に敷き、荷物を枕に薄い綿毛布を被って寝る。

季節的にはまだ少し肌寒い程度で、雨風が入り込まないのであれば寒さは気にならない。

気にならないが、一枚の布を解して伝わってくる岩の硬さ、冷たさはきつかった。

荷物を最小限に減らしての行軍に余裕はなく、殿下も含め皆同じ条件。一番身分の上の殿下が不平不満を言わないのに、お荷物同然のような自分が文句も弱音も吐けるわけも無い。吐くつもりも無い。なれない環境に対する溜息は心の中で愚痴る程度にとどめ、一晩休んだはずなのにすつきりしない身体を抱え、むこうでは考えもしなかった早起きをする。

周囲を見れば皆も少しずつ置きだしているようで、洞窟内に残る人は少なくなっていた。

急がなければという焦る気持ち湧いてこないのは、朝から出発するということ、昨晚のうちに少ない荷をまとめ、いつでも出立で



きるようになっていたからだろう。

身体を起こし、背伸びをして、首を回し、布をたたんで、深呼吸。

今日も一日が始まる。

寄る辺のない世界での一日が。

\*\*\*

まだ朝靄が立ちこめ、森がひんやりとした空気に包まれている頃、  
隊は動き出した。

捕虜の二人を含めた総勢16人の行軍は雨に濡れたせいか、少し薄  
汚れて見える。

中でも一際貧相になった二人の捕虜は、出立前に引き立てをする騎  
士から昨夜よりも幾分に念入りに縄を絞められていて、その立場は  
一目瞭然だ。

歩いてもらうために足は縛っていない。

代わりに、縄抜け出来ないように両手の親指を締め、手首・肘・肩の各関節を動かせないように固めていくのだ・・・とフォルから聞いた。

フォルは今最後の打ち合わせに殿下の下へ行っている。

なんとなく見ていたら、捕虜の耳元で騎士が何かを囁き、二人の顔色が若干悪くなった。

心もち、姿が小さくなった様に見える。

・・・何を言われたのか気になるところだが、きつと知らなくても良いことだろう。

捕虜の隣に立つ騎士は薄ら笑いを浮かべているが目が全く笑っていない。

少し離れた位置にいるエミから見ても薄ら寒くなるほどの空気をもし出しているその騎士は、見間違えていなければ、昨夜殿下たちと一緒に洞窟から出てきたうちの一人で。

短く借り上げた灰色の短髪に浅黒く焼けた肌。出ている手や首は筋肉で覆われ、がっしりとした実用的な身体が、服の上からでも分かる。

鍛え抜かれた身体。他の騎士だってもちろん鍛えている（日本で流汗の草食系男子は一人もない）のだが、その中でも抜きん出ている。ひよっとしたら、ディーンよりも大きいかもしれない。

隊の中で一・二を争うであろうディーンよりも大きな男。

・・・行軍前はいただろうか？

天幕を張っていた頃、隊の中を歩き回り、結構な数の騎士と会ったはずだ。

みんながみんな話したわけじゃないし、友好的に関われた訳ではな

い。

けどあんな騎士はいなかったような気がする。

いたら目立つはずだ。

なにしろ雰囲気は全く違う。

たとえるなら、警察機動隊の中に一人だけやくざが混じっているそんな違和感。

研ぎ澄まされた鋭利な気配の中に何処と無く感じる粗野な仕草。

騎士というにはちょっと首を傾げたくなるのだ。

具体的に何が違うわけではない。

ただ、馴染まない。

・・・ひょっとしたら勘違いなのかもしれないけれど。

じっと見ていたら視線が伝わったのか、当の騎士がこちらを向き視線が絡まった。

騎士はすぐに近くに居たもう一人の騎士に捕虜を託すと、軽い足取りでその場を離れた。

・・・。

・・・こっちへ向っている？

後ろを振り向くが、周囲には誰もいない。

皆、出発の最終調整中で、セディオンさえも少し離れたところで装具の確認をしていた。

足の長さゆえか、考える時間さえなくつつたっているままに相手を待った。

あっという間に間の前に来た騎士は身長から生じる、当たり前の位置、つまりエミの頭を真上から覗き込む。

だがその距離が近い。

せいぜいエミの足で一步。

騎士なら半歩の距離。

他人と見詰め合う趣味はないし、得意ではない。

少なくとも目の前にいる騎士に対しては後ろめたいことは今のところ無い。

近すぎる距離に、近づいてきたのに何も言わない気まずさに困惑しつつ。

とりあえず笑っておけ。

顔を挙げ、日本人特有ともいえるべき愛想笑いを浮かべる。

「こんにちは」

頭を軽く下げ、失礼にならない程度の挨拶をする。

見上げたその先に見えるのは、少し見開いた青に明るいグレーが混じった瞳。

銀とは言いがたい灰色の髪は短く刈り込まれている。

全体的に荒い粗野な感じは否めないが、どちらかといえば整っているだろう顔。

惜しむらくは、左目にある引きつった傷跡で。

身体のいたるところに傷はあったが、それは今エミには分かるわけ

もなく。

ついついぶしつけに全体を眺めてしまった。

帰ってこない言葉に、逸らされない視線。

誰か来てくれないか探そうとと目を逸らそうとした時、

「あんたがエミ？ぜんぜん違うね」

・・・？

言葉の意味が全くわからない。

「はい。エミといいます。あの、失礼ですがあったことがありますか？記憶に無くて・・・」

『ぜんぜん違う』という事は何か比べる対象があるという事。

だが先程も思ったが、目の前の騎士は記憶にない。

全てを知っているわけではないなら、天幕のときも彼は居て、遠くから見かけたと言うことだろうか。

「いや。会っては無いな。俺が見ただけ」

「いつ？」

いつ、何を見られたのか。

「いつも泣いていれば良いのに。弱者は弱者らしくすがり付けばいい」

「は・・・？」

弱者らしくすがる？いつも泣く？

目の前の男の目は逸らされることなく、獲物を見つけた猛禽のよう。少し上がった口角が歪んだ愉悦を表していて、追い詰める言葉は更に続く。

「なあ、ここに居てあなたが何の役に立つの？そもそもあなたは何故ここに居る？」

何故ここに居る？なんの役に立てる？

そんなことはずっとエミが考えている答えの無い問いだ。

エミこそがそれを問いたいくらいなのに、目の前の男は何故自分にそれを言うのか。

周りの音が消えていく。

自分の足元が無くなり、居場所が見えない。



目の前に突きつけられた問いに自分の足場の不安定さを思い知らされる。

最初の日に殿下に氏素性を聞かれてからは他の誰からも聞かれず、誰も何も言わなかった。

押並べて騎士たちは皆優しく、手を差し伸べてくれた。

それをありがたく思いこそすれ、疑問に思うことなど一度も無かった。

今までが不自然なほど恵まれていたのだろう。前に立つ騎士のように考える人のほうが実は多いのかもしれない。

鋭い眼光は変わらずエミを見据えている。

逸らしたら、隙を見せたら捕食されるんじゃないかと思いつつほどに。

どう言おう。

なんと言い訳すればこの場を逃れられるのか……。

につこり笑って自分の無害さを主張すれば良いのかもしれない。

目の前の男性が言ったように、弱さを曝け出して助けて欲しいといえば。

事実、何のために何故ここに居るのかなんて自分でも知らないのだから。

だけど、弱さを見せたからといって、正直に答えたからといって、目の前の人物は納得してくれるのだろうか。『異なる世界からきま



した』なんて、頭がおかしいと思われなだらうか。

更に警戒でもされたら眼も当てられない……。

いつもなら天邪鬼と強がりな性格も相まって、大概のことには自分ひとりでは対処が出来る自信があった。

はじめての引越し、転職、ストーカーもどきに対する対処、お化け屋敷だつて一人で対処ができていたのに……こんな事態になつて初めて分かった。

思い知つたというべきか、今までは全部自分の足場がしっかりあつたからできたのだと。

引越しも転職もストーカーだつて、本当は一人じゃなかつた。

言葉だつて通じたし、最終的には親や周囲の人に相談することが出来ただらう。

何よりも生まれ育つた母国だつたのだから……。

今は……この何も知らない世界にたつた一人。

騎士たちは親切にしてくれるが、何も知らない。

本当のことは何一つ知らない。

お互いに何も知らないのだ。

頭の中はぐるぐると考え事がめぐる。目は逸らさないままに。

周囲が出立の準備に追われている中、目の前の彼の影に隠され、ここでは小柄といえるエミは周囲からちよつと隠れている。

早く、早く答えなければ。

たいした問いじゃないのかもしれない。

たやすく誤魔化せるのかもしれない。

けれど自分の中に答えがないから、聞かれたこつちこそが聞きたい答えだから、この世界の何を何一つ知らないから、簡単な誤魔化しも、言い訳も浮かんでこない。

荷物をつかんだままの左手は本人の自覚もないままに力が入り、指先は白く冷たくなっていく。

全員から見えないわけではなく、エミがいると知っている騎士もいれば、角度によっては今このときも横目で様子を見ているものもいた。

ならばなぜ声をかけないのか、この緊張した空気を読めないのか？ 対峙する緊張で、表面的にはわからなくともエミの頭の中は混乱の最中であつたというのに。

実は、この状況と今までに無い二人の組み合わせを不思議に思う者も、見ていた騎士のなかに何人かはいた。

ただ、相手が相手であつたこと、彼女に近づいていた騎士の口元が笑みを浮かべていたことから、世間話でもしているのか？と傍観に徹していただけで。

口は笑っているが目は笑っていないなど、実際に正面に立つ者以外には分からないことではあり、止めないからといって彼らを攻められはしないだろう。

ただ一人を除いて。

「何をしている？もう出立するぞ。持ち場に戻れ、ガウエイン」

視界を覆っていた騎士が横によけたことで、後ろから声をかけた人物が見えた。

知らないうちに呼吸も浅くなっていたのか、目がそらされたことでその場にあつた圧迫感がなくなり、目を閉じて深く息を吸い込む。目の前の相手を改めて認識し、意識を混乱から立ち上げ、足元を見つめなおす必要があつた。

ガウエインっていうのか……。注意しておこう。相手を知っておいて損は無いはず。

危険なものを知らなければ、人は危険に対処はできないのだから。

「殿下」。邪魔しないでくださいよ。せつかく良いところだったのに」

背後を振り返つた男の表情は見えないが、先ほどまでの尖つた雰囲気は無い。

敬語を使っているが、口調は軽く、到底敬っている様子は無く、むしろ馴れ馴れしいほど。

殿下は殿下でそれを咎めることも無く、さらりと流している。

「お前の嗜虐趣味に割く時間はない。彼女にはかわるな。どうしてもというのなら城に戻つた後にしろ。今、彼女の身柄はフォルに一任している。それにお前にはしてもらわなければならないことが山ほどあるんだ」

「城に帰れば良いんですか？約束しましたよ？」

「その時までお前の興味が続いたらな」

全く持つて信じていなそうな台詞は、ガウエインと呼ばれている騎士が普段どれほど移り気なのかを教えてくれるようで。

もしそれが本当なら、あまり神経を尖らせることも無いのかもしれないな……。と思った。

背を向けて歩き出した二人に、少しどころではない安堵の気持ちを抱き、自分の支度の続きに戻ろうとする。すでにまとめ終わっている荷物はいままら確認するまでも無いが、もう一度点検しても良い。布袋の紐が傷んでいるかもしれないし、糸が解れているかもしれない。

とりあえず、今だけは違うことに目を向けたかった。

だが、何気なく視線を戻したとき、

「……………っ!?」

まだ近くに留まっていたガウエインの目が合い甘い考えを捨てる。

捕食者の目。

すぐに逸らされはしたが、決して諦めてなどいないと口よりも雄弁に語る眼に、気を引き締め、大急ぎでこれからの計画を立てていく。

今回のことで思い知った『自分の立ち位置の不安定さ』。

寄る辺が無いから、不安定になるのだ。

自分の足で立たないから、自身を持ってない。

誰かに頼り続ける限り、弱さは無くならないだろう。

そして、この死と隣り合わせの『異なる世界』で、弱さは致命的なものになる可能性が高い。

だったら、寄る辺を作れば良い。

知らないのなら、知ればいいのだ。

情報は確かな道を見せてくれるだろう。

自分の足で立つこと、すなわち自活の道を確立し誰かに頼りきらなくても生きていけるように、他者に脅かされることの無い自分だけ

の居場所を作らなくてはいけない。

今回のことはマイナスでありプラスだ。

弱いだけの自分を奮い立たせ、たとえ強がりであろうとも気力を思い出させてくれた。

目標が見つかったことで、自分のすることが見えてきた。

この日が。

読んでいたファンタジー小説のように何か特別な能力があるわけでも、重要な役目を果たすために待ちに待ったと召喚されたのでもない、ただ毎日を平凡に生きてきた一人の女が。

真実この世界で生きようと前を向いた最初の瞬間だった。

? - 20 道中 2 (前書き)

長らくお待たせしました。

「ガウエインって、騎士のことっ、フォルさんは、・・・知っていますか？」

有限実行。決めたことは早く行動に移すにかぎる。

「何だ、何かされでもした？」

行軍を開始して、早一時間くらいだろうか。

歩きながらの会話は慣れない身体に負担が大きい。

が、他に質問を切り出す機会もなく、全員が動き小さな会話など注目されない今が、一番切り出すタイミングに良いと思ったのだ。

おかげで、息は上がる一方なのだが・・・

前を進むセディオンの少しだけ華奢な背中を見つめる。

後ろで交わされる会話を聞いているのか居ないのか、揺れる様子も聞き耳をたてているのかも一見ただけでは分からない。

旅慣れない身を補助し支えるためか、監視するためか、エミのすぐ後ろを時に手を貸しながら進むフォルの存在を強く感じながら言葉を続ける。

「いえ・・・ちょっとだけ。一昨日まで見かけたことが無いような気がして。」

殿下とも親しいようでしたし」

ガウエインに言われた内容は話すことはできないため言葉を濁して伝える。

言葉のニュアンスだけで分かってくれば良い。

きつと内容を聞かれても誤魔化すか、嘘を伝えるしかない。

正直に全てを話した初めの頃とは違う。

自身の足場の不安定さに気づき、警戒するということを出してしまったから……。

周囲を無条件に信頼できないことは寂しいことだろう。

自分を助け、優しくしてくれる他人に隠し事をするのは失礼なことだろう。

罪悪感はある。

それと同じくらいに保身を望む気持ちも。

内容から少しでも不信を抱かれないためには、内容を明かさないうがよい。

私の存在の不自然さに気づかれないように。

始めの尋問での内容を知っているのは殿下と、あの場にいた二人だけ。

未だに話が広まっていないということは荒唐無稽な話として信じてもらえなかったか、真実を確かめるまで秘めているかのどちらかだろう。

もしそのどれでもないのなら……いくら考えても、人を束ね、率いる立場の人物の考えなど分からない。

「ガウエインか……詳しいことはいえないが、殿下が直接雇い入れている騎士だ。一昨日まで隊から離れて別の任務についていたらしいからな。見たこと無くても不思議じゃないだろう」

「殿下の直属……。正式な騎士じゃないんですか？」

「ああ。前歴を知るものはあまり居ないだろうな」

前歴を知られていない殿下直属の騎士。

内向きの命を受け行動することもあり、尋問にも参加する。

……怪しすぎないだろうか？



雇われた背景に謎が多いのももちろん、殿下との距離の近さも不審極まらない。

「出来ればあまりかわらないほうが良い。まあ、普通にしていればかわる機会も少ないだろうが」

フォルから見ても危険な香り漂うということか。助言はありがたい。

異世界人のエミにこの世界での『普通』が分かっていたならば、ためになる言葉として、即座に対策をねっている所だ。

残念なことに、この世界のことなど何一つ分かっていないのが現状で。

もどかしさが募る。

誰かに頼らなければ生きていけない今の状況に、何も出来ない自分の不甲斐無さに。

弱いばかりの、恐怖心の消えない自分の心に。

「大丈夫か？」

フォルが後ろに位置することは幸いだ。

今顔を見られたら気づかれてしまう。

不安と心もとなさを現した表情に。

手を差し伸べられたら縋ってしまっただろうただの女に。

「大丈夫ですよ。体力には自信がありますし、フォルさんの言うとおり気をつけますね」

殊勝な台詞で自分を偽り、弱い自分を奥底に押し込める。

弱いだけでは生きていけない。

弱さに気づかれ、手を差し伸べられたら、一度でも縋ってしまった

なら……きつと一生自分の足で立ち上がることは出来ないだろう。

何も知らない世界で唯一の継るものを見つけたとき、その為に生き、その人だけを待ち、その人が全てになる。

失うことは世界の破滅を意味し、日々が失うことへの恐怖との戦いとなるのだ。

失わないためなら何でもしてしまう。

自分さえも差し出して……。

そんなのは御免だ。

狂っていくのが目に見えている。

何より自分に嫌悪するだろう事は確実に、怖い、怖い、怖い、怖い、怖い、こわい。

頭を振り、暗い想像を振り切る。

今考えることじゃない。

ともかく

係わるなという限り、これ以上の情報はフォルからは望めないと考えていい。

これ以上ガウエインについて話を突っ込めば、不自然に思われるかもしれない。

ひとまず敵についての情報を諦め、この世界、この国の常識を得ることに専念しようと思った。

後になって気づくことだが、この時フォルはガウエインのことを知らないとは言わなかった。

聞きたそうなエミに対し、『あまり知るやつはいない』と言葉を濁

し、それ以上聞かれないうちに話の方向を逸らした。

まだ関わる様になつて間もないが、従順すぎるほどの態度で、知る限りの女性なら誰もが根を上げるこの状況において、一言も弱音を吐かない二つか三つ年下の小さな彼女がその神経を張り詰めているのがよく分かつたから。

血生臭い出来事になどであつたことが無いだろう事は、抜き身の剣をどこかおびえて見つめる視線でよく分かる。

逃げないし、見えるところでは泣きもしない。

小さな身体で精一杯耐えているだろう彼女に、進んで危険と向き合うような真似をして欲しくなかつた。

兄弟などいたことも無いが、妹のように感じているのかもしれない。殿下には城に着くまで責任を取れといわれたが、言葉の裏に守つてやれといわれた気があったのもある。

そついわれたと自分で思つておきたいだけかもな・・・もう前を向き、遅れないように歩を進める背中を見ながら、フォルは苦笑を漏らした。

\*\*\*

朝早くに出立したため、大分歩いたと思われる今も、陽は高く、頭上に燦然と輝き存在を主張していて、身体を動かしているのもあり、暑いくらいの陽気だ。

朝、今後の行動について直接王都に向うのではなく、一つの街を経由すると説明があつた。

捕虜から得た情報で、このまま王都へ行くと狙われる可能性が高いのだという。

王族が死地から生存者を連れて帰還することの何が悪いのか、何処に狙われる危険が潜むのか、全くもって理解できない。むしろ、国

を挙げての大歓迎になるのではないのか。  
ただ前を向き、ひたすらに歩き続ける時間は話し続ける余裕こそ無いが、単調さに慣れるというんな考えがめぐってくる。  
街に向うという事で、歩き続けた山道から街道へと道が平坦になり、余裕が出てきたのかも知れない。

あ、ちようちよだ。

横からひらひらと煌めく燐粉を撒きながら、一匹の色鮮やかな蝶が飛んできた。

独特の軌跡を描きつつ、ゆらゆらとゆっくり近づいてくる。  
それはどこか場違いで、優雅な時間。

ゆらゆら、ひらひら。

この手にとまれ

冗談交じりで手を伸ばす。

足は止めないまま。

止まらないのを承知の上で。

木々が頭上を覆い隠し、葉の隙間から木漏れ日が降り注ぐ。

いつの間にか周囲の音は消え去り、視界にはひらひら舞う蝶が一匹。落葉樹が多いのか年月を経て葉の絨毯は靴越しにやわらかな感触を伝えてくる。

おかげで歩くのがずっと楽になっていた。

このまま立ち止まらずに前に進む、それが一番。

しかし、理性とは別のところで意識しないままに足は止まり、蝶に向けて片手を掲げ、顔をあげる。

おいで。綺麗な羽を見せて、ここで羽を休めて。

頭上をゆらりゆらりと飛ぶ様は、陽の光を浴び身に纏まとう彩いろがよりいっそう輝いて見える。

暗い世界で見つけた美しいもの。

ゆらり

ゆらり

ひらり

ひら　ひら

心の声に応えたわけではないだろうけれど、蝶はひらりひらりと羽を揺らし、ゆっくりと手のひらに納まった。

この世界に来て、細かな傷と爪の間の汚れが絶えない手のひら。

繊細な羽を休めた姿は容易く壊れそうで、風から守るように両手で包んだ。

「エミ……それは」

後ろから低い声が遠慮がちにかかり、現状を認識した。歩いていたはずの自身は立ち止まり、自然後方の騎士たちの足も止まっている。

ああ、迷惑かけたんだな。

「すみません。立ち止まってしまつて。綺麗だったので大人げも無く足を止めてしまいました。そんな場合じゃないですよね」

謝罪を示すように軽く頭を下げたのにフォルの視線は両手に注がれている。

「フォルさんもエミもどうしたんですか？」

後ろが付いてきていないことを不思議に思ったセディオンも足を止め、近づいてきた。

緩やかな道程になつて来たとはいえ万全でない身に負担がかかるのか、歳若い騎士の息は少し上がっており、杖代わりの木の棒を支えにして真横に止まつた。

「ん、ごめんね。綺麗なちようちよがいたから、足を止めてしまつたの」

「へえ、この季節に蝶がいたんですか。珍しいですね。エミの傍に来たかつたのかな？」

「……………」

にっこりと笑って紡ぎだされる気障な台詞に開いた口が塞がらない。横の青少年は至って真面目に、他意無く言ったんだろう。からかう様子もないし、青い瞳から放たれる純粹すぎる視線にこちらがひたすら恥ずかしくなる。

お姉さんは君の将来が心配です。

きつと天然の女たらしになれるだろう。それともここでは皆そうなのか……。

横を見上げるとセディオンは、どうしたんですか？と言いたげにこちらを見て、言葉を待っている。

自分より頭一つ分背の高い男の子の邪気の無い仕草。

可愛いと思ってしまう自分は歳をとったんだなと思うと可笑しかった。

なんだかセディオンといると和む。彼の真つ直ぐな気質に我が身を改めるといふか、その存在に助けられる。

絶対に幸せになって欲しいと思うのだ。

「まあ真相は不明だけど、この季節に蝶は珍しいの？」

「はい。もうすぐ寒くなりますから。暖かい時期を好む蝶は見られないはずなんですよ」

それはそうか。日本でも春の花の時期以外の秋や冬に蝶を見ることは少ない。

「そうなんだ……。この子は眠りそびれたのか、寝場所を探しているのかもね」

手の中の蝶を見つめる。一見したところでは分からないが、落ち着ける場所を探して探して疲れてしまったんじゃないかと一瞬思った。だとしたら辛いことだ……。とも。

「その手の中を見せてくれないか」

先程のままじつと見つめるフォルからかかった。

「え……？ああ、綺麗なちようちよですよ」

蝶が珍しいのか分からないが見たいというのなら、見せない理由は無い。

こんなに美しい蝶なのだから、見ただけで幸せを感じたのだから、世話になっっている騎士の願いに否やは無かった。

ゆっくりと開いた手のひらの中に、降り立ったときと変わらず蝶はその羽を休めている。

「これは……」

手の中を見つめ目を見開き息を呑んだ。今まで見たことの無いフォルの驚きに満ちた表情。

続く言葉はセディオンとは反対のすぐ横から聞こえてきた。

「エルフレミクだな。」

……！

振り向くと傍に殿下がいた。視線はなぜか包まれた手の中へ。

逆光のなか、光が反射し夜でも艶やかだった金の髪は光を放つように輝いていた。

……また勝手な行動で迷惑をかけてしまったのか。なぜ殿下がここになどとぼけられない。分かりきっている。

足を止め、先を急ぐ隊の道行きを止めてしまったのだ。たいした理由でも無い、綺麗な蝶を見つけた、それだけの理由で。



そして殿下は先頭付近で隊の動きが鈍ったことに気づき、咎めるためか、原因を確かめるためにわざわざ戻ってここへきたのだろう。頭の中は一瞬で混乱に陥り、すぐさま計算を始める。効果的謝罪の方法を。ありとあらゆる誤魔化し方を。頭をフル回転させているから身体は固まったように動かない。つい先程まで抱いていた穏やかな気持ちは跡形も無く消え去る。視線は殿下に固定され、手の中の蝶も動かないまま自分の思考に没頭し、かけられた言葉への反応が遅れてしまった。

「近くで見せてみてくれないか」

「え」

「エル・フレミクを近くで見せてくれ、といったんだ」

えるふれみく……？

聞いたことの無い言葉に首を傾げる。言葉の意味を理解でき無かった私は意味を問うようにフォルさんに視線を向けると、彼は先程のまま、手のひらの蝶に視線をとめたままの状態だった。

いつもさりげなく助けの手を伸べてくれた騎士らしく無い状態で、私の視線にも気づいていない。

セディオンのほうを見ると、彼も驚きの表情を浮かべていた。

「この蝶が彼のエル・フレミクなのですか?!」

彼のだかなんだか知らないけれど、これだけ驚くということとはきつと珍しい蝶なんだろうな……と納得する。フォルが固まったままなのも、珍しいものを見たからなのだ。

「へえ。珍しいちょうちよなんですね」

相槌をかえしつつ、殿下の方へ両手を掲げる。

こんなことしなくても、真横にいるのだから充分見えそうなものだけれど。

肩くらいまで両手を持ち上げたところで手を開く。

殿下からは色鮮やかな『えるふれみく』が見えているだろう。

「まだ、残っていたのだな」

それは季節はずれの蝶に向けるものではない、もっと心の奥底から滲み出すような感慨が浮かんだ言葉だった。なんて言い表せば良いだろう・・・失ったものにめぐり合ったときみたいな。

いつの間にか周囲には騎士たちが取り囲み、ラウルやデイーンの姿もみえた。

少し遠巻きに見つめる視線はみな真摯な光を宿している。

急ぐはずの旅路の中で、誰も先へ進もうと言い出すことも無く、たった一匹の蝶を中心に足を止める姿はここが森の中などではなく、厳かな教会であるかのように感じさせ、中心に一人立つことの気恥ずかしさや、身の置き所の無い不安を忘れ、どこかこの空気を壊してはならない気にさせた。

手のひらでは今も頼りなく存在感を示す、緩やかな羽ばたきを感じる。

伸ばした両手はきつくなってきていたが、もう少しだけ頑張ろうと思った。



「エル・フレミクの語源は残念ながら分かっていません。エラ（素晴らしい）フレミク（神の使者）とも言われていますし、エリユーファンク（希少な宝石）という古語が長い時を経て、エル・フレミクとなったとも言われています。一説によると、発見者の名前を取った。という話もありますが、どれもはっきりとした根拠は無いのです。別名で審判者とも言われますね」

蝶を見つけてから、隊は一旦休憩を取っていた。

殿下も含めた全員がエル・フレミクの存在に気をやり、エル・フレミク保護のために時間をとったのだ。

大の大人、それも男性ばかりが一匹の蝶を囲んで目を輝かすというのは、一種異常な光景だったが畏敬の念さえも感じられる騎士たちの雰囲気にはなれなかった。

より近くに見せるために掲げる両手も疲れて震えだした頃、医療関係者らしくいち早く気がついたラウルが網目状の器に蝶を移してくれて難を逃れその場を退いた。

一番間近で鑑賞したためか、セディオンは一足早く場を離れ、今は私の隣でエル・フレミクについての講釈を教えてくれている。

幼い頃から家庭教師に習っていたという知識は、広く分かりやすかったが同時に固く、経験による裏打ちが無いためか、教科書を諳んじているような説明になっていた。

まだ陽も高く、過ごしやすい陽気。

お尻の下は、腐葉土と落ち葉の重なった天然のクッションで汚れないように外套をしくと、座り心地は低反発クッションのようであるなら持ち歩きたいほど。

「一匹の蝶がまた大した存在なんだね」

「そうですね。授業にも出ますし、老若男女知っていることでもあります。僕も初めて目にしましたし、こうやって姿を見れたものはほとんど無いでしょうが、その写し絵はお守りなどにも使われているんですよ。国の女性なら型を模した飾りをありとあらゆる物にし、一つは身に着けているようですね」

幸運のお守りみたいなものだろうか。確かにあの綺麗な蝶を模った装飾品は、華やかで良いアクセサリーになるだろう。

さりげなく付けていてもお洒落だ。

世界が変わってもこんなところは変わらないんだなあと思う。

「恋人に渡す贈り物としても人気が高いですよ」

そう付け加えたのはローディアスだ。

彼もエル・フレミクを囲む輪から離れたのか・・・目をやると輪は先程よりも少なくなり、今いるのは4・5人ほどになっていた。顔は見えない。離れているからではなく、全員がこちらに背を向けているから。

落ち着いた少し長めの橙色の髪を揺らし、同じ色の瞳に優しい光を燈しながら腰掛けても良いですか？なんて聞かれても断れるわけが無い。

少し腰をずらして座るスペースを作った私にどうぞと、湯気の出ているカップを渡す。

受け取ったカップには蜜を溶かしたお茶が入っていた。

「ありがとう」

どういたしましてと笑う彼はセディオンにも同じものを渡し、腰掛けると自分もカップに口をつける。

座った頭の位置が、身長差を考えるとどう考えてもおかしな位置・  
・頭一つも離れていないことは、この際考えないことにしておく。

「ローディアスはもう良いの？」

「不躰に見続けるのも失礼かな・・・と」

蝶相手に大した気遣いだ。

「エル・フレミクは今後どうするの？連れて行くの？」

「確かなことは分かりませんが、そうなると思いますね」

自由に空を飛んでいた姿を思い出す。

いくら貴重な蝶だといえども、籠に捕らえられ崇めるといふ名の見世物にされるのは切ない。

あの時手を伸ばさなければ・・・と、考えても今更な事を思う。

自分の意思でなく、知らない場所に連れて行かれ、閉ざされた生活を強いられる。知っている蝶と同じだと考えれば、一生は一つの季節と同じか、長くとも半年。

出会いも、自由も、命も制限され、死した後は自然に帰るはずだった身体を標本にして保管されるのだらう。何処までも自由は無い。帰りたくても帰ることは出来ない・・・。

「エミ？大丈夫ですか？」

「・・・大丈夫。ただ、悪いことしたなあって思っただけ」

「悪いこと・・・ですか」

この先、人々から崇拜され、大切に扱われようとも生涯を奪われることに変わりはないのだから。考えれば考えるほど思考が暗い方向へ傾いてしまいそう。

駄目だ。落ち込んでくる。

話を変えよう。そのほうが良い。

「そういえば、さっき別名で審判者って言ってたね。なぜ？」

隣でカップに口をつけているセディオンに話を振る。

「それは・・・国の浮沈に関係しているからだと言われています。その国が栄えているときは、エル・フレミクはよく見られるそうです。ですが、その国が傾き始めると徐々に数を減らし、姿を見せなくなるそうです」

言い終わった顔は、初めの知識を語る顔と違い、視線を下げ、声のトーンも落とした暗い表情で。

聞いてはいけない事だったの・・・？

だが、反対にいるローディアスもしんみりした顔で、この二人にとつては他人事ではないんだと思わざるえなかった。

ただの蝶が一国の状況を判断し、数を増やしたり、減らしたりする。良くある都市伝説のような話。

実際に詳しく調べれば、気候や、時期、環境などの違う原因があるんじゃないかとも思ったが、ここが違う世界なら、そういったこともあるんだらう。

今のところ、文化や、科学の進化以外の劇的な違いを見出せない両者だが、この先多くを見れば違いもはつきりしてくる。決して人の不幸を喜ぶつもりじゃないけれど、一方で知ることが怖い反面、小さな好奇心を刺激されるのも確かだ。

国の浮沈に合わせて、その数を変える蝶。

殿下は『まだいてくれたのか』と言っていた。

ならば考えられることとしては、この国は傾いているのだということ。

それもエル・フレミクがいなくなるほどに。

戦争が終結していないことから、平和な国ではないだろうとは思っていた。

だが、国が終わりに向うほど傾いているとは想像もしていなかった。できなかつたと言った方が正しいのかもしれない。

自身することに精一杯で、周囲を冷静に観察する余裕が無かつた。今も余裕があるとは言いがたい。

狙われている皇子。

終わらない戦火。

国の浮沈を象徴する蝶が消えた国。

どんな先を想像しようとしても、明るい未来は見えそうに無い。

改めて、この先自分の立つ位置を確保するのは大変だろうな……と思う。

同時に、乱世だったら、一人くらい不審者がいても紛れ込みやすい



んじゃないかなんて、楽観的な考えも浮かんできて……。  
一国の一大事に自分のことしか考えていない事に気づき、自己嫌悪  
した。

? - 2 1

エル・フレミク

2 (後書き)

話が進まな過ぎにもほどがありますね

これでもう何度目だろう。

足に出来た肉刺は嫌になるくらい出来ては潰れ、出来てはつぶれている。

普通の靴擦れなら靴に慣れたらできなくなるんだろう。

でも今回は普通じゃない。

何もかもが、‘今までの普通’ではあり得ないのだから。

借りている長靴は男物だ。

当然サイズが違う。

大きさをあわせるためにつま先と踵に、クッション製を求めて靴底に布を詰め、なおかつ足が痛くなるとほぐした綿を敷きこんだ。

足を止める度に潰れた肉刺に軟膏を塗り、その場限りの対症療法をしていたけれど、効果は今のところ発揮されているとはいいがたい。何もしないよりはましな程度だ。

硬く重い靴に歩きなれない道に、運動から遠のいていた身体。

筋肉痛はずっとしている。

だんだん麻痺してはきているようだけど。

こんな毎日が続けば弛み始めていた身体も、さぞかし鍛えられ引き締まることだろう。

身体の悲鳴にむなしいと分かっているながら、状況にそぐわない一縷の希望を抱く。

きつと、引き締まる前に肉離れやどこぞを傷めるのがオチなんだと

分かってはいても。

・・・25を超えた身体を舐めてはいけない。

短い休みは思ったよりも休めたけれど、足は痛いまんまだ。

ラウル特製の痛み止めを飲んで、肩の痛みは取れたのに、踵の痛みは取れない。不思議なことに。

歩くたびに擦れて痛むけれど表情には出さない。意地でも見せない。こんな小さな傷を大げさにしたくはないし、足手まといにもなりたくない。

弱い自分を見せたくない見せられない。

徐々に街道に近づいているため、ほぼ平坦、なだらかな道が続いている。

前後左右周囲の騎士たちの表情はどこか明るい。

今まではなんだか声をかけづらかった騎士も例に漏れず。

はつきり微笑んでいるというんじゃない。

話す話題が明るいか、躁<sup>そう</sup>状態に見えるわけでもない。

ただ、なんとなく張り詰めた緊張感、疲れから来る表情の険しさなんかが無くなったように感じるのだ。

それはあの蝶を見つけてから。

思いがけない行幸が、精神や肉体に与える影響というものを考えさせられる。

きっと彼らにとっては奇跡的な出来事だったのだと。

殺伐とした状況の中での希望の光なんだと。

何も分からない私にも分かるくらいに。

\*\*\*

何度か休憩を挟み、二日をかけて一行は目的とする地へ到着した。

やっと見えた地は街？町？村？どう表現して良いのかは分からないが、元は大きな木だったんだらうと推測できる太い幹を入り口の両側に立て、見張りの櫓が左右に二つ。

両側の幹には今は開け放たれているが頑丈そうな門扉が固定されている。

そこに二人ずつ帯剣した兵士が立っていて、中に入ろうとする人々を見つめている。

到着した地に足を踏み入れたのはラウルを含めた5人。

見張りの兵は通過する一人一人を確かめたり、探っている様子はない。

にこやかに挨拶をする者もいるくらいだ。

だが用心に用心を重ね、少しの危険も無いように、5人の中には殿下もフォルも含まれず、関所の外で待機することになった。

比較的歳のいった（それでも40台半ばだと思う）バルデス、人を喰ったような半笑いを浮かべるニルス、話しかけると嫌そうな顔をするベルジユ、表情のあまり変わらないゲオルグ、そしてラウル。

5人の役どころはお偉いさんの親子とその護衛だそうで、護衛の三人はともかく、バルデスとラウールの親子説は無理があるんじゃないかと思っただ。

だってラウールは30代になるかならないかで、40半ばのバルデスのいったい幾つの子供なんだか。

そもそも全く似てないよ……。

と、ローディアスに言ったら笑われた。

横にいるセディオンも、顔を背けているけれど肩が震えていてはバレた。

見かねたフォルが教えてくれたが、ここでは幼い頃から優秀な子供を養子に捕ったりすることは珍しくないらしいので、凜とした佇まいのラウールが傍にいても怪しまれることは無いとの事。

むしろ、跡取りに見聞を広げさせる養い親を演じるんだそうだ。

その役が殿下にならないのは目立つからなのと、安全を考えているから。

万が一の事態にならないとは限らない。

いつも一番最悪な事態を想定して動く必要があるということだろう。確かに、あの輝かんばかりの金髪と整った顔は目立つこと必須だ。

もしかしたら、殿下と言う立場から、広く国民に知られているのかもしれない。

あと、念のために別に2名の騎士が遅れて入っていった。キリアスとヴェンダー、比較的私と話してくれる二人だ。

もともと怪我を負い患者だった二人は、一見して全くそれを感じさせない。

でもその背中や腕、腰に治癒しきっていない怪我があるのを私は知

っている。

旅に出るからは怪我の調子確かめると、薬を渡す程度になっていたが、馬車の中ではフォルに手伝ってもらって身体を拭き、毎日当て布を交換し、処置をしてきたのだ。

離れていく二人の背を不安げに見つめる。

私に心配されたくても大丈夫だと思うが、何だろう……。

過ごした時間が長く、接した回数が多い分、親しくなった気がしているんだろう。

少しずつ服装を変えた5人に比べて、二人は帯剣しており、服装もほぼ同じ。

それでも大丈夫だと言う根拠は、まだ戦乱の続く国では、武装した傭兵だったり仕事を探して旅をすることは珍しくないかららしく、集団では警戒されるが、二人くらいだとかえって安全なんだそう。

キリアスはこの隊の中では言っては悪いが馴染み深い顔だ。

不細工だとか薄いしょうゆ顔とか言うのではなく、整ってはいるがあくまで普通にその辺にいそうなレベルで、その辺で畑を耕しているても何にも違和感が無いというか……何処にでも馴染めるということだ。

ヴェンターはもともと傭兵をしていたことがあったらしいから、偽装も容易いだろう。粗野な感じのする肩までのザンバラ髪を一つに括り、身のこなしを雑にすれば、騎士にはどうやっても見えない。

残った待機組の捕虜二人を加えた10人は少し離れたところにある場所に身を隠している。

ここから安全に旅を勧めるには、この地での情報収集と、物資の補給が必須のようで調達隊が帰って来るまでは動けない。

「ここが目的地じゃないの？ここに向って進んできたんでしょ？」

てつきり旅も終わりかと思っていた。

ここが終着点、もしくは中継地だと思い、進んできたのだ。けれど、調達部隊が出るといふことは違うのか……。

「ここでは情報と、物資の補給のみが目的ですね。その結果如何によつて今後進むべき道が決まるんでしょう。もしかしたら、王都に帰る事は無いのかもしれない」

少し離れた殿下の元にいるフォルの代わりに両サイドにはもう馴染みとなつた二人、セディオンとローディアス。互いに手に持った剣の手入れをしつつ、私の疑問に答えてくれている。だが要り込んだ情報は知らないのだろう。

答えには推測が多く混じっていた。

「帰るのが危険なんだね」

夜襲を受けたことを考えると容易に予測できることだ。

捕虜に対する尋問で更に何らかの情報を掴んだらろう。

知りたいと思う自分と、知らずにこのまま唯々諾々と生きていけるのならそれがいいと思う自分。

どちらも本心であり、更に言えば、もう人が傷つくところなど見たくはない。

それが叶わない事だと分かつてはいても。



関所を抜けると活気ある町の風景が広がっていた。

一見して遠くで戦争が起こっているとは思えない情景にも、目を凝らせばいたるところに気づくものがある。一番は、店頭に並んでいるものの少なさだろう。

常時なら物が溢れかえっているはずの店内は、程よく物が見渡せってしまう。

陳列にも余裕があり、売っているものが雑多な生活用品でなければ、上品なブティックかと勘違いしそうである。海も遠い地だからか、はたまた戦時中で運送路の確保が困難なのか、海産物屋に至っては店じまいをしている始末。

それでも、旅の要所として数えられるうちの末端に名を連ねているこの町は騒がしかった。

「なあ、正直どう思うよお前？」

そんな活気ある街道を、戦争が始まってから珍しくもなくなった傭兵風の二人組みが歩いている。

一人は赤茶けた短髪に襟足を伸ばしたひと房を赤い紐で括っているおり、着くずした服の上からでも盛り上がる筋肉が分かる。

「あ・・・？」

隣を歩く男は反対に、一見して細身。傭兵と言うよりは良いとこ育ちなスマートなさわかさを感じさせ、青銀のゆるく波打つ髪を黒紐で括っている。

背丈は隣の男にわずかに及ばないながらも低いほうではない。

堂々とした歩みには自信が感じられ、見た目どりの優男でないことがうかがえる。

「怪しくないか？」

突然の前後の脈絡も無い言葉にはこう返すしかない。

「何が」

「あのひとだよ」

「あのひと・・・」

固有名詞の出でこない話に興味は湧いてこない。

なので、相棒役の話にも上の空で応え、周囲を見渡してみる。

5件先の服飾店の入り口には、援護すべき仲間の偽りの姿。商人風の5人組が見えた。

軒先に下げられた女物の羽織、入り口から見えるところにあるキラキラした物は装飾品か。中心にいる若い男が手にとって見ていて、横で父親風の男が何かを話している。

若い男はそれになづきを返しながら次々に手に取る品を変え、店内へ消えていった。

「・・・」

父親風の男は続いて中に入り、後には護衛だろう男が付き従っていた。

だが一人だけ残された男は、ポケットに両手をいれ、下から見上げるようにうろろ歩いており、不審極まりない。

「おい・・・きいてんのか？」

・・・あ、唾を吐いた。

その上、店に近寄った若い青年を威嚇している。

青年はおびえたのか、後ずさり・・・小走りで逃げていった。

「おい、見すぎだ！目をそらせ！」

逃げていったのに満足したのか、背中に向って指を突き立てている。  
・・・最悪だ。

あいつは偽装中だと言うことを分かっているんだろうか。

自分の役割とか。

ある意味、騎士には全く見えないと言う点で完璧なる偽装なんだろうか・・・。

考え込む男の隣で、注意にも反応しない相手に痺れを切らした相棒は、突然見つけた物珍しいものを見せたいというフリをして、身体ごと強引に向きを変えさせた。

「ああ・・・すまん。あんまりにももの奴の演技が不審すぎて目が離せなかった」

向きを変える際におかしくない程度に小突かれたわき腹。

痛みはない。

無いからこそ今見たものが消えない。

「あいつ・・・馬鹿か。やりすぎだろ」

掲示板に張つてある募集要項に目をとおすフリをしながら、思わず漏れた溜息。

なんだか疲れた気がする。

「・・・ニルスか。あいつ悪ぶつてると言うか、不良に憧れてたらしいからなあ・・・義賊とかなりたかつたらしいぜ。親に泣いて反対されてやめたらしいけど」

「義賊つて不良と関係無くないか？」

「あいつの考えることだからな。よくわかんねえよ」

「確かに・・・」

見てくれだけなら好青年風なだけに、その考えが勿体無いと言うか、ついつい可哀相な人を見る目で見てしまおうと言うか。つまりは少し変わった考えの持ち主だと云う事で。

騎士としての能力は十分なだけに、頼むから喋らないでくれと言いたくなる。

道を逸れずに今の彼があるのは、両親と周囲の多大なる苦勞と、努力の成果であることは間違えない。

「ところで、何の話だった？」

衝撃的光景に目を奪われて、話を聞いていなかったことを正直に告げ、続きを促す。

両腕を組み、視線を掲示板から逸らさずに会話している二人は、他者から見れば請け負う仕事を相談しているように見えるだろう。

「いや、エミのこと。なんか誰も何にも言わないから言いつれえけどさ、実際怪しいよなあ？って思うわけだよ。世話になったけどな」

物々しい戦場に突如として現れた彼女。

彼らがあの地獄に取り残された者達を一人でも多く助けるために向  
つた場所には、そぐわない存在。

兵士以外の姿がおかしいと言つのではない。

戦場となつたとはいえ、偶然に紛れ込んだり、死んだ兵士達の遺品  
や防具を略奪するものも現れる。悲しいことだがそれを生きる糧に  
している人々もいるのが事実だ。

戦争によつて生きる場所を奪われたひとや、働き手の家族を失い生  
活が立ち行かなくなった人たち。賊やごろつき等、闇の商売に手を  
染めているものがほとんどだろうが、中には少なからず間接的戦争  
被害者も存在する。

が、話題の人物はそのどれにも当てはまらない。

全く異質であると断言できるのだ。

今まで見つけた通りであるなら、発見時もつと衣服が乱れていても  
良かった。いやしくは無いがそれが常だった。男をみて脅えたり、  
逆に縋ってきてても可笑しくない。

こちらの正体を知つたなら、媚びすがり付いて助けを求める。

散らされた花・・・それが荒んだ戦場での女性であつたはずだつ  
た。

・・・これまでの彼女の姿が蘇る。

初めて見かけたのは、血と怨嗟が漂う戦場で、誤解によつて射られ  
倒れた姿。

その日の夜に聞こえた隔離された馬車から聞こえた悲痛な叫び。

翌日に前夜の欠片も見せない、傷の手当てをするときの優しい声掛  
け。

遠慮する男達を取り押さえ身体拭きを強行した時の力強さ。

夜襲を受けたときの心をどこかに飛ばしたような血塗れの様子。誰もが、もう見ることは無いと思っていたエル・フレミクを見つけたときの他意の無い子供の瞳。

物知らずかと思うほどに、様々なものを知らないくせに、妙に達観していて、強がって一人で立とうとする。離れたところからしか見ることは無いが、それでも分かることはある。

たとえば、血に塗れることになった後から肉類の類を口にしなくなったとか。

怪しいと思えることは数限りない。

だが警戒すべきかとか、信じられないかと聞かれると、そうではない。

結局のところ、

「大丈夫じゃないか？」

あの人に俺達をどうこうできるとも思えない。何かあったらその時に対処するってことで」

この人数の騎士たちに囲まれて行動を起こせるほど強くは無いだらう。

「まあなあ。怪しいちゃ怪しいけどこう、なんだかなあ疑いきれねえんだよなあ」

「その為にフォルさんも付けてるしな。俺達が出来ることなんて無いさ」

上の意向や考えなど、もともと傭兵の自分に分かるわけが無いし、隣にいるキリアスにはもつと解らないだろう。キリアスはそんなに

思慮深くない、肉体派特有の本能で生きる男だ。

本人は気づいてないかもしれないが、疑いきれないと言っている時点で信じていることになるも同然で。

裏切りが日常であった傭兵時代があるからこそ、上辺をいくらでも偽装し親しげに話しかける裏で、備に、少しの見逃しも無いように観察を怠らない自分とは違う。

今がどんなに信じられても、次の瞬間には背を翻すことには出来るからな……。

心底の信頼は出来ない。警戒は怠らない。

無く喰わぬ顔で日ごろから話す方である自分達がこんなことを考えていると知ったら、彼女は傷つくだろうか。それとも、しょうがないと言って諦めるのだろうか。

視界の端で動いた目標に、ヴェンターは気持ちを切り替える。

「行くぞ。目標も移動した」

物資と情報の補給と言つ目的を無事終えるために。

\*\*\*\*\*

この間から、少しずつ悪くなっていることを自覚していた。

早く対処しなければと思うと同時に、どこかできつと良くなるだろうと楽観視していたのだ。

けれど、それももう限界が近づいている。

荷を持つことはおろか、動かすことも辛くなってきたのだ。痛み止めを飲む間隔も近くなり、思考が鈍くなっている。

自分を支えるのは自分しかないというのに。

足手まといにはなれないというのに。

トイレだと誤魔化し、離れた場所で見ただけは周囲が赤くなり、膿んでいる。

触ると熱を持っていることがわかり、痺れたように感覚が鈍くなっている。

清潔そうな布を選び、消毒薬を浸し、傷を抉る。

「・・・っ」

そうして軟膏を塗り込め、新たな布を当て、包帯で巻く。

残り少なくなつた痛み止めをまとめて口に放り込み、嚥下する。

目を閉じ、大きく息を吐くと少しは楽になって来たように感じた。あと少しこの場所で時を過ごせば痛み止めも効いてくるだろう。

誰にも言えず、こんなところで治療し、耐える自分がたまたまなく悲しかった。



いつに無く孤独だった。

滲んでくる涙を歯を食いしばることで止めた。  
まだ頑張れる。

一人で立ち上げられる。

いつものフレーズを口ずさみ、樹に背を預けると怪しまれない程度の時間を過ごす。と痕跡を埋め、その場を後にした。

? - 22 進む道の先 2 (後書き)

遅くなり申し訳ありません。

本編2011年第一作目でございます。  
読んでいただきありがとうございます。

これからもよろしくお願いいたします

かりんとう

ラウールたちが情報や、物資を補給していた頃。

待機中の騎士たちは手持ち無沙汰になりつつも、各人が周囲を警戒し、装備の点検をし、出立に備え、身体を休めていた。

7人も的人员が街に割かれたため、残ったのは捕虜を含めた10人という多いようで少ない人数のうち、三人は非戦闘要員だった。

一人は女性であり、戦うことなど到底出来そうも無いエミ。残る二人は裏切る可能性がある捕虜。

捕虜に関しては捉えられた際に自分可愛さに情報を漏らす可能性が高く、ガウエインによる軽い尋問で容易く開いた口は硬くは無いことと確実で。最悪、戦闘中に隙を見て後ろから刺されることも考えられる。

その為隊の中の誰もが信用を置いていなかった。

現に二人は今も足を縛られた上で、樹の幹に繋がれている。

一方、もう一人の非戦闘要員である彼女はと言えば。

誰かしらに声を掛ける機会を探っていた。

騎士たち皆が装備や剣の整備をし始める中、彼女の少ない荷物の点検は早々に終わっていたのだ。

徐々に目減りしていく医療用具に、薬草。

バックの口をあけてもすぐに残りを数えられそうなほど、覗き込んでみても、一杯だったはずの中はすっかり隙間だらけになっている。補給の必要性を感じるが、エミに出来ることは無いに等しかった。

何も解<sup>わか</sup>らないこの世界では、未だ自分の世話さえ満足に出来ない状

態だ。世間知らずの箱入り娘のほうがよく、今の彼女よりも生きるための知識があるに違いない。

日本では……

26年生き、つたなくも7年の間社会人生活を送ってきた。

知恵も知識も人並みにある。

ただその26年間で、仕事で得た7年間の知識が、ここでは何一つ通用しないものであるだけで……。

溜息を一つ吐く。

何度ついたか分からない、数えようとも思わない回数のは、確かに吐く度に幸せが逃げていくのではなかっただろうか？もしも迷信ではなく本当のことであるならば、彼女の幸せは残り僅かか、ものすごい勢いで減っているだろう。

そのことを思いながらバツクの中をもう一度見る。

まるで自分の幸福の残量を示すかのようで見ていられない。

ラウルが買出し部隊に居ることは知っている。何の心配要らないだろう。彼もバツクの中身の軽さを知っているはずだから。

いや、知らなくともこの怪我人の多い時に、補給の重要性を考えないわけが無い。

だからエミはただただじっとして待つていればいい。  
分かっている。

(だけど………到底無理)

周囲を眺め、一人だけ身体を休めることは出来なかった。

自身の幸せに重なって見える鞆の中身に対して、何もしないなど出来そうも無い。

それに何もしない時間が怖くもあった。

フォルは荒布で剣の曇りを取った後、少し刃はこぼ毀れした箇所を研ぎ石で削っていた。

機会があれば必ず専門の鍛冶師に修理に出したほうが良いだろうが、目的地に着けばどうせ鍛冶師の一人や二人はいる。ならばもう道程の半分を進んだ今、焦って直すことも無い。

専門職の細かい業には到底及ばないが、補修程度なら自分で出来た。削って幾分細くなった刃をみて、何とはなしに随分荒っぽい使い方をしてしまったと苦笑いする。

鍛錬が足りないかもしれないな……。

今は余裕が無いが、落ち着いたらディーンとでも手合わせして、戦いの型を鍛えなおそうと決心し、次の作業へ移っていった。

「すみません……いいですか？」

やっと来たか。

先程から何か言いたげにこちらを伺っていた影。

視界の隅にちらつく姿を目にしていたが……本人が言い出さないので聞くことも無いかと気付かないフリをしていた。じっとしていること、ただ何かを甘受することをしない。

周囲は腕に覚えのある騎士ばかりだ。

たった一人の女性である彼女がこんな時くらい、何をしなくても誰も責めはしないのに、気が付けば動いている。不安なんだろう。落ち着かないんだろう。

「ああ、どうした？」

「あの・・・少し薬草を探したいんですが、何処までなら離れても良いか教えて欲しいんです。  
私が解るものは少ないですけど、この場所に来る途中に種類か見つけて・・・」

こちらを窺うような言葉の影で、諾と言えばすぐにも薬草採取に行けるように、手に包みを持っている。

正直、彼女の身体を思えば、この機会にゆっくりと身体を休め、体力を回復してもらいたい。今後何時このような時間が持てるか解らないし、旅慣れぬ女性の身では疲れも溜まっていることだろうから。殿下が見捨てるとでも言わない限り今後も彼女は隊に同行し続ける。出来る限り守るつもりだ。

だが、足手まといになつたらそれも言っていられない。  
彼女一人のために隊の全員を、殿下を危険に曝すことは出来ないからだ。

後ろ髪惹かれようが、後々後悔しようが優先すべきものは変わらない。  
い。

「足はどうなっている？肩の傷も前回とはいえないだろう？今は身体を休めるべきだと思うが」

至極もつともな忠告は、反論を挟む余地を与えない。

忠告どおりにすることが、自身の身体にも隊にとつても一番なのだと解る。

フォルだったら違う答えが返ってくるんじゃないかと。反対されても、説得できるんじゃないかと、どこかで甘く考えていたエミの頭の中は、何か言わなければと思うのに、何も浮かんでこなかった。  
フォルの口調はこちらを咎める訳でも、非難している訳でもない。  
只当たり前の意見を言ってくれているだけであって、他意はないだ

ろう。

だけど、じつと見られているから、もつとも過ぎる意見だから

『そうですよ。ゆっくり身体を休めます』とか、

『その場所まで行けば座るし少しの時間にするので、医薬担当としてこれくらいさせて下さい』とか、

あははと軽く返すことができなかった。

「……………」

言われたとおりに何もせずじつとするとして。

『ごく潰しの足手まとい』誰もそう思っていないくても。皆が動いているときに自分ひとり休んでいることが悪いなと思うことが心に錘を載せていく。

この世界においての無いに等しい知識で何が出来るか考えたとき、これしかないと思った。

ラウルに習って覚えた数種類の薬草。

痛み止め、化膿止め、解熱剤、下痢止め。自信を持って覚えていると言えるのはこの四種類だけ。

だが、今一番消費の烈しい薬もこの4種類だ。

じつとして何もすることが無いと、考えなくても良いことばかりを考えてしまうから、危ないと言われようがやってみたかった。

鞆の中身を、幸福を増やし、心の負担を減らしたかった。

何のことは無い、只の自己満足な行動だ。

「……………お願いします」

無理はしない。見える範囲にする。ほんの少しで良いから。

許して欲しい。

思いを込めて、頭を下げる。





? - 2 2

進む道の先

3 (後書き)

もっと勉強しておけばよかった。

護身術なんかも習っておけばよかった。

いろんな知識を身につけておけばよかった。

いつも気付いたときには遅くて。

私達は学ぶ機会を逃していく。

『学ぶ気さえあれば、何歳であっても学ぶことは出来る』

よく言われるその言葉も、

分かっている。

実践している。

でも……

それでは到底たりないこの現状。

学んだ知識が欲しいのは今この時で……

もう決して知識に手の届かないここでのなのだから。

それさえあれば・・・

役に立てただろう。

一人でも顔を上げられただろう。

自分の価値を信じられたかも知れないのに・・・。

\*\*\*\*\*

フォルから許可を得た、彼や仲間から見える位置で座りこみ、エミは手元のめぼしい薬草の根を傷つけないように採取していた。

『ロニン』と呼ばれる捨てる場所の無いこの草は、根が痛み止めに、葉は炎症反応を抑えてくれる作用を持ち、怪我の多い一行の中で重宝されている。

他の草がたいてい一つの効能であったり、効能が多いものほど精製方法が困難であるのに対し、ロニンは乾燥させたり煎じたり、潰して塗りこむだけで良いのだから、ひとつの場所に留まらず、充分な器具の無い状況ではありがたい。

たまたま、休憩する場所の側に群生していたのを発見したときは嬉しかった。

内服できる量も時間も無視して乱用していたせい、目減りしている薬。

鎮痛薬なくしては他者の目を欺くことは出来ない状態にまで追い込まれていた体では、何もできないと、焦りばかりが募り始めたところ。

飲めば痛みから解放され、動ける状況に、このときエミは依存し始めていた。

長い旅路で痛み止めでもぬぐいきれない足の痛みや疲れに俯きぎみだったことが功を奏した。

日本では通勤にも通学にも車を多用し、たまにジョギングをしていたとはいえ、補正された道ばかり。トレイルランニングもあったが、あくまで高性能な靴と万全の準備があつてこそ。

文明と言う社会に守りに守られた軟弱な足。履きなれない固い靴。靴ズレ。自然のままの道なき道に、常に張り詰めてきた神経。慣れ

ない環境。

アドレナリンにも限界がある。

だから、今の休める状態が有り難かった。

只ひとつの難点として、痛み止めとして使用するためには煎じて飲むしかないのに、ロニンは毒と間違わんばかりの苦味を有していた。こっそり飲むたびに、<sup>しか</sup>顎めそうになる表情を、出しそうになる呻きをあらゆる工夫によって隠し、耐えて来た。

甘いものでもあつたらなあ・・・と何度思ったことか。

当たり前にあつた『糖衣錠』の偉大さを感じる。

出来たら作ってみたいけれど。

そんな贅沢いえそうも無い。

とはいえ肩や足の傷や痛み。

状態を思えばこれからロニンはまだまだ手放せそうに無い。形としては葱か菰か・・・。見た目に反して臭いの薄いこの薬草を、目に見える範囲全部採取したとしても大した量では決してないけれど。

ゼロと1では全く違う。

全員には足りないが自分の分くらいにはなってくれるだろう。

袋を手元に引き寄せて。摘んだそばから入れていく。

紐で束にし、かばんに括りつけるのは後で。

本当はここで干せばいいけれど、何時までこの場所で待機するか分からないため、即時行動が起こせないようなことはしない。置いていくのも勿体無い。

紐で括るのも、みんなの中に入ってから。

一度、遅れた上に勘違いで行き先を間違え、迷惑をかけた身では足手まといにならないことは重要で。

支持に従うこと。遅れないこと。一週間強の生活で覚え学んだことだ。

何も分からない。

何も出来ない。

守られるしかない。

重荷にしかない。

だからこそ幼子のように全てを聞き、出来ることはないかと神経を尖らせる。

隊に背を向けて座っている状態で、後ろから不自然な動きをする左が見えないように身体の向きを調節し、左手は動かさずに右手だけで土を掘り、根についた土を落とす。

肩の傷は自分では見ることは出来ないけれど、雨の降った日から熱を感じていた。初めは冷やせばどうにかなるかなんて甘く考え、水で洗い薬を塗りこめ様子を見ていたが、鈍くなる感覚に今では動きにくく感じる指先。

どうなっているかなんて見なくても分かる。

傷口は化膿しているだろう。

見えない傷、言い出せない言葉、だるさの抜けない体調。

・・・溜息が出る。

足手まといにはなりたくない。

だが倒れたらもっと迷惑をかける。

一人で暮らししていく術も無い今の段階では早めに相談したほうがよさそうだ。

・・・ラウルさんが帰っていたら少し見てもらおう。

きつと何か打開策をくれるに違いない。

もうひとつの頼みごとと共に。

考えすぎてだるい上に深慮が及ばなくなった思考を放り投げ、目の前の薬草採りに集中すること小一時間。

背中から買出し組の帰還を知らせるセディオンの声が聞こえた。

補足

トレイルランニング（Trail running）：ランニングの一種で、舗装路以外の山野を走るスポーツのこと。

糖衣錠：薬剤の安定化、味の矯正、臭いの調節ため薬の表面に白糖で皮膜を施し、飲みやすくしたもの。

アドレナリン：神経興奮物質となるホルモン。詳しくはWikiなどどうぞ。

お久しぶりです。

まだまだ終わりそうにないこの話にお付き合いくださり、ありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

かりんとう



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6899k/>

---

平凡な日々を愛したひとへ

2011年9月27日23時46分発行